

# TS転生したら、ふたなり娘達の肉便器？

榊 樹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初のR18作品です。

主人公が特殊な家系の神社の娘に転生。

巫女になってふたなり娘達に中出しされまくるお話です。

色んな作品のキャラ、もしくはそれを元にしたキャラが出て来ます。

理由はキャラ設定が面倒だから。

タグにはありませんが、基本的小ご都合主義です。

設定に深い意味は特にありませんし、原理とかも全く考えてないのでその辺は頭を

空っぽにして呼んでください。

それから、♡マークも多用します。

# 目次

第1話：肉体改造の準備の準備（簡単に言

うとクンニ） 1

第2話：肉体改造の準備（結果的に寸止め

地獄） 31

第3話：肉体改造という名の孕ませツク

ス（寸止め地獄の次は絶頂地獄）

65

第4話：朝勃ち処理は妻の役目？（母様の

おちんポを躱けます！） 97

第5話：媚薬マッサージからの初アナル

騎乗位（アナルビーズもあるよ）

133

第6話：節操無しの母様にお仕置きを（シ

ゴキ倒すだけ） 165

第7話：おちんぽケース冬萌ちゃん♡（そ

んな生意気なメスガキはトイレに連れ込

まれちゃうよ） 206

第8話：想い人との擬似イチャラブセツ

クス（幼女にちんぽを添えて） 233

第9話：寝てても母様ちんぽは最強♡（素

人童貞ちんぽにも敗北しまくります♡）

266

第10話：お隣さんはDSの皮を被った

変態さん♡（ロリに無様に敗北する調教

済み未亡人） 291

第11話：ドスケベビッチ冬萌ちゃん  
（でもやっぱりクソ雑魚）

—————  
328



## 第1話：肉体改造の準備の準備（簡単に言うとクンニ）

現代日本で死んで現代日本に転生して、性別が男から女に変わって明日で五歳の誕生日。家は母子家庭で細々と神社を営んでいる。

基本的に神社としても機能しているが、他よりも特殊らしく、その特殊性故に国からそれなりのお金が貰えている為、そこそこ裕福だ。

その特殊性とやらなんだが、五歳になったら俺もやる事になるって事でその時になったら教えると言われ、未だに知らない。だが、明日には分かる。

年甲斐もなく（精神的に）ウキウキしながら夕飯を母様と食べ、一緒にお風呂に入る。

そして、いつの日からか日課となったある事を母様にする。

それは  
——

「啜えるよ？　．．．あむ．．．ん♡」

「んあ♡．．．ん♡．．．ほ、ホントに、ん♡．．．上手だ、な．．．あん♡」

(そりや、元男ですから)

——母様の股に生える30センチ近いビンビンに勃起した男性器の処理だ。

いやなにしてんね、と言う方もいるだろう。だが待つて欲しい。俺は悪くない。悪いのは俺を誘惑するこのデカチンポだ。これを見ただけ、或いはオスくさい臭いを嗅いだだけで、もうアソコがぐしょぐしょになってしまふこの身体が悪い。

俺は悪くねえ！

始まりは、いつだったか。

もう一年も前だった気がする。

母様にチンポが生えていた事は知っていた。赤子の時に寝たフリをしてる俺の小さな手で自分のモノをシゴいていた時は驚いたし、俺が泣いた時に何故かチンポを口に突っ込まれた時は思わず笑ってしまった。

だが、偶に俺の近くで一人で行為をしながら悲しそうに言う母様の言葉通りなら、抜いても抜いても満足しないし、遅漏なのか抜くの一回だけでも相当労力があるらしい。だから、抵抗するのも可哀想だと思つて寝たフリなどをしながらにぎにぎしたり、ペロペロ舐めたりした。



結果、大変お気に召したらしく、その頻度がほぼ毎日になったりもした。

そんな母様と風呂に入るのだが、入る度にビンビンにしている。俺がそれを凝視すると顔を赤くし、あそこをビクビクさせながら我慢汁を出して、内股でモジモジする姿は我が母ながら可愛いと思ってしまった。

実の子に何興奮しとんねん（人の事言えない）

そして、ある程度まともに話せるようになってから中身が俺だとバレないように慎重にチンポの事を聞いていると、何故か処理する事になった。正直、今でもなんでこうなったかよく分からん。

家の特殊性はその股にぶら下がっているものかと聞いた事があるが、半分正解で半分不正解のようなもの、と言われて流された。

まあ、確かに俺の股にはそんなものは無い。あるとすれば、まだ未使用のぶにぶにの愛液でぐしょぐしょになったロリマンコくらいだ。因みに玩具でそれなりに開発済みだ。膜は健在・・・多分。

最近ではやたら熱心に母様が性教育をしてくるが、基本的に知識的なものばかりなので、年齢的にも母様の前でという意味でも弄る訳にはいかず、しゃがんだままタラタラ

と垂れ流すだけなのは酷くもどかしい。

最初の時に母様のモノは長過ぎて物理的に半分も啜えられず、残りは両手でシュツシュツとシゴいてあげたのも弄れない原因だ。

だって途中からいきなり自分のを弄りだしたら、訝しまれるじゃん。決して、M字開脚の状態のまま焦らされてるみたいで興奮するとかそんな事は無い。決して。

「あ♡・・・んひっ♡・・・だ、だめっ♡いくっ♡イックウウウ!!♡♡」  
「んんっ!・・・んぐ♡ツツ♡・・・ツ♡・・・ん♪」

どうやら母様がイっいたらしく、脚をガクガクと痙攣させながら口内に大量の粘っこくて、くっさい子種が吐き出された。頭を手で抑えられ、とんでもない量をドクドクと吐き出すので容赦なく子種が喉を通っていく。

臭いし不味いし、喉に絡みついて呑み込み難いしでいい事なんて無いのに、俺の身体はそれだけで軽くイっってしまう程に虜になっていた。

前世での自分のよりも太く、遅しい。そんなものに自分の中を強引に犯されてると考えただけで背徳感が凄い。未だに飲むのに四苦八苦しながら、喉から鼻腔を通って漂ってくる本能を刺激するかなのような強烈な臭いに頭がぼーっとしてくる。

気付けば、次を強請<sup>ねだ</sup>るかのように出す前と変わらずピンピンなそれに御奉仕していた。

「ん♡♡♡もつ♡♡♡ん♡♡♡もつ♡♡♡ひょうらい♡」

「ま、待て♡♡♡冬<sup>ともえ</sup>萌、ん♡♡♡い、イツた♡♡♡ああん♡♡♡ばかり♡♡♡♡♡だか♡♡♡ら♡♡♡敏感だ♡♡♡て♡♡♡いつも♡♡♡言ってる♡♡♡だろ♡♡♡ん♡♡♡ひ♡♡♡」

母様が何を言ってるか嬌声ばかりでよく聞こえない。

まあ、最初の頃に何度も言われてる敏感だからどうこうって話だろう。そんな事言う割には俺の頭を抑えてる手を離す気配が無いし、下は既に俺の口を犯そうと子種が尿道でビクビクと脈動してるぞ？

はやくはやく♡我慢せずに出して♡

「♡♡♡あ♡♡♡ん♡♡♡♡♡」

む、今日はヤケにしぶといな。



でてくれる。これが堪らなく嬉しくて、最後の仕上げは率先してやっってしまう。

さあ、母様♡まだ終わりじゃないよ♡

「ズゾゾゾ♡」

「あひいいい♡♡す、吸い取るのらめえ♡それ好きにやによおお♡♡」

「ズゾゾ・・・んちゅ♡ツ♡！・・・はあ♡」

尿道に残った凝縮したような塊が出てきて、俺の身体は軽くイキ、母様が少し満足したような顔になった。

出来れば思いつ切り満足させたいが、母様の性欲は凄まじ過ぎて歯止めが効かなくなってしまう。

全く、母様はどれだけ絶倫なんだ♡

「はあ、はあ・・・毎日すまん、冬萌」

「ううん、母様が喜んでくれたら、冬萌はそれで満足。それにしても、いつもビンビンだけど大丈夫なの？」

「ツ！・・・はあ、ホントに私には勿体無い位いい子なんだから♡大丈夫・・・と言い

切れないのが情けないが安心しろ。もう少しで終わる」

もう少しで終わる？ どう言う事だろうか？

思い返してみたら基本的に常時立たせてる母様を心配して聞いてみたが、ちよつとよく分からない解答が返つて来た。まあ、母様がいいと言つてるのだから気にする事はないか。

風呂の俺用の小さい椅子に座り、母様は自分の椅子に座つて俺は基本的に母様に洗つてもらふ。あ、今更だが、俺の今世の名前は冬萌<sup>ともえ</sup>。

神薙<sup>かんなぎ</sup> 冬萌<sup>ともえ</sup>だ。神社故にこんな名前になったのかは分らんが、結構気に入ってる。

髪と顔を洗い終え、母様が自分のを洗うのを待つ。この間は特にする事も無く暇なので、いつも母様の完璧なプロポーションを眺めている。

母様は綺麗な艶のある黒髪のロングで女性としては長身。もしかしたら180はあるんじゃないかな？ キリツとした表情が印象的な凄まじい程の美人で、町ではいつも視線や黄色い歓声を浴び続ける為、外出自体はそれほど多くないし、人が多い時間はあんまり出歩かないようにしてる。昔、母様が外出する時に限つて交通事故やらなんやら

が多発したらしい。

俺の容姿は母様にソックリで、母様をそのまま幼くしたような感じだ。我ながら将来が楽しみである。

母様のその豊満なお胸様はIあよりのHカップでキュツと引き締まったクビレのようなラインの腰周りに、ちよつと大きめなぶりつぷりのおしり、魅惑的なお肉が付いたモデルのようなスラツとした脚フェチには堪らない綺麗な美脚。そして、未だにバキバキのピンピンに反り勃ったおチンポ。

男の夢をこれでもかと凝縮した女神のような抜群のエロシコボディである。母様が仕事で出掛ける時はよくオカズにしている。特にバベルの塔のようなそのチンポを。

・・・いや、最初はそのボディやら俺がシゴいて乱れてる姿を想像してるんだけど、気が付けばいつも頭の中はチンポで一杯になってるんだ。決して、故意では無い。

「冬萌、身体を洗うぞ」

「うん・・・母様？」

「ッ！・・・な、なんだ？」

いや、「なんだ？」じゃねえよ。

いつもは普通に互いの椅子に座ってやってんじゃん。

なに、いつもこうしてます、みたいな感じで母様のチンポとお腹の間に座らせるの？

子供一人を支えられるってどんだけ剛直なんだよ。しかも、俺の脚が母様の脚を挟むようにして座らされたから、強制的に開脚状態になって、チンポがスジに直、接……んあ♡あ、やば♡腰が勝手に♡

「い、いや♡……にゃんれも……にゃい♡」

「そうか……よし、洗うぞ」

ん♡んあ♡ヤバイヤバイヤバイ♡腰がヘコヘコするの止められない♡擦れば擦る程、愛汗が溢れ出して来て、それが潤滑油になって快感が次々に……♡

「んあ♡……ッ♡……んひっ♡」

「コラッ、冬萌。動いたら洗い難いだろ」

「ぎ、ゴメン……なひゃい♡」



母様の洗剤に塗れた手が気持ち良すぎるッ♡

ヤバいってば♡こんなのすぐにイッちやうって♡

んひやつ!? 母様の手が俺のちつぱい弄ってるう♡

「と、冬萌ッ。抱き寄せ．．．ちや．．．んッ♡だ、ダメ．．．だ．．．んあ♡」

「んっ♡んっ♡んっ♡」

ああ♡これ最高う♡♡腰止まらにやいい♡

俺の上半身の半分はあるチンポを抱き寄せて、身体でシコるの気持ち良すぎるう♡

熱い肉棒が肉厚に擦れるのがこんなに気持ちいいなんて知らないよお♡

「ま、待てッ．．．出る．．．♡」

「んっ♡んっ♡．．．あむ♡．．．らひてえ♡かあさまあ♡」

「しゃ、喋ったらッ．．．イクッ♡イククウウウ♡♡!!」

「んぐッ!!??」  
~~~~~♡♡♡!!  
．．．あ♡．．．ああ♡．．．（しゅ、しゅごしゅ

ぎんごう♡）

お股から一瞬で身体全体に電流が駆け巡るって、こういう事を言うのか・・・♡  
素股って言うんだっけ？

母様のチンポで初めてやったけど、癖になりそう♡

今までで一番深くイッたし、チンポを身体に密着させてるから、ドクドクと脈動するのが下腹部からちよつと上で感じれる。

それに安定の量と濃さを誇る母様の子種でお腹がちよつと膨れて妊娠してるみたい♡  
確か、精液ポテだっけ？

「んっ♡・・・コラ、冬萌ッ。折角、洗ったのにまた汚れてしまったじゃないか」

「うう・・・ゴメンなさい、母様。でも、母様がここに座らせるから・・・」

「へ!?!・・・あ、ああ、すまなかつた。・・・しまったな。今日でこの地獄が終わると思うとつい、抑えが聞かなくなってしまう。反省しなければ」

地獄？ 終わる？ 何の事だ？

てか母様、この距離で小声で話しても丸聞こえだよ？

とまあ、そんなハプニング？ があつてその後も座る位置は変わらず、俺が我慢する

形になったものの無事、身体を洗い終えた母様と俺は湯に浸かってのんびりし始めた。俺の場所はもちろん、さつき洗った時と同じ、母様のチンポとお腹の間だ。こっちは割といつも通りなのでスルー。

二人揃ってふう、と息を吐きつつものんびりしてるんだが、ここで俺は疑問に思った。何故か未だに興奮が収まらない。ここ最近は何日に日に性欲が強くなっていつている気がするが、いつもなら最初に母様を二回抜いただけで、俺は収まっていた。

いや、正確には収まってるというか、我慢が出来る程度には抑えられる、なんだがそれは些細な事だ。

それがどうだ？

今も水面からひよっこりと顔を出す母様のチンポの亀頭から目が離せない。てか、母様のもいつもよりでかい気がする。40センチは軽くいつてるんじゃないやね？

まあ、いいや。

「と、冬萌ッ・・・急に・・・何をッ」

んおっ？ どったの母様？

「いらッ．．．や、やめな．．．さいッ♡」

母様の言葉が理解出来なかったが、気にせずに俺はフェラとシゴくのを続行．．．うわっ、いつの間に俺はそんな事を（棒読み）

まあ、あれだ。

やってしまったものは仕方ない。

徹底的にヤろう♡

そんな訳で根元を内股とロリマンで挟んで、シッコ♡シッコ♡シッコ♡

「くあっ♡．．．ま、待て．．．んひッ♡．．．ここでは．．．ダメ．．．だあッ♡」

．．．母様。

なら、シゴいてる俺の手に重ねているその美しい手を離してはいかが？ ホントは母様も出したくて堪らない癖に。前に途中で止めたらガチ泣きしそうな顔になったのはどこの誰だよ♡

「ともええ♡ともええ♡」

「ツ♡!?　　~~~~~ツ♡」

ちよ、いきなり甘えた声で名前呼ぶの禁止ッ♡

そんな切なそうに言われると子宮がキュンキュンしてくるう♡

あ、因みに子宮自体は母様のチンポを見たり臭いを嗅いだりするだけで即落ちしてます♡

飲み込んだ時なんて、子宮口がぱくぱくしてるのが分かるくらいには激しく開閉してるくらいだよ。

「冬萌ツ♡イクツ♡イクからツ♡イクからツ♡」

はいはい、イクから離してとかいつものそんなツンデレ発言？　止めない止めない。

「受け止めてえええええ♡♡!」

「ツツ!!!?　　・・・んぐツ♡んんツ♡・・・ぐ・・・んっ♡・・・ぷはあ♡・・・はあ♡はあ♡」

♡  
」

や、ヤバい♡

完全に不意打ち喰らった気分♡

普段はクール美人な癖して、こういう時だけドロドロに甘えてくるし、偶に今回みたいな不意打ちがあるから、油断も隙も無いよ♡

「冬萌・・・どうして急」

「ズゾゾゾ♡」

「にひひひひ♡♡!! ひよもええ♡いきなりはらめええ♡♡」

「チュポツ♡・・・ツ♡ツ♡・・・んあ♡」

ああ、母様が可愛過ぎる♡

「はあ、はあ・・・冬萌、ホントにどうしたんだ?」

「母様のチンポが水面に出てて、いつもはそんなに大きくないからどうしたんだろ、つて見てたら我慢出来なくて・・・」

「そ、そうか♡：あれだ、いつもより大きいのは後から説明するから、早く上がろう。逆上せそうだ」

「ん、もう少しだけ、もう少しだけでいいから浸かってから上がっちゃダメ？」

「？・・・どうかしたのか？」

「うん、お腹がね。一杯、母様の子種を飲んだからタプタプになっちゃった」

「ツ!?! そ、そうか。なら仕方ないな。もう少しだけ浸かってから上がるう」

母様、なんで今おちんちんがピンって更に大きくなったの？ 股に挟んだままだから、すっごい分かるんだけど。

そんでもって、またスジを刺激して、下のお口が凄い事になっちゃった♡  
風呂に入ってたなかったらお漏らしみたいになってたかも。

「しかし、ホントにタプタプしてるな。どれ、楽になるよう撫でてやろう」

「んツ♡・・・ツ♡・・・あツ♡」

「ん？ どうかしたか？」

「い、いやツ♡・・・なんでも・・・っ♡・・・ないい♡」

「ふふっ、そうかそうか♡」

ちよ、待つて待つてえ♡

今、お腹撫でられてるだけなのに感じてると思っただけど、これお腹の中の子種に反応してるよ♡

しかも、母様それに絶対気付いてるよ♡

撫でもねちっこく焦らすようになってきたしい♡

嘘でしょ♡撫でられてるだけなのにもうイきそう♡

「大丈夫か？ 辛いならもう上がるが・・・」

「いやッ♡上がっちゃ・・・ダメッ・・・もう少し・・・ッ・・・だから・・・うあ

♡」

「そうか・・・ふふっ、順調順調」

ヤバイ♡もうイクッ♡母様の手も激しくなつて♡

「イクッ♡イクッ♡イツくくく♡♡！・・・ッ♡・・・あ♡・・・ああ♡」

「ふう・・・さあ、そろそろ逆上せそうだ。上がるう」



「は、はひっ♡」

イキ疲れて意識が朦朧になる中で見えたのは黒い笑みを浮かべながらこちらを覗き込む母様のどんな表情でも綺麗な顔だった。

◇

「んっ・・・」

眠気が消えて、目が覚める。

ゆっくりと目を開くと蠟燭の火しか光が無い薄暗い部屋に居た。周囲を見渡そうにも首しか動かない。

「？」

不思議に思い、自分の状態を見える範囲や肌に触れる感触で把握するととんでもない格好をしている事に気が付いた。

面積が小さな台のような物の上で踵を上げた状態のまましゃがんでガバツと左右に膝を開き切った所謂、エロ蹲踞の体勢。両手は後頭部で組まされ、手と膝は紐で縛られて解ける気配が無い。そして、下着すら着ていない完全に全裸だった。つまり、エロ蹲踞状態なので下の秘部もちっぱいも丸見えだ。

「!? え、え? は? . . . んっ♡」

あ、ヤバっ。

傍から見たらどんな風に映るのか想像したら、愛液が垂れて来た。

あっ♡乳首までビンって勃起しちゃった♡

って、こんな事してる場合じゃない。

ぐしよぐしよのビンビンにさせたまま頭だけ落ち着かせて、見える範囲を見渡すとある事に気が付いた。

ここ、ウチの本殿だ。その中央に私は縛られてて、前には襖らしきものが見えるから・・・え、て事は今俺の後ろに祭壇があるって事?

ちよ、タンマタンマ!

流石にそれはマズいって!

神様が祀られてる目の前でこんなエロい格好しちやってるよ！ 母様どこ行つたの

!?

ほら！ 愛娘がエロい格好で縛られてますよ！ 最近はいつも俺をオカズにして隠れて抜いてる母様！ ここに今までに無いオカズが捧げられてますよ！

あつ♡どんどん愛汁が溢れて来るう♡

そんな馬鹿な事をしてると不意に目の前の襖がゆつくりと開いた。そこに居たのは外のお仕事に行く時に着る、脇から太股にかけてパツクリと開き、下にはインナー、肩と袖別れた脇や横乳、太腿が丸出しになる改造巫女服姿の母様だった。横乳はインナーが形をくつきりと映していてぎやくにエロく見える。因みに母様の着る全ての服は構造上、股間が盛り上がりにならないようになってる為、大きなテントは張ってない。

「母様！ 母様！」

興奮してたとと言っても不安が無かつた訳では無い。

この世界で最も信頼している人物の登場に駆け寄ろうとするが、膝を縛ってる紐は同じで後ろで繋がっている。その為、膝を前後では無く、上下にヘコヘコするだけでそれ

以外は全く動けなかった。

「・・・ッ！」

そんな俺を見たと同時に固まる母様。

なんか今、巫女服の腰辺りからビリッて音が聞こえたような・・・。見た感じ破れた箇所は見れないから気の所為か。

「母様?！」

その後、暫く待ってもうんともすんとも言わないので声を掛けると、我に返ったかのようにハツとして、俺の痴態をガン見しつつも話し掛けて来た。

ひうつ♡し、視線が・・・んっ♡

「冬萌、これからこの神社の娘に代々行われる儀式を始める」

ぎ、儀式?

それとこの格好になんの関係が・・・ちよ、見過ぎ♡

「ツ・・・うく・・・今から、その儀式、についてっ・・・はあ、はあ、実際に行・・・いながら・・・説明する」

うん・・・？

なんか母様、かなり苦しそう・・・？

そして、やっぱり布が破れる音が聞こえるような・・・。あ、落ち着いたのか凜とした表情に戻った。

そんな疑問を他所に懐からガラスの小瓶を取り出した母様。中には何も入っていないと思ったら透明の液体が入っていた。

「これは代々伝わる秘薬で神薙家の者の身体に塗る事で効果を発揮する。百聞は一見にしかずだ。早速、始める」

そう言つて、瓶の蓋を開けて筆を片手に持ち、こちらへ歩み寄つて来た。・・・やつぱり、ミチミチつて音が聞こえる。

「か、母様！ この格好も何か意味が？」

「え．．．あ、ああ。その体勢が一番都合が良いのだ。実際、私もお前と同じくらいの方に母様．．．私の母親にこれをさせられた」

母様がこんな恥ずかしい格好を．．．ん♡

や、ヤバい、シヨタなおちんちんの母様を想像したら凄い破壊力。

「さて、さっさと塗るぞ．．．うん？」

筆を液体に漬けた状態で母様は私の股辺りを見ると固まってそこを凝視した。俺も顔を下に向けてみると愛液がダラダラとはしたなく垂れ続けていた。

「ツ!？」

顔が熱くなる。

フェエとか母様の前でイッたりしてるけど、恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。そん

な俺を見た母様は、溜め息を吐くと、瓶と筆を床に置いて俺の前でしゃがんだ。

か、母様の顔が俺の股の目の前に・・・ひうつ♡

い、息があ・・・♡

「全く、こんなにも垂れ流しては秘薬が意味を成す前に落ちてしまう。・・・む？

更に増えた？ まさか、私に顔を近付けられて興奮したのか？」

「うう・・・言わないでえ・・・母様の意地悪う」

「ふふつ、すまん。ちよつとしたジヨークだ。・・・さて、いつまでもこうしてる訳にもいくまい。舐めとってやろう」

「へ？ ちよ、ちよつと待つ」

「ん・・・」

「ンヒイ!?!♡」

母様が顔を近付けて俺の筋に軽く口を付けた。

たったそれだけなのに、身体を電流が何度も駆け抜け、一瞬頭が真っ白になった。だが、戻ったのも束の間、母様は容赦無く俺の愛液を舐めだした。

「ちゆる・・・じゆるるッ・・・くちゆ」

「ンヒイイイ！ ♡♡やめへええ！ ♡母様！ んにやああ♡♡」

一瞬だった電流が継続的に全身を駆け巡る。

頭の中だけではなく、視界すらもチカチカと点滅する。

縛られてる為、膝を上下にガクガクとさせられるだけで快楽を何処にも逃がせない。快楽から逃げるように腰を引こうも上手く動かせずに、逆に突き出す形になってしまい、その状態で母様に腰をガツチリと掴まれた。

「んじゆるるるる・・・くちゆくちゆ・・・」

「イってるうう！ 母様イってるから!! ♡んにやあああああ!! ♡舌が入って来た

あああ♡♡」

声がるまるで抑えられない。

肺の空気を全て吐き出す勢いで叫ぶが、母様の攻めは寧ろ勢いを増し、膣内に舌が入って来て初めから知っていたかのように俺の気持ちいい所ばかりを刺激してくる。



「あああああああああああ!!  
♡♡」

叫び声しか上げられない程の強烈過ぎる、5歳の身では到底耐えられないであろう快楽の嵐が全身を襲う。それでも、母様は舌で攻め続け指まで侵入させ、膜を破らないように別の気持ちいい所を攻めてくる。

そんな時、身体の奥底から強大な何かが膨れ上がるのを感じ、これ以上はマズいと本能的に察し、母様に外聞なんか気にする事無く必死に懇願するように叫んだ。

「止めて!! 母様! 母様! 何か来る!! 嫌だ! 嫌だ! 怖いよ!! 助けて母様!!」

そんな私を見た母様は舌を止めてゆっくりと引き抜いた。強烈な快楽の嵐は収まらないが追加される事は無い。身体はビクビクと激しく痙攣させつつも心の何処かでは確かに安堵していた。

だから、母様が立ち上がって安心させるようにお尻を掴んでいた左手で慈母のように優しく俺の頭を撫でる最中、母様の右手の指はまだ俺の腔内に残ってる事を完全に忘れていた。

「大丈夫だ。怖がる必要は何処にも無い。身を任し、委ねなさい。そうすれば楽になれる」

「・・・あへえ♡?　・・・母様あ?　どう言う——」

「そらつ、イクぞ」

「——こ・・・へ?　ま、待つてイヒイイイイ!!　♡♡」

撫でていた左手で腰を突き出され、膣内のGスポットを右手が掻き乱す。乱暴に然れど傷付けないように優しく。

指だけでなく、手の平も肉厚を擦ってもう訳が分からない。頭は真っ白になり続けるが、何故か気絶は出来ずに快楽を受け続ける。

「ヒギイイイイ♡♡来る♡何が来る——!!　♡」

「身を任せなさい。大丈夫。母様が付いてる。何も怖くないよ」

顔のあらゆる穴から液体が溢れ出てグシャグシャの顔になる。そんな俺を母様の甘い声が励ましてくれる。その声を聞いただけで不思議と不安や恐怖は消えていく。

同時にその声を聞いただけで身体の奥底から溢れ出ようとする何かを必死に開けま  
いとしていた蓋を簡単に開けてしまった。

「ああああああ!! ♡イクうううう!! ♡・・・かはっ♡・・・あ・・・あひ・・・」

一気に溢れ出す、声を出す事すら叶わない、一人が受け止めれる領域をとうの昔に  
凌駕した快楽が全身を何度も何度も駆け巡り、勝手に激しく上下する膝だけではまるで  
間に合わない。

出来る限り身体が仰け反り、股から派手に弧を描く透明なおしつこと辺り一帯に撒き  
散らすように潮が舞う。

全身がガクガクと残像が見える程に痙攣するが、それでも快楽の嵐は収まらない。

母様がクールダウンするようにゆっくりと指を動かす速度を遅くしていき、それに伴  
うように快楽も収まってくる。指が完全に止まると快楽は収まり、ゆっくりと腔内から  
引き抜かれただけで数回マジキして身体が跳ねる。

「あ・・・ああ・・・あへえ♡」

「ふふっ、よく出来たな。偉い偉い。これで準備の準備は完了だ。少し休憩してから薬

を塗るぞ・・・って聞こえてないか」

意識はあるが、何も情報が入って来ない。

そんな俺を母様は嬉しそうに見下ろして、落ち着くまで頭を撫で続けてくれた。

イキ疲れた俺は眠る・・・事は無く、暫くの間、身体をビクビクさせて絶頂の余韻に浸っていた。

## 第2話：肉体改造の準備（結果的に寸止め地獄）

「はあ．．．♡はあ．．．♡」

静かな部屋に響く妖艶さを含む吐息。それが自分のものだど気付いただけで、こんな媚びるような声を抑えようとしても身体は言う事を聞いてくれず、寧ろより興奮してしまふ。

「落ち着いたか？」

母様が少し心配そうな声でそう問い掛けてくる。身体はまだ弱々しくもビクビクと痙攣しているし、母様に頭を撫でられただけでも何度か軽くイってる。そんな状態で返事をする事が上手く出来ず、呂律が回らない返事を返した。

「か、かあ<sup>母</sup>ひやま<sup>様</sup>．．．ま<sup>ま</sup>ひ<sup>だ</sup>や．．．む<sup>無</sup>ひ<sup>理</sup>い．．．♡」

「そうか、ならそろそろ薬を塗ろう」

あつるえく？

どうしてそうなつた？

「かあ<sup>母</sup>ひやま<sup>様</sup>・・・ひあ<sup>違</sup>うう・・・」

そんな抗議の声も「そう慌てるな」と言われて聞く耳を持たれない。そのまま母様は床に置いていた瓶と筆を持つとこちらへ寄つて来る。

目の前でたぶたと心地いい音を立てながら、筆に液体を浸透させていく。筆を液体から取り出すと、トロリと少しの粘付きが見て取れた。

ま、待つて。今の状態でそんなネバネバしたもので身体を弄られたら、気持ちよくなつちやうう♡

「さあ、始めるぞ」

「待つ・・・んあ♡・・・んん♡・・・ッ」

トロリとした筆が円を描くように優しく左の綺麗なピンク色の小さな乳輪を何度も

回る。回数が増える度に粘りは増し、感度を刺激してくる。

うう・・・♡物足りない♡

いつもなら焦れたくもその内イける快楽。それでも、あの強烈な絶頂の後だと快楽が少しづつ蓄積されるだけでイける気配がまるでしない。

くちゅ・・・ぬちゃ・・・くちゅくちゅ

「んあ♡・・・くっふ♡・・・んひい♡」

イヤらしい粘りが静かな部屋に響く。

粘っこく乳首の側面を沿うように乳輪を回っていた筆がゆっくりと乳首の側面を上り、筆先がピンピンに立った乳首の先っぽをクリクリと弄りだす。

「んん♡・・・んあッ♡・・・ああ♡」

刺激が強くなって来た。

こちよこちよと筆先で意地悪したり、くにくにと乳首を軽く押し潰したりと、母様がこちらの反応を楽しむように好き勝手に捏ねくり廻される。

うう・・・♡両手を上げてるから自分で弄るより気持ち良い♡

最初はイク気配がしなかったものの、ここまで焦らされれば少しの快樂でイツてしまう程に敏感になる。おまんこもヒクヒクと開閉し、そのスジからはタラタラと愛液が溢れ出してくる。

ああっ♡イクイク♡もうイツちやう♡筆で乳首くりくりされただけでイツちやうう

♡

「んん♡・・・ツ・・・イツ・・・!? .....

あ、あれ？ イケない？

なんで？ ヤダヤダ！ なんで収まってくるの！



イク瞬間に急激に快感が引いていく。

それはイツで満足した後の前世で言う所の賢者モードに似ていた。だが、似ていただけで違う所がある。

まず、イツてないので満足してない。そして身体の内側の内側くらいに快樂が荒れ狂ってるのが分かる。

身体の奥底は熱くて堪らないが、表面は完全に萎えていた。

「!? . . . ? . . . んっ! んっ! . . . ?」

母様はまだ筆で左の乳首をくりくり弄ってる。だけど、段々と気持ち良いとは感じなくなってきた。必死に妄想したりして興奮状態に持つて行こうとするが、身体の奥底が熱くなるばかりで、表面は萎えたまま。

「母様! んひゃ! . . . イケないの! くふっ . . . 冬萌イキたい! . . . あははっ!」

とうとう快樂は感じなくなり、筆は只々擦っただけになった。

「ちよ、ひひひっ！ 母さあははっ！ 止めて！ 止めうひひっ！」

「ふむ、効果が表れてきたか。このくらいでいいだろう」

俺の反応を見てそう言った母様は筆を乳首から離し、また瓶の中の液体にたぶたと浸し、今度は右側の乳首へと筆を運び、左側と同じように乳輪をくりくりと回り出した。

「んん．．．♡．．．んあ♡」

ああ、来たあ♡気持ち、良い♡もつとくりくりしてえ♡あ、そこツ♡うひい♡

完全に収まった状態からでも、すぐに身体が反応し、左胸以外は発情してきた。そんな時に母様が塗り塗りしながら、この薬について説明しだした。

「神薙家の人間は成長と共に性欲と身体の感度が人よりも何十倍も敏感になる。だが、私達は何の力も借りずにそれを自力でコントロールする事は出来ない。これはそれを抑える薬。塗った箇所はある方法以外では一切の快楽を内側へと封じ込め、常に平常を

保つ事が出来る」

んひっ♡

あ、あんまり・・・あん♡耳に入って来なッ♡・・・いけど大体分かつ・・・た♡

「痛みすらも快感として変換し、封じ込む事が可能だ」

つまりいい！♡・・・媚薬とッ♡・・・反対のッ・・・♡効果つて事ね・・・んあ

！♡

「封じ込めたものを解放する方法は神羅家または、ふたなりとなつた娘達だけが持つて  
いる特有の霊力と呼ばれるものを身体に流し込む事で、それは発情という形で開放され  
る」

ふた・・・なり？ んあ♡・・・母様以外にも・・・ッ♡・・・居るつて・・・んん

♡・・・事？

「また、塗る量が多ければ多い程にその効力は増し、最大でどれだけ興奮状態にあつても例え絶頂の寸前であろうとも靈力の流し込みを止めれば、イク事は叶わずに通常状態へと戻る。だが、まさか儀式で絶頂寸前に効果が表れるとは思わなかったがな・・・」

ひゃあつ♡先っぽクリクリ好き♡

あッ♡イクイク♡今度こそイク♡絶対にイクウ♡

「イク♡母様♡いつちやう♡乳首だけでイツ・・・!?!」

う・・・嘘・・・だろ。

「む? どうした? 我慢する事は無い。存分にイキなさい」

ニヤニヤが隠し切れない惚けたとほような顔でこちらの顔を覗き込んでくる母様。その顔で分かった。今度は態とイケないようにしたんだ。

そんな考えを張り巡らせてる内に段々と引つ込んでいく快感。それに焦りを覚えて必死にイこうと腰が勝手にへこへこしたりするが、効果は無かった。

「いやあ！ イキたいの！ 収まっちゃヤ！ イカせてよ！ お願ひ母様！ もつと激しくしてえ！」

「む？ ああ、いいぞ。ほら」

俺の叫びに反応して弄る筆の速度を上げる母様。それでも快感は収まる一方でイク心配が遠退いて行く。

「ああ・・・ああ・・・母様あ・・・母様あ」

完全に冷めた身体。

イケない。

解放する為の霊力の操り方なんて今さっき聞いたばかりで分かる訳が無い。

自然と溢れ出す涙。

助けを乞うように母様の名前を呼び続ける。そんな俺の頭を瓶と筆を置いた母様はそつとその胸に抱き寄せた。

「すまない、冬萌。意地悪が過ぎたな。ほら、泣き止んでくれ」

「うっとう．．．イキたいのお．．．イキたいの母様あ」

「ああ、分かつてる。だから、ほら。泣き止んでくれ」

見つとも無く泣き付く俺を、優しく優しく頭を撫でて落ち着かせてくれる母様。  
んっ．．．やっぱり母様のお胸様は最高♡

「ん？．．．冬萌」

「ふえ♡．．．何？ 母様あ？」

「後一回、寸止めの刑だ」

．．．．．。

．．．!?

「え、ええ!? 母様、なんで！」

「ほう？ シラを切るつもりなんだな？ よからう。回数追加だ」

「待って母様！ 冬萌が悪かったから！ 泣き付いて母様のおっぱいに抱かれてえっち

な気分になろうとした冬萌が悪かったから！　お願い！　もうイカせてよおー！」

「そんな可愛らしく膝をカクカクさせて誘惑しても駄目なものは駄目だ。えっちな冬萌にはもう泣いても叫んでも寸止めしてやる」

「ゆ、誘惑なんてしてないもん！　あ……じゃ、じゃあ母様がそんな意地悪するんなら、冬萌、もう母様のおちんちんシコシコしてあげないもん！」

ふふん、どうだ？

これなら母様も俺をイカせざるを得ないだろう。

「……成程。この状況で私に脅しを掛けるとはいい度胸だ、冬萌。流石は私の娘だ。ならば、数十回の寸止め程度なんともないだろう。準備はいいな？」

「ごべん、な、ざい、いい!!　があ、さま！　も、うじばせん、んん」

母様には……勝てなかったよ……。

これが巷で聞く、即落ちニコマってヤツか……。

「はあ、全く。ほら、泣き止め。数十回なんて嘘だから、安心しろ」

再び母様の胸に抱かれる。

むにゆう、と顔の形に変化するメリハリのあるナイスな爆乳。流石に反省したので普通に甘える。

ああ、心安らぐ♡

なんか、いろいろと喚き散らして振り切れたからめっちゃ心行くままに甘えられる♡

幼児退行してる気がするけど気にしな〜い♡

「うん・・・ごめなさい・・・母様」

「・・・まあ、その・・・なんだ。私も悪かった。少々はしやぎ過ぎた。これからはきちんと寸止めする」

「うん。お願・・・い・・・ん？」

「そうかそうか。冬萌も分かってくれたか。それでは次はこの可愛らしくも綺麗で、折角舐めとってやったのにタラタラと端なく愛液を流すおまんこにクスリを塗り込むとしよう」

「ちよ、は!?! 母様! 話が違う!」



「む？ 何がだ？」

「嘘だつて言つたじゃん！ 寸止めは嘘だつて言つたじゃん！」

「ああ、言つたな。数十回は嘘だと」

「ほら！ やっぱ・・・り・・・」

「ふっ、気が付いたか？ つまりはそういう事だ。母様を騙した悪い娘にはお仕置きだ」

「母様のバカア！ アホオ！ ロリコン！ 子種製造機！ 年中発情期！」

「よし、覚悟しろ冬萌」

「んにゃああ♡そのし触やわり方かたダらめメええ♡」

たっぷりと秘薬が塗られた母様の右手がおまんこのぶつくりとした曲線に沿うようにびったりと添えられ、スジを中指で残りは肉厚を上下にこすこすと擦られる。しかも秘薬が潤滑油になって、ヌルヌルと擦れる母様の手は・・・凄かった♡

「くあ・・・んっ♡んっ♡」

擦れる母様の手から全身に痺れるような快感が襲う。

それでも物足りなく感じ、手が動く方とは逆の向きに腰をへこへこ上下にしてしま

う。

もつと♡もつと♡

「・・・」

「んっ♡んっ♡んっ♡ん？　．．．んっ！　んっ！　．．．母様！　冬萌の動きに合わせて手を同じ方向に動かささないで！」

「はて？　私は冬萌が母様が楽になれるよう、自分から腰を動かしていると思ったのがな？　お陰で手を乗せてるだけでいいから、腕が疲れなくて楽でいいぞ」

「もう！　母様の馬鹿！　．．．!?　ヤ！　収まつちやヤダ！」

「ほう、もう効果が出てきたか。ほれ、もつと腰を動かさないとイケなくなってしまうぞ？」

「んっ！　んっ！　んっ！　．．．母様あ！　手を乗せてないで動かしてよお！　．．．イヤだイヤだ！　収まつちやヤダ！」

「ふむ。そこまで言うなら動かしてやろう。ほれ、これでどうだ」

そう言つて、母様はピッタリとくっつけたまま激しく上下に擦り出した。これでイける．．．そう思ったが

「いやあああ……母様あ……イケないのお……お股が鎮まるのお……うひひひひつ！　ちよ、母様！　もういいから！　あはははははっ！　ら、らめえ！　おまんこ擦っひやらめえ！　あははははははははは!!」

「遠慮するな。もつと速く擦ってやる」

「いひひひひひひひっ！　や、やめ！　あはははははっ！」

その後、暫く擦られ続け、漸く手が止まった頃には笑い過ぎでビクビクと痙攣する俺とふう、と息を吐きながら瓶に手を突っ込む母様が居た。

「あ……ああ……か、かあひやまの……わかあ……」

「ふむ、まだまだ余力があるようだな。さて、今度は中に塗るぞ」  
「ひゃー！」

そう言つて母様と同じようにお股に手を添えると、まずやって来たのはある意味敏感になつた肉厚からやつてくる擦つたさ。それを必死に我慢していると母様の指がスジから中へヌルりと侵入してきた。

「んああ♡母様の指が入って来たあ♡しゆきい♡母様あ♡もつとぬこぬこしてえ♡」  
 「・・・? ああ、任せろ」

母様がゆつくりと中指を出し入れする度にくちゆくちゆと卑猥な音が室内に響く。ゆつくりではあるが、十分な快感。

ここである事を思い付いた。

諸事情により、母様の指で手マンされるとイキ易い身体になっている。だが、母様はそれを知らない。ならば、イクなんて言わなければ、母様に気付かれずにイク事が出来る！（フラグ）

「んっ♡・・・ああ♡・・・」

「・・・?・・・ふむ」

「んひっ♡・・・あっ♡」

イクイク♡母様の指気持ち良過ぎて声出ちやう♡

あっ、もつとそこ擦ってえ♡

「あ♡ああ♡イツ♡イツ♡イツ……？ ……か、母様？」

本当にイケそうだった。

あと数センチ擦っただけでイける程に昂っていた。だが、指は抜かれ、膣内には物足りない感覚が広がった。

「そんな小細工で私を騙せると思ったか？ どうやら、まだ反省していないようだな。流石に反省してるだろうと思ってイカせてやろうと思ったが、気が変わった。準備が終わるまではずっと寸止めする」

「え……う、嘘……だよ……ね？」

「私が嘘を言った事があるか？」

「おちんちんシコシコしてる時に何度も『ダメえ♡』って言ってる。本当に止めたら泣きそうになる癖に」

あ、ヤバっ。

つい反射的に言っちゃった。

うわあ、母様が俯いて耳まで真っ赤にしてプルプルしてる。可愛い♡

「・・・そ、そうかそうか。中々似てるモノマネまでどうもありがとう、冬萌。もう手加減は無しだ」

「へ？ え、ちよ、母様が聞いてきたんじゃん！」

「知らん！ 母様を虐める悪い子にはお仕置きだ！」

「現在進行形で娘を虐めまくってる癖にいああああ♡」

手の平に秘薬で出来た小さな水溜まりが出来る程の量を腔内に入れられて掻き乱された。気付いたら腔内に数多く出来ちゃったGスポットを的確に攻められ、前回のような奥底から強烈な何かが膨れ上がって来るのを感じた。

「ああああ♡イグツ♡イグウウ！ ♡ 凄いの来ちゃううう♡」

もうすぐそこ。

前世的に例えるなら、おしっこしようとして尿がカリ辺りまで来てる感じ。

これなら、もう絶対にイける♡

そう思っていたが、この秘薬は俺の想像以上の代物らしく、強烈な何かは飛び出す瞬

間に急速に奥底へ戻って行った。

どうでもいいけど、母様のテクニクがタイミング的な意味でも凄過ぎるう♡

「ああ・・・ああ・・・母様あ・・・辛いよお・・・」

「まだまだこれからだ。塗る場所はまだまだたつとつぷりとあるからな」

ニヒルな笑顔で微笑む母様。

は・・・はは・・・母様は絶対に怒らせちゃいけない。

そう実感した瞬間だった。

その後も腔内を好き勝手に掻き乱され、寸止めされ、気が狂いそうになりながらも腔内が終わった。と、思っていたら母様が再び懐から何かを取り出し、腔内にゆつくりと挿入した。

「んひゃ！ 冷たっ！・・・何それ？」

「クスコという医療器具の一種だ。教えた筈だぞ？ これを利用して中の中まで薬を塗る」

「待って母様！ 膜が破れちゃうんじゃない？」

「安心しろ。神薙家は神薙家の人間のちんぽを突っ込まなければ破れない特別製だ」

そ、そうなんだ・・・知らなかった。

んっ♡開いて来たあ♡

中がスースーするよお♡

「・・・冬萌。お前、さては自分で拡張してたな？」

「ッ!?!?! い、いいいいいやいやいや、べべ別に母様が寝てる間に母様の手で自慰とか振動するおちんちんの玩具で遊んでなんかないよ!?!」

「・・・さつきから感じてた違和感はこれか。それに偶に朝起きたら手が湿つてたり、タンスの中の玩具がヤケに艶やかだと思っていたが、アレお前のせいだったのか」

うう・・・まさか、こんな形でバレルなんてえ・・・。

恥ずかし過ぎるう。顔も隠す事すら出来ないから、母様に丸見えだよお（尚、下のお口は子宮口まで丸見え状態）



「おお、おお。奥までよく見える。・・・うん？ ふふつ、子宮口が物欲しそうにパクパクしてるぞ？」

「うう・・・♡」

は、恥ずかし過ぎるよお。

それに、じっくり見られてるから、それだけでお腹の奥がキュンキュンしてるぅ♡

「さて、それじゃ塗っていくぞ」

そう言って秘薬をたぶたと浸した筆を構える母様。上からの視点で筆が身体の中にするすると入って行く。それが妙に興奮？ もどかしい？

まあ、そんな気持ちになって見守つてると筆先が子宮口の穴に触れるのが感じ取れた。

「ンヒイイ♡にやにこれえ♡」

ほじられてるぅ♡

お腹の奥がくにくにつてされてるう♡

ああっ♡

子宮口が凄くパクパクしてるよお♡

「うおっ、子宮口が筆を啜えたぞ。．．．回転させてみるか」

「にいああああ♡しよれしゆごいによおおお♡もつと速くしてええ♡」

「はいストツプ」

「母様の馬鹿ああああ!!」

「何とでも言え。ほれ、回転させるぞ」

「くにゆううう♡」

「はいストツプ」

「うにゃああああああ!!!」

そんな事を繰り返しているとまた快感が引き、擦ったくなって来た。それを確認した母様は筆を抜き、今度は片方が瓶にピツタリとくっつく形になつてくるチューブを取り出して瓶に接続。瓶を子宮よりも高い所まで持つて行き、出口を快感を感じない為にリラックス？ して開いてる子宮口に差し込んだ。

そして、瓶を逆さにすると秘薬がどんどんチューブを通って行き、お腹の中に液体が注がれる感覚がした。

「ここはこれが一番手っ取り早いからな。どんどん入れていくぞ」  
「うう・・・んん・・・」

どんどん秘薬が入って行くが、秘薬自体が体温と同じくらいの温かさなのであんまり気持ち良くなれない。

「ん・・・母様・・・そろそろ一杯になり、そう？」  
「そうか。なら、引き抜くぞ」

感覚的に多分そろそろだろうと思い、そう伝えると母様がおまんこから出てる部分のチューブを掴み、ゆっくりと引き抜いた。

「んあ♡・・・ん♡・・・ん？」

チューブが引き抜かれる瞬間に少し撥つたいような気持ちいいような感覚がした。

そして、秘薬が流れ出ると思ったがそんな事は無かった。なぜなら、秘薬を子種と勘違いしたのか、子宮口が外に出さないようにしっかりと口を閉じてたからだ。

「え、か、母様！ これ、どうすればいいの!？」

「え？・・・お、おお、これは驚いた。まさか、ここまでガツチリ塞いでるとはな。どれだけ欲しがりなんだ」

「ふえっ!?! い、いや！ 別にそういう訳じゃ!！」

「ま、いいだろ。後で嫌でも開くからな」

「?！」

あれ？ なんか凄く意味深な事をサラツと言ったような・・・。

「さて、今回は次で最後だ。別にタイミングは何時でも良かったんだが、普通に忘れてた」

クスコをゆっくりと引き抜いてその辺に無造作に置きながら、そう言って母様が指差

したのは、ビンビンと勃起したちっちゃなクリトリスだった。

実は塗ってはあるものの、それは皮の話でまだ中身は一滴たりとも塗られてなかったりする。凄いね、それで掻き乱す母様の技術。

そして、今までで母様の寸止めと言う名の地獄に耐えられてたのもこのクリトリスと言う希望があつたから。

何故なら、もう触れるだけでもイケそうな程に敏感になつてるからだ（フラグ）

これなら、流石の母様でも触れた瞬間にイケるからどうしようもあるまい。

ふふっ、盛大にイキ果ててやるぜ！

・・・あかん。

こんな堂々と言うようなセリフじゃ無かつたわ。よくよく考えなくても恥ずかし過ぎる。

「なんだ？ まだ皮を被つてたのか。てつきり、寝てる母様の手で自慰するよう淫乱な冬萌は既に自分で剥き剥きしてたと思ってたぞ」

「い、淫らっ！・・・か、母様！ 淫乱なのは母様の遺伝だから仕方無いと思います！」

皮を剥いてみようと思つた事は何度もある。

でも・・・でも！ 怖かったんだよ！

そうですよ！ 怖気付いたんですよ！

母様に凄くデリケートだから、大事にしろって言われて余計に出来なくなっちゃたんだよ！

あ、でもクリちゃんでもオナニーはした事ある。

この身体でオナニー自体を始めたばかりの頃にして、まだ女の快樂と言うものにまるで慣れてなかったから、刺激が強過ぎてよく覚えてないんだよね。

「開き直るな。あと誰が淫乱だ。誰が」

「だっていつもおちんちんバキバキのガチガチにしてるじゃん。参拝客が来た時だつて、その状態で挨拶に行く始末だし」

「・・・」プルプル

あ、また真つ赤になって俯いてプルプルしました。

本当に母様、可愛い♡

「・・・ほ、本ツ当に懲りないな、冬萌。後で覚えていなさい」

しまったあ！

怒らせてしまった!?

後、つて部分が余計に怖い！

そんな戦々恐々とした俺を差し置いて、落ち着いた母様。「剥くぞ」と言って、俺も我に返り、クリちゃんにゆつくりと伸びる右手をまだかまだかとは無意識に膝をカクカクさせて待っていると「動くな」と言って叱られちゃった。

・・・母様の真剣具合がいつも以上でビックリした。

なんでこんなに真剣なの？

「んっ♡」

母様の指が皮に触れた。

イけるかと思っていたが、ソフトタッチ過ぎて無理だった。そして、そのままゆつつくりと左右に開いて行き、完全に顔を出したフル勃起状態のクリちゃん。

初めて見たが・・・その、なんだ。

我ながら、ビクビクとおまんこの上で勃起した状態で震えてるクリちゃんがこんなにもエロいとは思わなかった。

あ、母様からゴクリって聞こえた。

「それじゃ早速、秘薬を垂らすぞ」

・・・え？

困惑する俺を他所に瓶をクリちゃんの数センチ上に持つて行き、トロトロチヨロチヨロと秘薬を流す母様。

「んっ♡」

「動くな」

秘薬が触れた瞬間にほんの少しビクツとしただけで、注意されてしまった。まあ、そう言われなくても今はイケなさ過ぎてまともに身体を動かせないんだけどね。

そのまま継続して細い線のようにクリちゃんに垂れ流される秘薬を眺めていると、ふ



と、ある事に気が付いた。

快樂が引いてる。

・・・しまったあ！

母様の劍幕に晒されて完全に忘れてた！

「ふう、何とかイカせずに済ませられたな」

そう言つて慎重に手を離して、一息吐く母様。

ヤケに真剣だと思つてたら、やつぱりそれが理由か母様！ あー！ ちくしょうやられた！

もう完全に引いちゃつたよ！

全体的に火照つてはいるけど、敏感な所が冷め切つてるから絶対にイケけないし、イケたとしても満足出来ないよ！

「母様あ・・・冬萌、もう気持ち良くなれないの？」

「心配するな。今から好きにだけイカせてやるからな。子宮の方もそろそろ大丈夫だろう」

俺の頭を胸に抱き締めて、撫でながら安心する声色でそう囁く母様。

ほっ、良かった。

もうイケるんだ。

「さて、私もいい加減限界だ。五年という月日は余りにも長過ぎた」

そう言って、抱擁を解いて俺から少し距離を取る母様。どうしたのだろうか、と不思議に見ていたら、足を肩幅程度に広げて両肘を曲げて力を入れ易いように拳を作り、中腰になった。

簡単に言うとな野菜星人が気を高めたりする時の格好。

そうして、見るからに全身に力を入れ出した母様。どうなるのかと見守っていると母様の服からミチミチやビリビリという布が破れる音がして、母様のお腹辺りの服が縦にこんもりとして来た。

まさか・・・と、思った瞬間、バァンツ!! という破裂音のようなものと共に母様の服がお腹を中心に縦に裂けてある物が飛び出して来た。

それは――

「はあ・・・はあ・・・準備・・・完了だ」

――長さが目測で五十、いや、六十以上あり、太さが俺の幼女アームと同じくらいこの距離からでも分かるくらいにムンムンと雄臭い臭いを醸し出すおちんポだった。先からは湧き水のように我慢汗がダラダラと溢れ出している。

勢いで服が吹き飛び、全裸となった母様が先程とは真逆の狂気に満ちた表情でフフ、と笑いながら一歩一歩しっかりと踏みしめて歩いてくる。

一歩踏み出す事にギシツと軋む床が更に緊張感を増してくる。

「か、母・・・様？」

そんな中、俺はイケない苦しみなど吹き飛び、未だに状況が飲み込めずに居た。母様

のおちんちはさつき風呂で見た時はここまでの圧倒的存在感を放つようなものではなかった。いや、一般的に見たら存在感の塊ではあるが、今はそれが可愛く見える。

それにここまで豹変した母様なんて見た事が無いし、ついさつきまでは普通にいつもの母様だった筈。

それがどうしていきなり・・・!?

そこまで考えて、その予兆が何度かあった事を思い出した。妙に余裕が無かった母様。

ボソボソと気になる事を呟いていた母様。

何かに耐えるように辛そうだった母様。

思い返せば幾らでもある。

だが、もう手遅れ。

気付けば、近付いてくる母様の全身から、目に見えるオーラのようなものが吹き出していた。それが霊力であると本能的に察せられた。

母様が距離を縮める度に身体に至る所が熱を持ち始めた。完全に乾いていたおまんこから、水道のようにダラダラと愛液が瞬く間に垂れ流されていく。スポンジのように

柔らかかった乳首がクリトリスが小刻みに震える程にピンピンに勃起してる。

後一步で身体が密着する程の距離で立ち止まった母様。相変わらず、狂気的な笑顔もオーラも纏ったまま。そして、そんな距離になると勿論、その兵器のようなおちんポがビクンビクンと痙攣してる為に俺の顔や身体にペシペシと当たる。

たつたそれだけで、身体は軽くイキ果てる。

口を無意識に開いて、犬のように舌を出して鼻息が「フーツ♡フーツ♡」と荒くなる。身体が心が細胞が一つ残らず一瞬で完全に屈服した。目の前の圧倒的な雄の象徴に子宮が秘薬でパンパンなのにも関わらず、子種を欲しがり、ガツチリと締め切っていた子宮口が完全に開き切ってパクパクしてる。

秘薬が一気にダラダラと落ちていくがまるで気にならない。

きつと、今の俺の顔は隅々までが雌の顔になり、瞳の奥がハートマークにでもなってるのだろう。

こんなもので貫かれたら無事では済まない。そんな事は分かり切っているが、そんな事がどうでもよくなるくらいに俺の心は、身体は母様の子種を求めていた。

「ハア・・・ハア・・・」

完全に理性が無くなったのか、獣のように呼吸する母様。そんな変わり果てた母様を目の前にした俺はと言うと——

「アハッ♡」

——これから人間の尊厳を踏み躪られるかのように滅茶苦茶に犯される事を想像して、どうしようもなく発情し切っていた。

## 第3話・肉体改造という名の孕ませックス（寸止め地獄の次は絶頂地獄）

ペシペシと熱い肉棒で叩かれてるだけなのに完全に降り切って子種の受け入れ態勢万全の子宮がキュンキュンして仕方無い。呼吸する度におちんポから溢れ出す雄の臭いをもろに嗅ぎ、脳に暴力的なまでの刺激がやってくる。

母様が片手でおちんポを支えると俺の身体をスススつと沿うようにおちんポを下げ、先っぽの亀頭をダラダラと端なく愛液を垂れ流すおまんこに宛てがう。

子宮の上を通った時に何度も軽くイッたのはご愛嬌♡

「ツ~~~~」

ああ♡

亀頭とスジが隙間が無いくらいキスしてる♡

もう、軽くだけどさつきからずつとイキっぱなし♡

やってくる快感に猫背になってビクビク♡していると、少しずつ亀頭の先がおまんこの割れ目から中にヌルリと入り込んで来た。

あつ♡凄つ♡

俺のおまんこ、初めての癖に全然抵抗しないよお♡

寧ろ、欲しくて欲しくて膣内がキュウキュウ吸い付いちやつてるう♡

俺、元男なんだよ♡

なのになんで雌みたいに子種欲しがちやつてるのお♡（今更）

母様の、この雄ちんぽで赤ちゃん孕みたいって子宮が言ってるのが分かる♡

こんな状態で貫かれたらもう男の部分が一瞬で死んじやうう♡

なのに、なんでどうしようもなく興奮してるのお♡

少しずつおちんぽを中に入れていく母様。それに伴い、吸い付きつつも少しずつ拡張していく完堕ちメスおまんこ。

中へと入って行く亀頭に一生懸命引っ付くひだひだが限界を超えて、元の位置に戻るように撓しなった。



おちんポに擦れながら戻っていくひだひだの一部。

「ツ!? ツツ♡♡ツ~~~~♡♡♡. . . あ♡. . . ああ♡. . . うひ嘘よお♡」

撓ったひだひだ一つにつき、一度の絶頂。おちんポが数ミリ動いただけでも数十のひだが撓る。

つまりは. . . そういう事だ♡

ヤバイヤバイ♡

男の部分が死ぬなんて生易しいものじゃない♡

死んじゃう♡

絶対にイキ死んじゃう♡

死因がイキ過ぎとかイヤだよ♡

なのになんでまだキュウキュウ吸い付いちやつてるのお♡

この淫乱バカまんこ♡

おちんポが動けないようにもつと吸い付けえ♡

じゃないと死んじゃうじゃんかあ♡





「あ♡・・・ああ♡・・・!? ふにやああああ♡♡しよれしゆごいによおお♡♡」

漸く失神をしなくても済む程に落ち着いた（絶頂はしてる）と思つた途端にゆつくりとおちんポを引き抜く母様。ズゾゾゾと膣内から引き抜かれていくおちんポ。勿論、吸い付いているひだひだもそちらへ引つ張られては撓るを繰り返し、再びの連続絶頂。おまけに、抜かれていくおちんポを逃がさないとばかりに肉厚がおちんポの半分辺りにタコの口のように引つ付いて離れない。

それでもどこまでも伸びるような代物でもないので、限界値を超えれば伸びた分はゴムのようの一氣に戻る。

「ふによおお♡♡おお♡おお♡まだこしゆれりゆう♡♡にやああ♡♡もうしゆいちゆくにやああ♡♡イヤア♡また・・・おほおお♡♡♡♡♡♡」

一度、元の位置へ戻つた肉厚は再びおちんポに引つづく。そして限界がくれば元の位置に一氣に戻り、強烈な快感が襲う。それを三度程繰り返した時に漸く母様の長いおちんポが止まった。

追加される快感が弱まり、少しの安堵。

同時にある事に気が付いた。肉厚が最初に吸い付いていたのはおちんポの半分辺りから。つまり・・・あれだけ俺のお腹の奥を貫いたというのに、まだ深く奥を貫けるといふ事・・・止めよう。

俺の興奮に歯止めが効かになああああ♡

「おっ♡・・・おっ♡・・・おっ♡・・・おっ♡・・・おっ♡・・・おっ♡・・・」

再び、母様のおちんポで一気に奥まで貫かれたロリおまんこ。今度は更に深く押し込まれ、口を突き出して下品な声が自然に上がる。

目が何度もチカチカする。

いや、もう殆ど真っ白。

意識すらもあるかよく分からない。

ただ、子宮口にほんの少し亀頭の先っぽが侵入して来た事はなんとか理解出来た。

ああ♡ダメエ♡

母様のおちんポが膨張し始めてるよお♡

発射準備してるんだ♡

冬萌を確実に孕ませる為の億を超える濃い子種の発射準備してるんだ♡

でもダメダメ♡

幾ら子宮が欲しがっても、男なんだから妊娠なんて出来ないよお♡

受け入れちゃダメえ♡

これ以上は絶対に侵入させないんだからあ♡

もう残りカスすら残ってるか怪しいレベルでの男としての意識のようなものが妊娠を拒絶している(口だけ)。しかし、母様のおちんぽから送られてくる快樂の荒らしがそれを片っ端から吹き飛ばそうと何度もパンパンと打ち付けました。

「ツ~~~~♡ああ♡また開い~~~~♡か、母さみやああああ♡と、止まつひぐううう♡♡んあ♡らめらめえ♡これ以上、トントんにやいれえ♡ツツ~~~~♡♡ツツ~~~~♡♡と、トンでるう♡意識ひよんじやつてるかりやああ♡♡♡」

理性の欠片も見当たらない状態で絶え間なく打ち続けている母様。それでも子宮内

にはまだ亀頭の半分も侵入出来ていない。正直、自分でも驚きだ。

あつさり貫かれると思っていたら思いの外、抵抗している。まあ、ここで射精されたら、子宮にタップアップに満たされて、妊娠確実なのは間違いないんだけどね。

心無しか、理性の欠片も見当たらない母様に焦りが見えるのは気の所為か？

「んによおおお♡ずっとイツてるによおおお♡おまんこのひだひだがおちんポでこしゆれりゆのしゆきいい♡母様に冬萌の大事な所、犯されちゃってるのお♡チュツチュしちやつてるよお♡子宮のお口と母様のおちんポが深くチューしちやつてる♡でもダメなんだからあ♡子宮とおちんポが愛し合っても冬萌は開いてなんかあげないんだからあ♡♡ダメダメ母様あ♡これ以上はらめなのおお♡♡」

どれだけ弱い意思でも、口に出せば少くくは実現出来るだろう。そう思っただけで回り切らない呂律で発してみたが、案外効果があったらしく、その後のピストンも段々と強く速くなっていき、イキまくってはいるが、子宮内には亀頭の半分しか侵入を許してない。

そして、おちんポの尿道に子種がパンパンになったのか、限界まで膨張しているだろう事が何となく分かった。

そんな時だった。

母様が腰をガツチリと掴んでいた両手を離して、俺の背中に回し、まるで甘えるかのようには背中と後頭部に手を置いて抱き着いてきたのは。

驚く暇すら与えられずに、肩に顔を置いてピストンし続ける母様は理性が無くなっていた筈なのに俺の耳元で縋るように言葉を紡いだ。

「冬萌え♡冬萌え♡」

うひゃつ♡吐息が耳に掛かって感じちやうう♡

母様の声、脳が蕩けりゆみたいでだいしゆきなお♡

で、でもダメだからあ♡

そんなに甘えた声だしても、子宮口は開いてあげないんだからあ♡

「冬萌え♡孕んでえ♡冬萌に母様の子供を産んで欲しいのお♡だから、母様のおちんポ拒まないでえ♡?」

「ツツツツツツ?!?!?!♡♡♡♡」



そ、そんな・・・そんな事・・・言われたら・・・

トントンと奥をノックするおちんポが最後のトドメと言わんばかりに、亀頭がおまんこから出ちやうギリギリまで引き抜き、準備が整った瞬間――

「孕むッ♡孕むのお♡子宮口もう完全に開いちやったあ♡おちんポ受け入れるのお♡  
 好しゆきしゆき<sup>好</sup>ら<sup>好</sup>いしゆき<sup>好</sup>♡♡母様<sup>大</sup>らしいしゆき♡♡母様の子種、いつでもいいよ♡きてき  
 てきてえ♡冬萌を孕ませてえ♡」

やつぱり・・・母様には敵わなかったよ♡

今までに無いくらいに子宮口が開いているのを感じる。奥から愛液が止めどなく溢れ出してる。膣内はイキ続けて痙攣しっぱなし。それにも関わらず、膣内も子宮も今か今かとおちんポを待ち望んでるかのようなキyunキyunチュウチュウしてるう♡

そして、その時は来た。

今までで一番速い貫き速度。

今までで一番強く腰を打ち付ける。



母様・・・あの直後にもそんな理由で射精したんですか・・・。

◇

「・・・あ・・・ああ・・・!? ツツ~~~~♡♡♡に何にここれれ♡♡お腹が気持ちいいよお♡♡イグウウウ♡♡ヒギイツ♡また来ちやうう♡♡♡♡」

目が覚めたのは、冬萌の卵子を孕ませる為の大切な母様の子種達で一杯になった子宮からの突然の絶頂を繰り返す程の快樂の嵐だった。

「によおお♡♡またイッッぢやううう♡♡に何になにのによおお♡♡♡♡」

数分間の絶頂で漸く収まった。落ち着いて目の前に意識を戻すと、大好きな母様の匂いがして、冬萌の身体を包み込むように抱き締めているのが母様だと分かった。

「♡♡」

ビクビクと痙攣していたが、母様の抱擁が嬉しくて顔をスリスリと母様の胸に擦りつけるようにして甘えていると、どうやら理性を取り戻したらしい母様が優しく頭を撫でてくれた。

「すま．．．ない．．．今．．．抜く、から．．．」

行きも絶え絶えにそう言つて、おまんこに半分よりも長く挿入されているおちんポを腰を引いて引き抜きだした。

グググツとおちんポを引き抜くと同時に案の定、快感が襲ってくる。だが、今回は少し違った。

「ぐう♡．．．冬萌ツ♡．．．そんなに吸い付くなあ♡離しなさい♡」  
「待つてツ♡母様ツ♡違うによ♡お母様のデカちんポが冬萌の子宮口に引つ掛かつてるによ♡母様のおちんポを欲しがつてる訳じゃにやいいいいいい♡♡♡」

キュウキュウと逃がさないとばかりにお口を締め付ける子宮口にカリが引つ掛かり、上手く抜けないらしい。焦れつたくなつたのか、次第に力技になって来た母様。それで

も子宮口からカリが出てくる気配は無いが、お構い無しに母様は引き抜き続けた。

「母様ツ♡らめツ♡ムリムリムリ♡子宮が引つ張られちゃつてるの♡おちんぽ逃がさないつて吸い付いちゃつてるの♡それ以上やったらツ・・・」

どんどん母様のおちんぽに引つ張られて下へと降りていく子宮と子宮口。そして、まんこに入ったのが残り、カリだけになると、母様は一気に力を加えて引き抜いた。

「ふっ！」

「はにやああああああ♡♡♡♡」

勢い良く引き抜かれたおちんぽ。

その衝撃で妊婦のようなお腹でよく見えないが、感覚的に子宮が飛び出たのが分かった。擦れただけで絶頂するような敏感子宮が外気に触れた瞬間、空気により、子宮全体に外から継続的な刺激が加えられた。

「ひぎいいいい♡おまんこがあ♡冬萌のおまんこどうなっちゃった———」  
———によおおお

♡」

にや・・・にやにこれえ・・・♡

おまんこから溢れ出した子種を子宮が吸い上げちゃったよお♡

なんと、母様がおちんポを引き抜いた時の隙間から外へと垂れ流れていた子種達が逆再生のように子宮に飲み込まれた。散々お腹にあると言うのにそれでも足りないと言わんばかりのその強欲さに自分の本質を垣間見た気がした。

「!? また来りゆううう♡これにや<sup>何</sup>んにや<sup>な</sup>によお♡おにや<sup>お</sup>かがツ♡子宮が気持ちいいのおお♡♡♡」

「それは・・・冬萌の身体が母様の子種から靈力を吸い取っている副作用だ。暫くしたら落ち着く筈だ」

目覚めた原因である子宮からの快樂が何なのか判明した。だが、今までの快樂と途中でほんの少しのインターバルが入るからか、余計に感じてペタリとへたり込んでいる母様へと助けを求めた。

太股の間にへにやりとしてるおちんポが妙にエロく感じました、はい。

「かあし<sup>母</sup>やま<sup>様</sup>ツ♡たし<sup>助</sup>ゆ<sup>け</sup>て<sup>て</sup>♡もうイキたくないのにツ♡♡イグの止まんにやいよお♡」

「・・・すまん。腰が抜けて暫く動けぬ。辛いだろうがもう少しの辛抱だ」

「しよ<sup>ん</sup>に<sup>な</sup>やあ<sup>あ</sup>♡♡♡♡♡」

その後の数分間も容赦無く襲い掛かって来る快樂に只々イカされるだけとなり、実の母親の目の前でアへ顔を晒すという変態行為を続けた。

「・・・」

「ひやあ・・・♡ひやあ・・・♡」

そして、快樂が漸く収まったものの、まともな呼吸すら儘<sup>まま</sup>ならない冬萌に影が差した。何なのかと見てみると、へにやりと萎えていた筈のおちんポを四十センチ程までにピンピンに反り返らせた母様だった。

恐らくだが、この大きさが本来の大きさなのだろう。それでも凶悪な事に変わりは無

いのだが・・・。

イキ果てて思考すらまともに出来ない冬萌でも、雌としての本能が再び犯されるのだと囁いていた。

「か、かあ<sup>母</sup>ひやま<sup>様</sup>あ、待つ・・・んひッ?!?」

「♡」

抗議する前に母様に冬萌の股にあるナニかを掴まれて意識が少し飛んだ。ボテ腹状態で霊力吸収の影響か、食後の満腹状態よりも少し大きい程度まで収まり、下がそれなりに見えた。それでも股間辺りは見えず、恐らく飛び出してぷらんぷらんしてる子宮を掴まれたのだろう。

今までののが激し過ぎて感覚が麻痺してたのか、脱子宮した影響ですつと軽くイキ続けていたという事を今頃になって気が付いた。

「フーツ♡・・・フーツ♡冬萌が・・・悪いん・・・だからな♡腰が抜けてて動けない母様の・・・前で・・・そんな乱れて誘惑・・・したんだから・・・責任・・・取つてもらうぞ♡」

「ち、違つ・・・いいいいッ♡♡」



何とも理不尽な理由だったので、誤解を解こうとしたが、母様が掴んだ子宮をまるでおちんポのようにシコシコとゆっくり扱き始めてそれも叶わなかった。

そして、イッている冬萌を他所に扱き続ける母様。すると、お腹に沿って反り勃つ感覚がして、子宮口が上から見える程にピンピンに勃起している。

じ、自分の大事な所を見ちゃってるよお♡

母様に反り勃つたおまんこの下側をすりすりと手で優しくさすられる。同時に母様がおちんポの先を子宮口の前に宛てがうと、子宮口が独りでにそちらに向きを変えて、チュツチュツとキスをしだした。

「分かるか？ 冬萌。お前の勃起した子宮口が欲しい欲しいって、私の亀頭に吸い付いて来るぞ。あれだけ注いでやったのに、欲しがりさんだな♡」

「う、嘘ツ・・・冬萌のおまんこが・・・動いてるのが分かるう・・・違うう・・・こんな違うのお♡」

「ふふつ、何が違うんだ？ お腹に母様の子種を一滴残さず大事そうに仕舞ってるのは

何処の誰だ？」

「う、うう♡それは・・・♡」

「そんな可愛い可愛い私の冬萌にはご褒美を上げないと、なッ！」

「ほお、おおお、おおお、♡♡♡」

狙いを定めて一撃。

子宮口は出たまま母様のおちんポが根元まで入り、子種で満たされ拡張された子宮の奥を先っぽがコツコツと当たっていた。たった一撃で潮を撒き散らし、子宮が歓喜に打ち震えるかのように痙攣している。

飛び出て勃起した子宮口はストロークに合わせて動く事は無く、ピンピンに勃った状態で外側を掴まれ、最初はゆっくりとストロークし始めた。

打ち付けて根元まで挿入する度に腰と子宮がトントン当たってイツちやつてるよお♡

奥でイツてるのにイツてる場所が見えちやつてるう♡

もう訳分かんないよオ♡

「お、おッ♡お、おお、おおッ♡ヒグウツ♡ヒグウツ♡にやにもかも曝け出してイッてるううう♡♡イグの止まんにやいッ♡おちんポ動く度にイキまくっちゃつてるによおお♡♡♡母様のおちんポしゅ<sup>凄</sup>ご<sup>過</sup>しゅ<sup>ぎ</sup>りゆうう♡♡んッ!? …んっ♡んっ♡んあ♡」

「んっ♡んぐ♡んっ♡♡」

か、母様とキスしちやつてる♡

口と口は初めてなのに、母様の舌が容赦無く冬萌のお口の中に侵入しちやつて好き放題されちやつてるよお♡

キスがこんなに気持ちいいなんて知らないッ♡

何これえ♡

癖になっちゃいそうう♡♡

「んーッ♡んんっ♡ッッ♡♡んっ♡んっ♡ッ♡」

上下の口を犯されてるのに何とも言えない幸福が襲ってくる。おまけに声もまともに出せず、それが余計に気持ち良くなってきた。

「んっ♡ん♡ん♡ふはあ♡．．．あんっ♡あんっ♡あつ♡母様にギューつてされるのしゅきい♡ツ!?! すっ♡凄ッ♡♡んあッ♡」

散々口内を弄ばれ、解放してくれたと思つた瞬間、どうやらそろそろいきそうなよう  
で、両手を離して冬萌に抱き着いて思いつ切り腰を打ち付けて来た。

勃起した子宮口も奥へと打ち付ける度に強引に押し戻され、引き抜いていくと同時に  
外へ出ようとする。そして、また打ち付けられると奥へと押し戻される。

しかも、エロ躊躇状態なので、恥骨にトントンと母様の腰が当たり、奥だけだった振  
動がお股全体へと変わり、一突き毎に昇天&失神しては引き抜きの際に強制的に目覚め  
させられた。

「冬萌ッ♡いきそうだッ♡奥に出すぞ♡母様の子種を余さず全部受け止めてくれッ♡」  
「かッ♡母様ッ♡らめッ♡これ以上はらめええ♡♡もう無理にやのおお♡♡」

「イグッ♡イグッ♡イクイクイク♡♡イツ．．．くくくくくくくくくくッ♡♡♡♡」  
「ひああああああッ♡♡来ひゃああああ♡♡止まんにやいよおお♡♡子種が一杯ドク  
ドク来るううう♡♡♡」

先程では無いにしろ、充分過ぎる量の子種をお腹が本当にもう限界という所まで注がれ、二人揃って恍惚な表情で余韻に浸っていた。実は今まで散々オナホのように扱われ、少し怒っていたのだが、その時の母様の表情を見ただけで心までもが満たされて、あっさりと許してしまった。

その後、尿道に残った分すらも搾り取るように吸い付き、母様の腰が再び抜け落ちて、冬萌は子宮口が飛び出た事と霊力吸収による快樂の嵐に晒された。

流石に無限ループするような事は無く、母様のおちんポはへにやりと萎えたまま、回復した母様が冬萌の背後に回って、拘束を解いてくれるのかと思っただけならあすなろ抱きをして来た。

「母様あ．．．？ どうかしたの？」

「ああ、流石にお腹がこのままだと何かと不自由だろう。それにピンピンに勃起した子宮を楽にしてやろうと思っただけな」

サスサスと霊力吸収で少し萎んだポテ腹をさすりながら、そう語る母様。何をするのかと見ていると次第にさすっていた手が下へと伸びて行き、未だピンピンに勃起した子

宮口を両手でその根元をしつかりと掴んだ。

「んひっ♡♡」

それだけでイッた冬萌を無視して、まるでおちんポのように子宮を両手で扱き始めた母様。

「にやああああ♡♡ヒダヒダがああ♡♡母様にシコシコしやれてえ♡♡イってる♡♡イキまくってるのおおお♡♡気持ちいい♡母様のシコシコ気持ちいいよおお♡♡」  
 「こうしているとな、中に溜まった靈力吸収後の残りカスのような子種達が母様の射精と同じように勢い良く外へと飛び出ていくんだ」

ま、待って♡

今それ所じやないのお♡

イキ狂ってるのお♡

シコシコも少し早くなつてやばいによお♡

「それから、その時には母様が射精するのと同じような快樂が襲ってくるから・・・その、なんだ。頑張れ」

「待つてええ♡♡らめえ♡本当に無理なお♡♡死んじやう♡絶対に死んじやう♡死因がイキ過ぎなんてイヤだよ♡♡ひギイイ♡♡」

「安心しろ。神薙家の死因はテクノブレイクだ。恥ずかしがる事は無い。それにこの程度ならこれからは、日常茶飯事となる。今の内に慣れておけ」

え、死因がテクノブレイク・・・？

・・・ええ？

「ん、そろそろか。そら、スピードを早めるぞ」

「ンヒイイイ♡♡これ以上は本当に無理なお♡♡あッ♡子種が出よう出ようつてしてるのがわかる♡♡もうそこまで来てるのお♡♡」

「さあ、遠慮無くイキなさい。心配するな。母様が見てるから」

「ひぐう♡ひぐう♡ひッぐううう♡♡ツッ♡ああッ♡♡出ちやつてるのお♡母様みたいに恥ずかしげもなく子種撒き散らしちやつてるによお♡♡あああ♡♡まだ止まんないによお♡♡」





・・・あつ♡

想像しただけで子宮がキュンキュンして来たあ♡

◇

「んう・・・」

「ん、起きたか」

目が覚めると縁側で母様に膝枕をされていた。

んにゆう♡

母様のお膝、ふかふかのもちもちで超気持ちいい♡

ウチはこの辺で一番高い山に建てられた神社。この辺りの地域はド田舎もいい所でお店の類が一つも無いし、住人も殆ど居ない。

母様曰く、走って五分程度の所に駅があつて、数駅先にはそれなりの町があり、そこで偶に爆買いをして帰って来るんだそうな。

これまで境内の外に出る事を禁止されてたから、外の景色は境内から見渡せる範囲し

か分からないが、少なくとも駆らしきものは見えない。本当にあるのかな？

一応、偶に来る参拝客の人の車やテレビからの情報でこの世界が現代と差程変わりない事は分かっているが、この辺りに電車が本当に通っているのかと問われれば、ちよつと答えられそうにない。

だって、見渡す限り川や田んぼやら山しか無いもん。

後、家が遠目にちらほら。

とまあ、それ程の田舎なのでウチの明かりを消した月の無い夜空は本当に凄い。プラネタリウムなんて目じやないくらいの満点の星空。これを見た時は感動で泣いちゃつて母様に心配掛けちゃったなあ。

「待て、動くな。今、耳搔きをしている」

「あ、ごめんなさい・・・見えるの？」

「ああ、この程度、造作も無い事だ」

「ふーん・・・ねえ、母様」

「ん・・・なんだ？」

「冬萌と母様、なんで全裸なの？」

「・・・夜風が気持ちいいだろ？」

「うん？」

「そういう事だ（？）」

「うん」

よく分からないが、多分そういう事なんだろう。

その後も星空を見ながら、母様の太股に包まれて耳搔きをしてもらい、適当に話をし  
て分かった事がある。風邪とかは引かないのかと思つたが、秘薬の影響で大丈夫なんだ  
とか。

それから、いくら拡張したり改造したりしても正常な状態に戻るので、結構好き放題  
出来る事。それ意味あるの？ と聞けば、拡張やらなんやらすると、戻るといふよりも、  
元の状態から伸びる程度が変わったりするんだとか。

よく分からないが、ガバガバになったり変色したりする事は無いから安心しろとの  
事。そして、肝心のお腹の赤ちゃんについてだが、受精している事は冬萌も何となく分  
かる。歳がどうかと思つたが、神籙家は特別らしく、その辺の成長は早いらしい。

ついでに、神籙家の血筋同士じゃないと孕む事も孕ませる事も出来ないようになって  
いるとの事。

孕んだ赤ちゃんは平均的に二十年はお腹の中に居続けるらしい。その間、成長はしないが、神羅家の人間特有の子宮内の外から干渉出来ない所で母体の霊力を吸収して神羅家の者としての必要な能力を手に入れてるんだとか。

なので、お腹が大きくなる事も振動に気を付けるとかは気にしなくていいらしい。

「母様」

「なんだ？」

「冬萌の父様ってどんな人だったの？」

「ん？ 私だが？」

「・・・え？」

え・・・え？

母様しか見た事無かったから、もう死んだものと思ってたんだけど・・・え？

「そうか・・・そう言えば、まだ言つてなかったな。世間一般的に見たら、お前の母様は私の母様だ。私が母様を孕ませてお前が生まれたと同時にテクノブレイクで逝ったんだ」

「んー・・・んん？　なら、母様は本当は父様って事で婆様が母様って事？」

「まあ、そうなるが・・・そうだな。神薙家がどう言った一族なのか説明するか」

そして語られた神薙家の真実。

うん・・・まあ、業の深い一族だったとだけ言っておきます。

「ん、終わったぞ。次は反対を向け」

「んー・・・ツ!？」

眠くなってボーッとしながら、膝の上でゴロンと母様の方を向くとバキバキに反り勃ったおちんポが飛び込んで来て、眠気が吹き飛んだ。

・・・なるほど、そういう事か♡

「ん♡コラッ。舐めたら危ないだろ」

「むう・・・」

「・・・早く終わらせるから、その後にもたしよう」

「!・・・うん♪」

夜はまだまだ長そうだ  
♡

## 第4話・朝勃ち処理は妻の役目？（母様のおちんポを躰けます！）

目が覚めれば、布団で母様に抱き着いて寝ていた。母様の身体はとても柔らかくてすべすべで弾力もあるから抱き心地が凄くいい。

目を擦りながら起き上がり、辺りをキョロキョロと見回す。襖に目を向ければ若干明るく、もうそろそろ起きる時間だ。

隣を見れば、母様がこちらに向いたまま気持ちよさそうにスヤスヤと寝ている。母様の寝顔を堪能していると、不意に母様が寝返りをうって仰向けになった。

垂れずに整った形を崩さない、相変わらず張りのある美しい形をした布団越しでも分かる程の大きなお胸様。ノーブラだから、乳首の形が浮いて見えるのもまたエロスを醸し出してる。

そのピンツと立った乳首を試しにツンツンとしてみると、ビクツとしながら「んあ♡・・・あん♡」なんて艶かしい声を上げていた。

あー、秘薬塗って無かったら今頃発情してたな。

凄いな、この秘薬の効果。

そして、お股にそれ以上の標高を作り出した朝勃ちフル勃起おちんちん。

・・・ふふっ♡

しようが無いなあ♡

節操の無いエロちんポを躡しなくちゃね♡

もう一度、布団に入り、モゾモゾと中へ侵入。お腹の上に跨って、寝巻きにしてる白装束を左右に掻き分け、ノーパンなので丸出しのおちんぼがひよっこりと顔を出した。

「よいしょ♡よいしょ♡むむ、布団に引っ掛かって上手くこちらに持って来れない・・・」

最初はそれでも起こさないように慎重にしたが、布団の奥から漂って来る雄の臭い脳が発情してしまい、最終的には布団を思いつ切り上にバサツとした。この臭いは卑怯だと思いません。

「はうッっ」



と同時に反り勃つ、朝から遅くピンピンのおちんポ。引っ掛かっていた反動で勢い良くこちらへ反り返り、俺の顔をペシッと叩いて密着したまま停止した。

「フーツ♡・・・フーツ♡・・・」

それだけで脳にはバチバチつと電流が走り、ビクビクとするおちんポから目が離せなくなっていた。脳も身体も発情してるのに敏感な所は冷め切ってるってなんか変な感じだ。

早速、啜えようとしたものの、位置的になんかやり難かったので、身体を少し引いてみるとおちんポは更に反り勃ち、おちんちんのおしっここの穴辺りと俺の口がキスをしていた。

相変わらず、大きくて遅いおちんちんだなあ、と思いつつも小さな口をお口を広げておちんポを口の中へと挿入させる。

口一杯になってもまだ入れて、喉へ入って来る。それでも止めず、どんどん中へと入って行き、亀頭が胃に到達した辺りで停止させた。因みにこれでもおちんポの半分は

未挿入だ。いつか、全部入れ切ってみたいものだ。

「ンフーツ♡ンフーツ♡」

痛みは無い。

違和感はあるものの、寧ろ喉が歓喜に打ち震えているくらいだ。喉、いや食道から伝わるちんぽの熱で身体中がビクビクと痙攣してしまう。

今日初めてここまで挿入させてみたが、案外イけるものだ。させてみた、と言うよりも性欲に負けて気付けばしていた、なんだが……。呼吸も少し苦しいくらいで、そこまで問題視する事でもない。

早速、上下に身体を動かすと中のおちんぽが喉の肉壁を擦りながら同じく上下に動いた。

「んぐ……んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

擦れる度に喉が痙攣してる。初めての感覚だけど、これもしかして喉がイってるのか？

・・・喉イキ?

い、いつの間に開発されてたんだツ!?

あつ♡おちんポビクビクしてるう♡

喉もキユウキユウ締め付けちやつてるよお♡

「んっ♡んぐ♡んん♡・・・んっ♡んっ♡・・・んっ!?!」

慣れてきた頃、突然俺が着ていた白装束を掻き分けられ、下半身がスーツと涼しくなったと同時に母様と同じくノーパンで丸出しとなったおまんこが発情して、ヌルツとした感触がし、そこだけ快樂の嵐に曝された。

んひやつ♡

か、母様、起きてたの!?

あつ♡そ、そこツ♡

もつとペロペロしてえ♡

「全く、目覚めれば目の前に娘のおまんこがあるとは驚いた。朝から母様のおちんちん

をむしやぶりつく淫乱な娘はこうしてやる」

ち、違ッ♡

朝からピンピンにしてるダメちんぽを舐てるだけだもんッ♡

ちよ、しや、喋つたら、振動でッ♡

んあッ♡母様のクンニ凄ッ♡

あッ♡お股が勝手に開いちやうよお♡

「んっ♡んんっ♡…ツ!? んんんんんん♡♡」

し、舌がおまんこに入つて来たア♡

にゆるにゆるって♡にゆるにゆるって!♡

んあ♡そこッ♡気持ちいいのお♡

もつと♡もつと♡

ああッ♡イクッ♡イクッ♡

「んぐ♡んんんっ♡んんんっ♡んんんっ♡んんんっ♡」

「逃げるな。まだ終わってない」

ンヒイイイ♡♡

イッたのにい♡イッたのにい♡♡

母様に腰をガツチリ掴まれて敏感おまんこを舐められてるよお♡♡

「んんん♡んっ♡んん♡んぐっ!?!」

「ほら、口が動いてないぞ。しっかり気持ち良くしろ」

か、母様ツ♡

腰突き上げちゃダメえ♡

凄いの♡これ凄いの♡

胃の壁にトントンして、子宮に刺激が伝わっちゃてるのお♡

「くぅ・・・そろそろイクぞっ♡」

ひう♡

冬萌もイクツ♡

上からトントンされてお腹の中イクのお♡♡

「うっ♡締め付けがツ♡更にツ♡．．．ツ!? イグウウウ♡♡」

「んぐツ!?! ツ~~~~♡♡♡ツツ♡．．．ツ♡」

あ♡あちゅい<sup>熱</sup>♡

子種がドクドク注がれて、胃がイツちやつてるう♡

完全に喉まんこになってるよお♡

んあっ♡おちんぼの奥から濃いヤツがドロって出て来たのが分かるくらいに濃いのが来たあ♡

それにおまんこの方も絶頂して、グシヨグシヨになっちゃたあ♡

あんっ♡舌引き抜かれただけでイクう♡

「引き抜くぞ．．．んっ♡」

「んぐ♡んんん♡．．．ぶはあ♡．．．はあ♡．．．はあ♡」

や、ヤバっ♡

引き抜いた瞬間にお腹の中から濃い臭いがプンプン漂って来てるう♡

「はあ・・・冬萌、そろそろ起きようか」

「はあ、い♡」

この後、胃の中で子種から靈力を吸収して軽くイキつつ、朝の水浴びをして・・・その、俺の潮で・・・ビシヤビシヤに・・・なった布団を母様と洗濯した。母様が見てる前で、自身の粗相でびしょ濡れになった布団を洗うのは死ぬほど恥ずかしかった。

キチンと出来てるか監視する為とか言ってた癖に、真っ赤になった俺をニヤニヤ見詰める姿は正直、ゾクゾクした。

そんな事はあったものの一段落着いて、一緒に朝ご飯を作って食べた。靈力吸収で軽くしかイかなかったのは、秘薬を少量しか塗ってないかららしい。

・・・ん? ...え、塗ってたの?

数日前から食事に少量入れてた?

・・・だから、先日のお風呂から胃でいくようになってたのか。



儀式ついでに処女喪失& a m p ;妊娠してから数日。妊娠については、病院に行く訳にもいかないのです。調べていないが感覚的に確信出来る。不思議なもんだよなあ。

どうやら、今度は全身に秘薬を塗るらしく、それまでに体力を温存しとけと言われたので、基本的に境内で母様と遊んだり、掃除したり、縁側で一息吐いたりしながら呑気な日々を過ごしている。・・・俺は仙人でも目指してるのだろうか、と度々思うようになったが気にしない事にする。

今日の夜にやるらしく、それが終われば外界に出てもいいと言われた。てか、まさかこの年で処女喪失&妊娠するとは思わなかった。しかも、母様のおんならしいおちんぼに・・・えへへへ♡

ああ、ダメだ♡

母様との赤ちやんがお腹に居るって考えただけで頬が自然と緩んじやうう♡

あ、よくよくかんがえれば、誕生日に妊娠したから赤ちやんが誕生日プレゼント？  
・・・えへへへ♡



閑話休題

早く夜にならないかなあ、と思いつつ今日も今日とて軽度の露出プレイを楽しんでる。

ん？ 何してんのかって？ 真っ白なワンピース一枚、下着無しの状態で鳥居に登って股広げて座ってる。

あつ♡風邪がスースーして気持ちいい♡

時期的にも涼しい風は最高♡

ん♡はためく服が乳首に擦れるの擦った気持ちいい♡

秘薬の所為で乳首が勃起しないのはちよつと不満。

いやね？

確かにここは自然が綺麗で景色も壮大だ。森の生き物も度々見掛ける事もある。ただね：・流石に飽きる。春秋冬なら、まだいいよ。桜や紅葉に雪が楽しめるからな。でも、今は六月中旬。緑が凄いいし、セミの合唱が聴こえてくるけど、そこまで夢中になるものでもないんだよ。

てか、うるせえな!!

さつきから、ミーミージージーツクツク・・・どこかにしろよ！ 数種類が混ざって雑音にしか聞こえねえんだよ！

はあ、それに母様も今日は何やら用事があるらしく、夜まで家を空けてる。霊力の操作がまだ出来てないから、発情する事も満足に出来ないし、ふたなりで無ければ自分で霊力を生み出す事は出来ないらしいのであまり無駄遣いをしたくない。

俺が霊力を得る方法は子種を注いでもらうしかないんだそう。おちんぼ挿入してもらえれば一発で全身が絶頂寸前まで発情するんだけどなあ。

とまあ、する事が無くて、このように露出プレイでスリルを味わってる。イク事は出来ないけど、こうゾクゾクってするんだよね。それに加えて、最近遅しくなってきた自身の想像力をプラスしてみると思った以上に楽しい・・・いろんな意味で。

あー、参拝客とか来ねえかなあ。

来てくれたら、下を通る時にお股が丸見えになつて反応を楽しむなり、見られてる感覚を楽しむなり出来るんだけどなあ。・・・実際、そんな場面に遭遇した事は無いけど。

あ、この体勢だと下から見えないか。

なんて思いながら下を向いた時だった。

「・・・」

「・・・」

階段に立って見上げている、コスプレのような派手な色合いのワンピースを着た少女と目が合ったのは。

「・・・ひゃあ!?!」

慌てて股の部分を抑えると、バランスを崩して後ろに倒れてしまった。

「わっ、わわ!」

そのまま地面へ落ちていくが、途中で身体を捻って綺麗に着地。・・・出来たのはいいんだが、胸元までひるがえ翻るワンピース。露あらわになる我ながら幼体としては完璧なロリボデイ。翻ったワンピースが戻って視界が鮮明になった時、再び同じく階段で立ったままの少女と目が合った。

・・・バ、バツチリ見られたよね?

「……」  
「……」

着地のしゃがんだ状態で少女を真つ赤な顔で見下げる俺と何処か不機嫌そうな顔でこちらを見上げる（多分）コスプレ少女。六月の太陽の下が暑いのか、汗ばんだ頬に腰辺りまである長い紫色の髪が少し張り付いてる。互いに何も喋らず、蝉の鳴り響く声がヤケに大きく聞こえた。

暫しの沈黙の後、意を決して俺から話し掛けた。

「……忘れて」

「覚える価値すら無い」

あ、はい。

……なんか、すみませんでした。

取り付く島もないといった風に即座にバツサリと切り捨てられた。その声色は冷た

く、こちらを何処までも見下しているようだった。

・・・ま、まあ、俺がしていた事を考えれば、当然か。

「・・・忘れて欲しいならさつきと下隠せ。さつきから丸見え」

「ッ!？」

言われて、咄嗟にペタンと座り込んでワンピースを抑える。あつ♡地面がヒンヤリしてて気持ちいい♡で、でも、おまんこが擦れて少し擦りたい♡

って、やってる場合じゃない。

「・・・え、えつと・・・君は？」

「先に自分から名乗るのが礼儀だろ露出魔の変態。そんな事すら出来ねえの？ てか気安く話しかけんな。変態が移る」

め、滅茶苦茶口が悪いなこの少女・・・幼女？ 俺と大して変わらないだろうに、どんな教育受けて来たんだ？（朝勃ち処理してた奴が言うな）

「・・・か、神薙冬萌・・・です。・・・冬萌と呼」

「話し掛けんなって言ったよね？ 数秒前に言った事すら忘れたの？ どれだけ馬鹿なの？」

「(い)、(い)めん・・・なさい」

よ、幼女にここまでボロクソに罵倒される日が来るとは思わなかった。露出プレイを楽しんでた俺が悪かったのは認めるからさ、もうちよつと罵倒して。

・・・あ、いや違う。

罵倒しないで。うん、罵倒しちやダメです。

・・・なんか、貧乏揺すりし始めた。

「・・・(い)、(い)っ。」

「・・・え？」

「(い)っ(い)っ・・・ここが何処か聞いてんだよ！ 早く答える！」

「は、はいっー！」

って、え、知らずに居たの？

こんな辺境の地に？

・・・まあ、事情は後で聞くとして、ここが何処なのか、か。

・・・あれ？　ここ何処だ？

日本のかなり辺境の田舎である事は確かだ。

・・・それしか分かんない。

マジで何処だ？

「えつと・・・日本？」

「そんな事は分かかってんだよ！　馬鹿かお前！　この地域一帯がなんて名称なのか聞いてんの！　言わなきゃ分かんねえのか!!」

「ひっ！　ご、ごめんなさい！」

こ、怖い・・・。

今時の子供ってこんなにおっかないの？　前世の同年代でもここまでのはいなかったぞ・・・。それと罵倒するなら怒鳴るんじやなくて、こう、もつと冷静で冷酷にやつてもらわないと興奮出来な・・・俺は何を言ってるんだ？

「・・・ちっ」

「ひうー！」

舌打ちをするコスプレ幼女に俺が涙目で頭を抱えて蹲っていると（今更だけど凄いい情けない絵面だな）、唐突にくう、という可愛らしい音が聞こえた。

音の発生源へと目を向ければ、そこには顔を真っ赤にしたコスプレ幼女が居た。

「・・・」

「・・・」

あ、あー・・・もうお昼か。

いつの間にかこんなにも時間が過ぎてたのか。丁度いいし一緒にご飯でもどうだろう？　・・・口封じも兼ねて。

「・・・え、えつと」

「何ッ！」

「ひい!?　・・・い、いや、もしよかったら・・・お昼・・・い、一緒に・・・どうか・・・」



な?」

「お腹なんて空いてない!」

そのセリフの直後に再びくう、と可愛らしく鳴るお腹。

「・・・黙れ」

「・・・と、取り敢えず、ウチに入る?」

「黙れえ・・・」

その瞳に涙を浮かべ、真っ赤になって小さく罵倒してくる幼女に俺は心がポカポカする感覚を覚えていた。

◇

昼食である氷水に浸した素麺を抱えて、コスプレ幼女を案内した居間へ向かうと縁側で涼んでいた。

「お昼、持って来たよ」

そう声を掛ければ、俺が食器やらその他諸々を並べている机の前の座布団に不機嫌そうな顔は変わらずだが、大人しく座った。

「・・・素麺？」

「うん、普通の素麺。今、母様は家を開けてるからこんなものしか作れない」  
「・・・そう」

合掌をして、互いにちゆるちゆると静かに啜り始める。

「・・・うん、素麺だ。」

「ね、ねえ・・・」

「ちゆるちゆる」

「あ・・・えつと・・・」

「ちゆるちゆる」

「な、名前・・・何て・・・言うの？」

「ちゆるちゆる」

こ、心が挫けそうです・・・。

放置プレイは嫌いじゃないけど、初対面相手だと辛い。

シヨボーンとしながら、素麺を啜るのを再開するとボソボソと声でした。

「・・・束」

「ちゆるちゆ・・・ん?」

「・・・篠ノ之束」

「!?!? た、束って呼んでもツ」

「気安く呼ぶな」

「・・・はい」

心は硝子で出来ている。



名前を聞いたものの、それ以上の情報は無かった。食事の間はずっと黙って麺を啜り続け、揃ってご馳走様をして、俺が片付けている間も束（心の中でくらいなら許して貰えるだろう）は縁側で涼んでいた。

分かるよ、その気持ち。

この時期の縁側は風通しも良くて、日陰にもなってるから凄い気持ちいいのだ。周囲も木陰になっているので、この神社の周辺は本当に涼しく、ウチは毎年クーラー要らずだ。扇風機も殆ど使わない。

何処から来たか分からないが、この辺りは何も無いド田舎なので、それなりの距離を歩いていた事は確かだろう。存分に堪能してもええんやで？

あ、今更だけどパンツはきちんと履いたよ。

久しぶりって訳では無いけど、やっぱりノーパンの方が解放感あったり、気持ち良かったり（意味深）で好きだなあ。

さて、後片付けを終えた俺は涼んでいる束の横に座り、持ってきたジュースを間に置いて一緒に涼んだ。座る時に一瞬ジロリと睨まれて、少し距離を置かれたが俺は挫けない。

挫けません（涙声）

ジュースを飲みながら、暫く経つても進展しない状況に俺は意を決して事情を尋ねる事にした。

「・・・た、たば」

「あ、？」

「しなのののさん」

「・・・」

「こ、こんな所に、何で一人・・・で？」

「・・・」

ま、負けないぞ。

俺は負けないんだからな!

て言うか、苗字が早口言葉並に言い難いんですけど。

これ、合ってるのかな?

「え、えつと・・・こんな所に、子供一人は・・・流石に危ない、から・・・出来れば教

えて欲しいなあー・・・なんて・・・」

「・・・」

もう、泣いていいよね？

「・・・・・・た」

「え？」

「・・・家出した」

ぷいつ、とこちらに顔が見えないように横を向きながらそう答える束。何処か気まずそうな雰囲気を感じる。

「・・・それでここに？」

「・・・電車に乗って遠出したら、終点のここに着いて、丁度お金が尽きた」

「そこから適当にぶらぶらしていると、ここに辿り着いたってことか」

そう答えた俺に束はこちらへ振り向き、据わった目で睨み付けて来た。

「次、ぶらぶらなんて言ったら殺すから」

「ええっ!？」

何故かはマジで分からないが、気に障ったらしい。色々よく分からない子だなあ。

「あ、お金、電車代くらいなら幾らでもあるから出すよ」

「は？ 勝手に使ってもいいのか？」

「まあ、ちゃんとした理由があるからね。ちよつと待ってて」

「あ、ちよ」

呼び止める声を見殺して、そそくさと部屋を小走りで移動し、これくらいあれば足りるだろう、という量のお金を袋に入れて持って行く。

ウチは本当にお金を使う事がそこまで無いし、田舎だからなのか何かと安い。なのに国からの援助や免除があつて溜まる一方なのだ。

「はい、これくらいあれば流石に足りるよね？」

「・・・変態に物乞いしたみたいだから、さっきの話は忘れろ」  
「酷くない!？」

まさか、心底嫌そうに拒否られるとは思わなかった。でもなあ、ハッキリ言つて昼ご飯を食べた時点で・・・ねえ？

「凄いな更な気がするから、素直に受け取つておいて。ウチ、それなりに裕福だし、お金は使わないと損だから」

「・・・ここ、辺境の神社だろ？　なんで裕福なんだ？」

「へ?　・・・あ、いや・・・それは・・・えーと」

「どうでもいいや」

「ああ・・・そう。それじゃ、はい」

「・・・はあ、有難く受け取つておく」

「うん!」

何やかんや言つて素直じゃないなあ、とそつぽを向きながらお金を受け取る束に俺はそんな事を考えたが、ジロリと睨まれて、必死に顔を横に振つた。



懐に仕舞う束を他所に再びさっきの場所に座り直して、気になっていた事を尋ねた。

「どつして、家出なんかを?」

「お前には関係無い」

「ご、ごめんなさい」

うん、今のは俺が悪かったな。

無闇矢鱈に突っ込んでんじや駄目だ。

・・・俺にはどんな突っ込んでええんやで? (意味深)

その後、互いに喋る事無く、蝉の鳴く声をBGMに穏やかに吹く風を堪能していた時の事だった。

「・・・帰る」

「え・・・あ、もう・・・行っちゃうの?」

「・・・なんでここに居なきやいけないの?」

「そ、それもそっか」

ジュースを飲み終わり、縁側の下にある靴を履き、ピョンと飛び降りて半身をこちらに振り向かせて睨む東に俺は少し寂しい気持ちになっていた。

別に今の生活に不満がある訳じゃない。

外に出れなくとも、母様が居てくれるし、出掛けた母様を待つのも暇ではあるが俺にとつてはその暇すらも楽しいと思える。仕事で帰つて来た母様を労うのは至福の時だし、母様と一緒に居れるだけで満足だ。

・・・それでも、やっぱり少し、ほんの少しだけ母様と俺だけで完結する世界に哀しさを覚える事がある。自覚したのはついさっきだけだね。

今日、外の世界の人と初めて会話をした。内容は散々なものだったけど、凄く楽しかった。名前すらも呼ばせてもらえないけど、また話だけでもしたいと思つた。

「ね、ねえ！」

「・・・なに？」

「ま、また・・・ここに・・・来て・・・くれる？」

「断る」

「ッ!?!」

即答。

迷う所か、考える素振りすらしない程の完全な拒絶。

こちらを振り返りもせず階段へと向かう彼女に、俺は自然と溢れて来る涙が止められず、責めて声だけは抑えようと必死に俯いてワンピースの裾をギュツと握り締めた。

「こんな所に何の用も無く来たくない」

「ッ・・・うう・・・う」

追撃するかのように自分でも理解してる理由をハッキリと告げられた。胸がキツく締め付けられるような、そんな錯覚がした。溢れ出す涙を止めようとしても、余計に溢れ出てくる。地面に落ちて行く雫が小さな水溜まりを作っというように、それは止まらなかつた。

そんな俺を背に束は速度を帰る事無く歩き続け、足が階段に掛かった時だった。

「素麺、美味しかった．．．ありがとう」

「ツ!？」

小さな、囁くような本当に小さな声だったが、確かに聞こえた。その言葉は鼓膜を震わせ、驚く程にすんなりと頭の中に入り、胸の締め付けが何事も無かったかのように消えて行った。

顔を上げた時には彼女の姿は無かった。出会う事はもう無いだろうけど、不思議と忘れられそうにない。

あれだけ鬱陶しかった筈の蝉の声が、今では心地良く聞こえた。



「あ、母様！」

夕陽をバックに階段を登って来た陰に俺は境内の掃除を投げ捨ててすぐに飛び付いた。

「うおつと! . . . ころら、流石に今のタイミングは危ないからやめろ」  
「えへへへ、ごめんなさい♡」

はあ♡

母様の声つて、なんでこんなにも脳を蕩けさせるだろうかあ♡  
ん♡母様の匂いだあ♡

「ん? . . . 冬萌、目元が腫れてるぞ!? 何があつた!」

「え? . . . あ、ああ . . . えつと . . . 」

母様がここまで慌てるのはかなりレアだ。

うむ、今日はいろいろと濃い日だな。

それにしても目元腫れてたのか。確認するの完全に忘れてた。なんて説明しようか?  
誤解の無いようにしないと、後々面倒な事になりそうだからなあ。

「隠さずに言え! なんだ? 何処か怪我でもしたのか? 私の居ない間に何がツ . . . 」

冬萌、どうしてそんなに顔を緩ませてるんだ？」

「・・・ふえ？」

言われて、顔に手を当ててみると確かに顔がふにやけていた。治そうと努力してもどうしても頬の緩みが抑えられず、嬉しい気持ちが一杯になって来た。

「えへへ〜」

「(か、可愛い・・・) おい！ 冬萌！ 何があつたんだ！ 余計に意味が分からなくなつて来たぞ！」

「それはね〜♡えつとね〜♡・・・えへへ〜♡」

「・・・何故だろう。自分の娘が無性にウザイ」

「えへへ〜♡」

「本当に何があつたんだ!?!」

その後、慌てていた母様も大事では無い事は分かつたらしく冷静になったが、俺は暫くの間、嬉しい気持ちが収まらず、ずっと顔をふにやけさせては「えへへ〜♡」と笑っていた。

しかし、母様からのねっとり濃厚なベロチューで上書きされちゃいました。

かあひやまあ♡

もっひよお♡

◇

「成る程、それであんな状態になっていたのか」

「ひゃい♡しようにしゅう♡」

えー、はい。

只今、風呂上がりになり全身に秘薬を塗る前に母様に尋問という名の濃厚なベロチューで骨抜きにされて、アへ顔を曝してる冬萌です。

口の中に霊力流し込まれて沢山イカされちゃいましたあ♡

洗いざらい吐かされると思ったが、激し過ぎて簡単な情報しか話してない気がするけど、漸く終わり、床に敷かれたマットに掛けられたタオルケットの上に横になった。

息を整えている間にさつきから気になっている事を問うてみた。

「はあ♡・・・はあ♡・・・母様、こゝ、こんな格好じゃないと、本当に駄目なの？」  
「ああ、駄目だ」

こんな格好というのは、タイツ並みにピッチリと張り付いて肌が若干見える程に生地が薄いスク水風のレオタード。乳首辺りも薄らとしたピンク色が見える。おマンコに至ってはスジがくつきりと見えるし、肉厚がギリギリ収まるくらいしか幅が無い。

「由緒正しい服だ。私もこれを着て同じ事をやらされたよ」

「そゝ、そうなんだ・・・」

母様の透け透けレオタード・・・くつきりと見えるおちんちんがエロいです（確信）  
今のパーフェクトボディで着てくれたら尚良し。

今度頼んでみよう。

「さて、始めるぞ。・・・と言っても最初からするのも味気無いな。ちよつとマッサージでもするか」



「んっ♡・・・あっ♡・・・」

ほわあ♡

母様のマツサージ凄い気持ちいい♡

あ♡それ最高お♡

暫く、母様のマツサージを堪能していると少しずつではあるが身体が火照ってきた。次第に秘部以外の全身がまるで性感帯のようにビクビクと痙攣しだした。

すすー、と身体を滑る母様の指に驚く程の意識が集中している。その指を少し動かすだけで、抑え切れない嬌声が漏れてしまう。

「ひう♡・・・んあ♡・・・ひあッ♡」

「どうした? まだ始まったばかりだぞ?」

「んんっ♡・・・いいッ♡」

「・・・さて、そろそろこれを塗るか」

一段落着いたのか、傍に置いていた瓶を手に取り、中に入っていたトロリとした秘薬

を手に乗せ、それを両手で擦り始めた。擦る度にヌチユヌチユする音を聞くだけで俺の身体は期待しているかのようにビクビクと痙攣する。

それでも傍らでオイルのような秘薬を練り込む母様が気になり、緩み切った筋肉に鞭を打って何とか振り向いた。そこには秘薬塗れまみにしてテカらせた両手を少し広げ、楽しそうに嗜虐的な笑みを浮かべる母様が居た。

両手の間に橋を掛けるように垂れる秘薬がトロリと落ちて行く様子は、まるで自分の末路のように感じられた。

「ふふっ♡さあ、冬萌♡マッサージを続けよう♡」

「は・・・はは♡」

今日は寝られそうに無いかもしれない♡

## 第5話：媚薬マッサージからの初アナル騎乗位（アナルビーズもあるよ）

トロリと垂れる秘薬が背中に落ちた。

冷たくはないが、かと言って熱くもない。

人肌で適温にされたソレは心地良い暖かさを持ち、生地越しであるにも関わらず、素肌の時と同じような感触を持たせながら垂れていく。そこに母様の手が添えられ、背中全体へと浸透させるようにゆっくりと手を滑らせる。

秘薬で張り付いている所為か、母様のいつの間にかしていた医者のような手袋を着けた手がレオタードの上を滑らかに動いていく。

「ふっ……んふっ……♡……ッ♡」

元々垂れていたモノと母様の手に塗れていた秘薬がネチヨネチヨと卑猥な音を立てながら、背中全体へと塗られていく。ティッシュとまではいかなくとも、それと同等の薄さのレオタードに秘薬が染み込み、地肌へと秘薬が塗られていく感覚がする。

先のマッサージで既に全身性感帯へと変えられた俺の身体は背中を指が滑るだけで、自身の意志に関わらずビクビクと痙攣している。それでも、母様が靈力を流し込んで無いかからか、普段なら数回はイってる程の快樂でもまるでイける氣配がしない。

んっ♡

んあ♡んんっ♡なにこれえ♡

全身がイッた後のおマンコみたいにビクビクしてるのに、全然イけないよお♡  
それ所か内側で快樂が暴れ回ってるのお♡

息切れする程に身体が反応しているというのに、おマンコは濡れる事すら無い。ただ、なんて言うのか。膣内の筋肉？はビククリするくらいに痙攣しつばなし。秘薬を塗ってる筈なのに感じまくってる？と思ったが、よく良く考えればここは塗って無かった。塗ったのはあくまでも表面だけで、言うなれば断面は塗っていない。というか塗りようがない。

イメージ的には揚げ物の衣の部分が秘薬で中身が俺の体の内側・・・伝わったかな？

「はあ・・・はあ♡はあ♡」

背中を塗り終わる頃には既に背中に快楽は無く、秘薬の効果が出ていた。それで余裕が出来たからなのか、物足りなくはあるものの、ゆっくりと息を整えていると不意に母様の手が脇の隙間なら中へと侵入して来た。

「んひゃッ♡」

「まだまだこれからだぞ？この程度でへばっついては困るな」

「んんッ♡・・・んあ♡・・・いいッ♡」

ああ♡あ♡

母様の両手が脇を交互に擦ってッ♡

ひいい♡凄いいのお♡

絶え間無く気持ちいいのがやってくるのお♡

そこ性感帯じゃないのになんでえ♡

「んあ♡あ♡ああッ♡」

こゝ、声があ♡

抑えようと思つても快樂が次から次へとお♡

「おかしいなあ？私はただ秘薬を塗つてただけなのに。冬萌の口から卑猥な鳴き声がするのは気の所為か？」

「ツ~~~~!?・・・ンフーツ♡ん♡んう♡」

母様に言われて途端に恥ずかしくなり、枕に顔を埋めて出来るだけ声が出ないように努力しようにも母様の攻めは更に強くなり、声がどうしても漏れてしまう。

「んっ♡んんっ♡ツ~~~~♡・・・ん♡・・・はあ♡はあ♡」

そろそろ抑え切れなくなりそうになつた所で、秘薬の効果が出来て来て、一旦収まつた。そう思つたのも束の間、寝そべっているが俺の身体の隙間を母様の手が滑り込み、胸をマッサージ（意味深）しだした。

「あんっ♡・・・んふっ♡ふっ♡ッ♡」

俺の体重なんてものともしないのか、それとも秘薬で滑りやすくなっているのか、母様の手が止まる事は無く、ねっとりとしつぱいを揉みしだいていく。しかし、秘薬を塗られた乳首は勃起する事無く、加えて弄ってもらおう事すらされなかった。

うう  
♡

乳首だけ冷め切って物足りないよお♡  
なのに胸も全身も火照って仕方ないのお♡

「んん♡んっ♡」

「・・・ふふっ、足をモジモジさせてどうかしたのか？」

「ツ!?!い、いや、なんでも・・・ツ♡ンツ♡♡♡♡♡♡」

言い訳しようと口を枕から話した途端に母様から乳首に送られてくる靈力で胸だけ一瞬で完全に発情。ビンビンになった乳首を思いつ切り摘まれ、反射的に顔を枕に押し付けて、声を我慢しながら絶頂に耐えた。

ふ、不意打ちの絶頂は卑怯お♡

にやああああ♡♡

乳首くにくにしちやらめええ♡♡♡

「やはりやり難いか。冬萌、身体を起こせ」

「フーツ♡・・・フーツ♡・・・」

「なんだ、この程度でへばったのか。仕方無い」

絶頂の余韻に浸っていた俺に呆れた母様は、乳首を摘んだまま脇を持って俺の身体を起こした。だが、脇を持ったと言っても、添える程度で重心は乳首にある。

「いいいいいい♡♡か、母様ツ♡やめツ♡イクウウ♡♡」

「おつとすまない。引つ張り過ぎてしまったな」

「あ♡・・・ああ♡」

乳首からの強烈な快楽が、流れ込んで来る霊力が弱まる事によって、いく寸前に収まった。いきなりの快楽に痙攣している俺を他所に軽く摘むのは止めず、ふにふにと捏



ねる母様。

「あう♡」

心地好い快楽と言うべきか、その程度までに感度を抑えられた状態は弄つてる最中の気持ちよさを永遠に繰り返しているようだった。母様の巫女服越しの豊満なお胸様に頭を包まれるように背中を預けて、その快楽に浸っていると、今度は抱き着くようにお腹に秘薬を塗り込み出した。

更に押し付けられるお胸様。

そして隙間がゼロになるほど距離を詰められ、母様の香りに包まれ全身をまさぐられるのは、こう、快楽は無かったが、快感はあった。ギョツてされるのホント好き。

その後はマッサージで全身脱力した俺を支えつつ、上半身終了。身体は火照ったままだが、母様は手をヌルりと脇から引き抜いた。

「んひっ♡」

く、擦ったかったあ。

それに一瞬だけ霊力を脇に流し込まれて、軽くイキそうになった。今更だけど、母様ってかなりドSだね。

「さて、もう一度寝かすぞ」

「ん・・・」

上半身に秘薬をしつかりと塗り込んだと言う事は、背中の状態が前にも現れるという事。レオタードは最早、水着としての役割を果たしておらず、液体によりピッタリと密着してビンビンになっている乳首が丸分かりだ。

んっ♡床に乳首が擦れてっ♡

あっ♡ちよつと擦れさせる床オナニー、もどかしくて好き♡

「んっ♡・・・んん♡・・・ッ!?!ヒギイツ!♡」

床に乳首をコスコスしてると、母様が肛門に指を侵入させた。中指一本ではあるが、

お尻の開発なんてしてなかった俺にとってはそのだけでもギユウギユウだ。

「ほれほれ、ここもすんなり入ってしまったなあ、冬萌。まさか、お尻の穴まで自分で拡張していたのかああ？」

「しょーしょ、<sup>そ</sup>しょん<sup>な</sup>事お♡無いッ・・・いい♡らめえ♡お尻の穴気持ちいいのお♡初めて<sup>な</sup>に<sup>の</sup>に<sup>に</sup>に<sup>な</sup>ん<sup>で</sup>ええ♡♡」

これに関しては本当だ。お尻は流石に難度が高くて尻込みしていた（尻だけに）し、秘薬も今塗り始めた。訳が分からない快樂に戸惑いを隠せない。クニクニとお尻の穴の中を指で弄る母様が、悶える俺の耳に口を近付け囁くように言ってきた。

「簡単な話だ。冬萌、お前がお尻の穴まで淫乱でエツちな子だからだ」

「ッ!・・・そ、そんな事お♡ヒギイイツ♡♡」

「少し動かしただけでこんなに喘いでいるのに、説得力が無いなあ？物欲しそうにキユウキユウ母様の指を締め付けるイケないお尻は誰のだ？」

否定しようと口を開けば、お尻の中の指をクイツとさせられ、喘ぎ声を上げさせられ

る。そこから畳み掛けるように脳が溶けそうな程に甘い声での精神攻撃。

「ふっ♡うぐっ♡うう♡」

「指がドンドン入り込んでいくなあ♡・・・ん？なんだこれは？」

「ふえ・・・？」

母様の指がお尻の穴の中にある何かにトントン当たっている。うんち・・・では無い。固い何かだと分かるけど・・・何これ？

「む？引つ掛ける所があるな・・・ここを・・・ふッ！」

「おっ♡おほおお♡おお♡」

にや、にやにか引き抜かれたあ♡

にやに今のお♡うんちが一気に出たみたいでしゅごい気持ちいい♡♡

「冬萌・・・お前、日頃からこれを入れてたのか・・・」

そう言って、アへってる俺の顔の前に落として来たのは一粒がビーズの二、三倍はあ  
るアナルビーズだった。

「へ？・・・い、いや冬萌、こんなの知らな・・・」

「お前のお尻の穴の奥に入ってたのにか？」

「ツ・・・で、でも・・・本当に・・・うひっ♡」

認めようとしないうちに業を煮やしたのか、アナルビーズを手に取り、再び中に挿入す  
る母様。全ては入れずに最初は一個で入れるのと引き抜くのを繰り返しながら、徐々に  
入れていく数を増やしていく。

「こんなにもジュポジュポ卑猥な音を立てて吸い付いて来るのに、それでも違うと言  
うのか？」

「ひぐっ♡うひっ♡ち、違ッう♡と、冬萌ッ♡しよんなのッ♡ほお♡お♡」

あッ♡やらッ♡

母様、全部の球を出し入れしだしたからッ♡気持ち良さが比じゃッ♡

おお♡♡これしゅごいよお♡

顔がアへるの止めらんやいよお♡♡

「もう白状したらどうだ？『冬萌は自分でお尻の穴を拡張する変態です』って」

「ツ!?そ、そんな事ツ♡だつて本当にツ♡冬萌じゃあツ♡」

「むう、強情な奴だな・・・仕方無い」

「ほおお♡お♡」

全て引き抜いて漸く開放される。アナル絶頂という、初めての快樂に全身の力が抜け、唯々ビクンビクンと痙攣するばかり。母様が服を脱いで何かをしている事は何となく分かるが、何をしているかまで確認する余裕が無い。

そうして力が入らないものの痙攣が収まってきた頃に、母様が手袋を外した手でおまんこ辺りの布地を横にずらし、肉厚に引つ掛けておまんこが丸出しになる。そして、手を脇に通して、身体をひよいつと持ち上げられた。

「か、かあ<sup>母</sup>ひやま<sup>様</sup>あ・・・?」

持ち上げたまま仰向けで横になる母様。何をしているのだろうか、と回らない頭で考えているとお尻に何かが当たる感触がした。それは紛れも無く、秘薬でトロトロにコーティングされた母様のビンビンの勃起おちんぼの亀頭だった。

「さあ、どうする？素直に白状するなら止めてやるが・・・もし、まだ『違う』と言うなら、このまま根元まで一気に落としてしまおうぞ？」

「え・・・や、やだ・・・待つて・・・」

期待はある。しかし、怖い。

少しずつ入っていくならまだしも、こんなバキバキの凶悪ちんぼに一気に貫かれたら、きつと凄いい事になる。既に気絶する程の快楽を体験した事があるが記憶が曖昧だ。それに快楽に堕ちるのも強烈な快楽に曝されるのも、まだ全然慣れていない。

それに加えて、今回はアナルだ。未知に対する恐怖心が勝ってしまう。

「うう・・・ッ！ひぐう♡」

「この体勢で支えるのは中々辛い。早くしなければ、つい手を緩ませてしまうかもなあ？」

嘘だ。見るからに余裕そうだし、安定感もある。恐らく少なくとも後一時間は余裕でいけるんだろう。でも、一概に嘘だと決め付ける事も出来ない。主導権は母様が握っているんだから。

となると、大人しく従うべきか。

「と、冬萌は……自分で……お尻の穴を……拡張する……へ、変態……でしゅ……」  
「んん？何だ？小さ過ぎて聞こえないぞ」

「ツツツツツツ!!違うもん!冬萌してないもん!そんなの知らない!」

「……ふくん、そうか」

あ、やば。母様の目が座ってる。

つい、反抗心が芽生えて本当の事を言っちゃった……てか、本当の事なのに何でこんな事になってるんだろう？

「仕方無い、責めてもの慈悲だ。合図をするから心の準備をしろ。3、2、1で降ろすぞ。

いいな?」



「へ？や、ちよつと待って！早——」

「それ、さーん」

ちよ！本当に待って！まだ力入らないから抵抗も出来ないし、イキまくった直後にそれはヤバいつて！

「にー」

ヤバいやバいやバいやバいや！

後1で来る！来ちやうう♡ 凄いのがお尻に——

「あ」

「ほお、おおお、お♡♡あ、ツ~~~~♡♡おお、♡…おツ♡…おおツ♡ツ♡…  
あ、はあ…♡…♡…はあ♡」

あ、ああ♡

う、う嘔吐しよちゆ息ぎい♡

1で入れるって言ったのにい♡

奥の奥まで刺さってッ♡

目が白目向いちゃうし、意識も飛んじやったよお♡

「すまない、手が滑ってしまった」

しかも、悪びれる様子が全然無いしい♡

「ん？私の身体に偶然、足が乗って根元までは入らなかったか・・・いや、しかし・・・これはこれで」

いや、根元までは入らなかったけど、かなり奥まで入ったよ？サイズを考えて、サイズを。それに相変わらずちんぽは剛直過ぎて、強制的に身体を起こした状態にされるし、母様が言った通り母様の腰辺りに爪先立ちで立って、まるでいつかの日のエロ蹲踞状態だよ。

立とうにも力が全く入らないし、何故か脚は自然と開脚するし。それを下から眺める母様の視線が・・・ひう♡おちんぽがおつきくなった♡

「・・・冬萌、秘薬も奥まで塗り込まれた事だろう。嫌なら抜いてもいいぞ。中はユルユルのトロトロだが、そこまで否定するなら、母様も無理にシたくは無いです。だが、母様が動く为止まらなくなりそうだから、自力で抜いてくれ」

「・・・ふえ？」

何か裏を感じる。自分で抜いてくれない所とか特に。でも・・・うん、抜こう。流石にこれはちよつと俺には早いし、この状態で射精されると色々アカン事になる気がする。それにそこまで寸止めされてないどころか、イカされまくったからその辺の欲求も弱いし、出来れば個人的に後ろでは無く前がいい。

しかし、足には力が入らないので、手を母様のお腹に添えて何とか腰を持ち上げようとするが――

「んっ♡・・・ほおう♡ッ♡」

あ・・・ぐう♡無理い♡これ、絶対に無理い♡

おまんこ程じゃないけど、上げるだけで中が擦れて快樂でふにやふにやにされるし、

それで力が入らなくなってまた振り出しに戻されるよお♡

これじゃ、自分から腰を振ってる変態じゃんかあ♡♡

「んっ♡・・・おッ♡・・・くう♡・・・イグウツ♡」

「・・・」

その後も何度かトライしてみたが、精々が拳一つ分行った所で堕ちてしまう。そこから一気に下まで落ちていき、何度目かのアナル絶頂。心が折れそうになるも、先程からアナルの中でカウパーをおしっこのように溢れ出している母様を見るに相当我慢してみたいだ。母様が頑張ってるから、と心を保ち、このままでは何も進展が無いと判断して、少し休憩してから再度トライした。

幸いな事にこのタイミングで秘薬の効果が発揮され、快樂が引いて行く。最後のチャンスと思つて何かなんでも引き抜いていく。

「ひう♡・・・んんっ♡・・・あ♡」

そして、ついに時間は掛かったものの、手をギリギリまで突っ張つて今出来る最高の

高さまで腰を上げる事が出来た。後は抜くだけであり、何とか身体を捻って今にも射精してしまいそうなパンパンのギンギンちんぽを抜こうとするが――

「ん♡・・・ん？」

元より体勢的に腰の可動域が小さい事もあるが、主な問題は半分と少ししか抜けていなかったということ。プルプル震える手を気合いで維持しつつ、腰を上下左右に振ってみるが、抜ける気配はゼロ。

寧ろ、お尻の中を掻き乱されて余計な快楽が襲って来る。それ即ち力が抜ける訳で、ついにその場で留まる事しか出来ず、腰を上げて今にも落ちそうな状態を維持する事しか出来なくなった。

しかも、腕の限界が来るのも時間の問題。正直、腕にも力が全然入っておらず、関節を伸ばしてつかえ棒の容量でこの体勢を維持してるだけに過ぎない。

「うっ♡・・・♡くっ♡・・・♡」

そんなものがいつまでも保つ訳が無く、おまけに秘薬の本来の効果である即発情。ち

んぼを突っ込んでいるのだから、当然ではあるがこの見計らったかのようなタイミングに悪意を感じてしまう。

しかし、だからと言ってどうこうする事も出来ず、数秒後には再びこれまでの努力を嘲笑うかのように、一番下まで一瞬で堕ちてしまった。

「ほお、おぐうう♡♡ ツツツ~~~~♡♡!♡♡・・・あ♡♡・・・ああ♡♡・・・ツ!♡♡  
お、おお、お♡♡」

ある程度抜けて少しだけ前屈みになれていたが、強制的に身体を起こされて手も離れ、爪先立ちのまま身体の中を突き刺される。何度も気絶しては絶頂して、強制的に起こされてまた快樂に曝される。秘薬の効果も相俟って今までの比では無いソレ快樂に俺は為す術も無く、唯々ひたすらにイカされまくるだけだった。

「そうか、そんなにも欲しいのだな。よく分かった」

「ふえ・・・?♡・・・かあ母ひやま様あ、にや何にを・・・?」

未だにビクンビクンと痙攣する俺の腰をガツシリと両手で掴む母様。何をするかは

手に取るように分かるが、脳が理解する事を拒否する。それでも、これは兎に角ヤバイ  
 と言う事は嫌でも分かる。

「待つ・・・待つまつてえひえ・・・無理い♡壊れるう♡おおひり尻れ絶つらいに壊れるう♡ひぐツ♡ほお  
 ♡お♡おお♡♡ヒグウウ♡♡おつ♡おお♡」

制止の声をなんか無視して、挿んだ腰を上下に動かされ容赦なく強制的にピストンさせられる。一度の往復で数十回絶頂させられ、ユルユルになった尿道から、おしっここと潮が同時に吹き出す。

「ひうツ♡か、かあひやまにおしっこがあ♡冬萌のおしっこ掛かってえ♡♡あう♡お  
 ♡ツ♡おお♡お♡」  
 「本当ツ♡どうしようもないツ♡娘だなツ♡母様におしっこ掛けてツ♡締め付けるなんてツ♡そんな悪いお尻にはツ♡お仕置きわしなくては・・・なツ！♡♡」  
 「ひぎゆううう♡♡」

おしっこ掛けたタイミングでおちんぽを更に大きくバキバキにした母様はそれ以上

の変態だと思うのですが、それは冬萌だけですか？

まあ、そこは置いておいて、手での強制ピストンに加え、母様が下から腰を突き上げて来る。その突き上げだけでも暴力的な快感が襲って来るのに、加えて身体の上に立っているのがいけなかった。

足場である母様の腰辺りが激しく動くので、それに伴って身体も上下に動く。そして、タイミングバツチりに手で強制的に腰を落とされ、ちんぽが抜けないギリギリの最大限の可動域で何度も何度も異常なまでの威力でお尻を好き勝手に蹂躪していく。

「きゆうきゆう締め付けてツ♡本当にツ♡初めてなのかつ♡また寝てた母様のちんぽでツ♡楽しんでたんじやないだろう・・・なツ♡♡」

「ひツ♡ひあうツっ♡してツ♡ないもんツ♡♡おおツ♡知らないツ♡こんな知らないよお♡♡」

「本当にツ♡そうかつ？なら、友達の前でツ♡アナルビーズ突っ込んで興奮してたツ♡いけない子はツ♡♡何処の誰だツ？♡♡」

・・・え？



「お？更に締め付けて来たなッ♡興奮したのか？思い出して、興奮したんだな？」  
「ち、違ッ♡」

「何が違うんだッ♡身体は正直だぞッ♡お前もいい加減認めたらどうだッ♡『自分はお尻で感じまくる変態です』って！」

「しよ、しよそんな事なにやいもんッ♡言わにやいッ♡絶れ対つらいに言わにやいッ♡♡冬萌ッ♡お尻で感じてなんかッ♡♡」

「そんな素直じゃない冬萌には、熱々の子種をプレゼントだッ♡♡♡」

その掛け声と共にお腹の中へと流れ込む大量の熱々特性濃厚ザーメン。

「ツツツ!!ひぎゆうううツツ♡♡ほおお、おおツツ♡♡熱あちいゆいの来たあ♡一杯出てるよオ♡♡ヒグウウツツ♡♡ああ・・・止まんにやい♡・・・イクの止まんにやいよおおお」

身体は仰け反り、目はチカチカして訳が分からない。脳まで駆け昇る電流の嵐が脳細胞を死滅させる勢いで次々に押し寄せる。案の定、顔はぐしやぐしやのアヘアへになり、脳イキアクメを何度も迎えた。

そして、続いてやってくる霊力吸収による抗い難い快樂が未だにイキ続ける俺の身体に容赦無く押し寄せて来る。

「あツ♡ツツツツ~~~~♡♡♡♡♡おお・・ツツ~~~~♡♡♡♡ヒグウ!!」  
「まだまだ終わりじゃないぞッ♡」

一度出し切り、再び腰を動かす母様。イキまくっている俺なんかお構い無しに先程と変わらぬ剛直を乱暴にされど弱点を抉るように突き刺してくる。

「ほおッ♡おお♡おぐッ♡」

もう訳が分かないよお♡

イキっぱなしなお♡ずっとイッてるのお♡

お尻気持ちいい♡気持ちいいよお♡♡

「ふふッ♡さつきからお尻をきゆうきゆう締め付けて、イキまくりじゃないか♡そんなエッチでダラしない顔をしてるのにまだ否定するのか?」

ふえ？母様、何か言ってる？

でも、それどころじゃないよお♡

兎に角、止めてええ♡もうやらああ♡

イキたくないのおお♡♡もうお尻はやらああ♡♡

「素直に言うならッ♡ご褒美をやるぞッ♡ほらッ♡言ってみろッ♡♡」

ご褒美・・・？

止めてくれるの？

ッ・・・言う言う♡言いますッ♡♡

「しそうれうしでゆすッ♡ひ冬よ萌もおへ尻はおおひ尻り尻ハおメおハおメおしおやおれおておひ喜よろ喜ほう喜変喜態喜れ喜す喜う喜♡ひ喜ひ喜よ喜の前喜であ喜に喜やる喜弄喜つ喜て喜興喜奮喜して喜まし喜た喜ア喜♡き氣も持ひちいい♡き氣も持ひちいいにいよいおの♡♡ももつもひとよとジ濃ュ厚ポザジメュンポ一して注えい♡ひ冬よ萌もおへおのおにおや腹か腹にあ熱ち熱ゆ熱あ熱ち熱ゆ熱の熱に熱よ熱う熱ご熱う熱り熱や熱ー熱め熱ん熱ひ熱つ熱ぱ熱い熱し熱よ熱い熱れ熱え熱え熱♡♡」

「ッ♡♡♡♡♡ああ、注注いで注やる注ッ♡♡キキュキウキュキ締締め締付付けて付、搾搾り搾取取ろうとと

するエッチなお尻に♡♡中出しご褒美濃厚ザーメン♡♡たつぷりと注いでやる♡♡♡♡うっ♡♡くう♡♡♡いクウウウ♡♡♡♡

トドメとばかりに奥の奥まで勢い良く突き上げられたちんぽ。その勢いに脚がずり落ち、根元までしつかりと捻り込まれた。

「はにやああああ♡♡♡きひ来やああ♡♡おたほおおおお♡♡あち熱ゆいいによおお♡♡止まんにやいい♡♡脳がバチバチ来りゆうう♡♡♡♡

今まで届いていなかった所まで侵入し、完全に攻略されてしまった。潮を吹き出しながらイキまくり、意識もすぐにトんだ。戻っても瞬きすら出来ない時間で次々に襲ってくる快楽に意識も再び即墮ちする。

それを繰り返して行くと、脳が覚醒するのを諦め、意識は完全に暗闇に堕ちて、身体はずつとビクンビクンと痙攣してイキっぱなしだった。



「・・・お尻、変な感じがする」

「まあ、仕方あるまい」

好き勝手にイカされまくり、気絶した後も霊力吸収で更にイキまくった次の次の日の朝（要は2日後）

目を覚ますといつも寝巻き姿で布団の中に居り、お尻に異物が挿入されたような妙な感覚がしたのでそう零すと、横から声がした。そちらに顔を向ければ、母様が横になり片肘を突いて頭を支えた状態（手枕）で苦笑していた。

「あれだけ注いだんだ。何も無くても、慣れるのに少し時間が掛かる」

ポーツとした頭で記憶を整理していく。その中で気になった事があったので尋ねてみた。

「・・・ねえ、母様」

「なんだ？」

「アナルビーズ・・・あれ、入れたの母様でしょ？」

「そうだが？」

「……」

いや、『そうだが？』じゃねえよ。なんでドヤ顔なんだよ。もう少しは誤魔化したり、惚けたりしろよ。後、その顔でニヒルな笑みを浮かべないで。綺麗で恰好よ過ぎて直視出来ない。

ん？……あれ？なら、いつ入れたんだ？

「いつ入れたの？」

「入れたのは今朝だ」

『『入れたのは』？』

「それまで、お前が寝ている間に開発などはしてたな」

「……」

じゃ、何？

秘薬無しでアナルを弄られて悶えたり、すんなりちんぽが入ったのも全部母様の仕

業って事？それを知った上であんな言葉攻めを？

・・・これには寛容な冬萌もプツチンですよ、母様？

「母s「冬萌」・・・ツ♡」

被せるように、母様が声を重ねて来た。同時に白装束（寝巻き）の裾をズラして、その間からギンギンに勃起した朝勃ちおちんぽが顔を覗かせた。

「抜いてくれないか？♡」

「はひい♡♡♡」

こ、今回はこのおちんぽに免じて許してあげましょう・・・あつ♡臭いしゅごツ♡♡

◇

おまけ

「ん・・・トイレ行ってくる」

「ああ、分かった」

母様のおちんぽを手コキとフエラで抜き抜きした後、普通にいつもの朝を過ごし、母様と一緒に食器を洗っていた冬萌。そんな時、便意を催してきたので一言断りを入れて、背が足りずに乗っていた踏み台から降りて厠へ向かう。

The 和風みたいな神雑家だが、トイレは洋式と和式のどちらも兼ね備えている。和式は元から、洋式は後からで和式を取り壊すのもなんか勿体無い気がして結局両方とも設置したままなのだとか。

「あ・・・ま、いつか」

部屋を出た冬萌を見送り、再び皿洗いを始めようとした母様はこれから起こる事を予見したが、止めた所でどうしようもない事なので、そのまま放置して皿洗いをキリのいい所で済ませた。

その直後。



「ほによおお、おお♡♡にやにこれえええ♡♡白いうんち気持ちいいによおお  
おお♡♡」

どちらかと言えば、洋式派の冬萌が入ったトイレからそんな嬌声が聞こえて来た。

「やつぱりか・・・」

何かを察した母様は下の戸棚に掛けてあるタオルで手を拭き、股間に巨大なテントを張りながら冬萌の元へと向かう。

そこには便座に腰掛けたまま、アへ顔で股を開いて失禁している冬萌が居た。

「大丈夫か？冬萌」

「か、かあひやまあ♡♡ひよもへうんちでいっひやつはあ♡♡」

「それはうんちでは無い。母様の子種だ。朝にお腹に注いだ子種の吸い取り切れてなかった靈力で発情して、イッてしまったんだらう。婆様も偶にそうなっていた」

「じゅっひよ・・・こうにやによお？」

「いや、基本的には問題無い。今回みたいに靈力を吸い取り切れてなかったり、発情して

いる状態のみだ。安心しろ・・・それはそうと、だ。冬萌、これをどう思う?」

「・・・しゅごく凄・・・遅しいれしゆう♡♡」

「そうだな、こうなったのはエツチな声を上げる冬萌の所為だ。責任、取ってもらどうぞ♡」

「ま、待つ・・・ほおお、おう、♡♡にやつ♡♡にゃんれツ♡またツ♡お尻いいいいいい♡♡」

実は辺境の地に住んでいる理由の一つとして、喘ぎ声が近所迷惑になる、というのがあるがそれはここだけのお話。

「イグツ♡イグツ♡お尻気持ちいいによおおお♡♡」

## 第6話・節操無しの母様にお仕置きを（シゴキ倒すだけ）

「冬萌、準備出来たか？」

「ん、バッチリ・・・と思う」

今日は待ちに待ったお出掛けの日。

少し遠くの町（電車で二時間の最寄りの町）へと繰り出す為に、日が昇り始める程に朝早くから家を出る事にした。

母様は相も変わらず常識外れの美貌とエロシゴボディをいつもの改造痴女風巫女服（本人は大して気にしてない）に身を包み、靴は踵が少し高い編み上げのブーツ。それらが母様の美しさを更に際立たせている。いつも巫女服なのはこれが一番ちゃんぽを誤魔化しやすいからだそう。後、普通に気に入っていたり着慣れているから。

かく言う俺はふたなりちんぽは無いので、巫女服を着る必要は無く、いつもより少し装飾が付いた水色のワンピースに白色のハットを被って準備完了。しかし、アナルセツクスのように何事も初めては不安だ。これで本当にいいのか、どうしても自信が持てない。

実は巫女服を着るか？と母様に言われたが拒否した。母様とペアルックなのは嬉しいが、公の場で少し気恥しいというのが俺の中で勝ってしまった。残念そうな顔をした母様を思い出して罪悪感が今更ながら募って来たが、今回はもうこのままの格好で行こうと思う。

「まあ、町の散策は序で、今回の目的は幼稚園までの通学路の確認とその理事長との挨拶だ。そう気に病むな」

学校とは『私立幻想学園』の事であり、幼・小・中・高・大の全てが存在する日本最高峰の超マンモス校。因みに俺は来年にその幼稚園に一年だけ通い、翌年に小学校に上がる予定だ。神薙家は代々これと同じ入園・入学をしているらしく、学園関係者の殆どが神薙家の者と関わった事があり、現理事長と母様は同級生だったらしい。

「うん・・・よしッ！行こッ！母様！」

「ああ、それじゃ駅まで走るからしつかり捕まってる」

そう言って、母様は俺をヒョイツと持ち上げて、腕にすっぽりと抱かれた。

「……え、走るの？」

「?……そうだが？」

いや、『当然だろ?』みたいな顔されてる所悪いけど、幾ら俺の体重が軽いと言っても流石に無理があると思うんだけど……。

「だ、大丈夫!一人で歩けるから!」

「何、心配するな。そら、喋ってたら舌を噛むぞ」

「へ?ちよ、待つ……てえええええええええ!!?!」

まさか『走る』では無く、『跳ぶ』だとは思わなかった。鳥居に軽くジャンプして飛び乗り、膝をググツと曲たと思つたら一瞬で景色が変わった。

そこは一面青色で、下に連なる山々が見える。信じたくは無いが、現在俺達はかなり高度の上空に居る訳だ。命綱とかパラシュートとか無しにそこらの山を軽々超える程の高さ。

風圧はどうしたとか、何がどうなってるのかとか、そんなツツコミなど今の俺に出て

くる筈もなく、下を見てしまったが故に恐怖で身体が竦み、自然と悲鳴を上げてしまう。

「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイ」

!!?!?!?!?

しかし、これだけでは終わらない。『飛んだ』のではなく『跳んだ』のだから、次は必然的に落ちてしまう。フワツと身体の芯に浮遊感がやって来たかと思つたら、超高度からの放物線を描いての落下。ジェットコースターが乳母車かと思つてしまう程の恐怖がそこにはあつた。

「ツツツ~~~~~~~~~~~~」

!!?!?!?!?

恐怖から少しでも逃れる為に母様のお胸様に顔を埋めて安らぎを得る。流石の包容力で一時は凌げたと思つたが、やっぱり無理。声にすらならない悲鳴を上げて着地するのを待つ。

「ツ！……着い……たああああ!!?!」

突然、落下が収まりチラリと外の景色を見てみると地面があった。安堵したのも束の間、すぐ様先程の跳んだ時の衝撃が襲って来て気付けば空の上。

状況を理解する前に再び浮遊感が襲って来て、少ししたら地上に戻って来た。と、思ったらまた空の上。意識が飛びそうになる俺を他所に母様は変わらぬテンポで何度も山を超えて行つた。

◇

「着いたぞ、冬萌・・・冬萌？」

「・・・」

母様の声が聞こえる・・・ような気がする。意識が朦朧とする中、未だに恐怖で母様のお胸様から顔を離す事が出来ない。そんな俺を安心させるかのように母様が頭を撫でて慰めてくれる。

「ほら、もう怖くない。怖くないぞ」

数分程そうされ、漸く顔を離す事が出来た。顔を見上げると安堵したような表情で見下ろす母様が居たが、俺の顔を見た母様が仕方無いなあ、とでも言いたげな表情になっていた。

「顔がグシャグシャじゃないか。ほら、鼻咬むぞ。チーン」

「チーン！」

咬んだティッシュを近くのゴミ箱に捨てる母様。よくよく見てみれば既に駅に着いており、廃れた無人駅だった。

「さ、降ろすぞ・・・おっと」

落ち着いてから降ろしてもらうと、母様が手を離れた瞬間にペタンとお尻を着いてしまった。立とうにも力が入らないので、どうやら腰が抜けてしまったようだ。それだけならまだ良かったのだが、圧倒的な恐怖からの解放により色々力が緩み、下のお口も緩んでしまった。

つまり、失禁したのだ。



「……………」

「……………あー」

呆然とする俺にやつちまったなー、みたいな声を出す母様。自身が何をしたのか理解すると、次第に羞恥心やら安堵感やら何やらと様々な感情が湧き上がり、心の中が滅茶苦茶になった。結果、俺は周りなど気にせずになんなん泣き出してしまった。

「うゝわゝ ああゝ あゝ あゝんん！があゝ しゃま のばかあゝ あゝ ああゝ あ!!」

「うえ!? え、そ、そんなに怖かったか? す、すまん…母様が悪かった。悪かったから、泣き止んでくれ、な?」

「うゝわゝ ああゝ あゝ あゝんん!!」

「あ、あわわわ、え、えつと…えーと…」



「……………うう」

死にたい。凄く・・・死にたいです。

失禁した挙句にあんな泣き喚くとか・・・はあ、記憶無くなつてくれないかなあー。

数分程泣いて漸く収まり、冷静になれた。冷静になつたが故に今度は心中丸ごと羞恥心で涙腺が決壊しそうになつたが、出し切つた後なので醜態を晒さずに済んだ。と言つても、これ以上に無い程に醜態を晒した後なので手遅れもい所なのだが・・・。

おしつこで色々駄目にしてしまい、母様が汚れた服を持つて一度全力で帰宅。瞬きしたら山を飛び越えた後つてどういふ事なの？まあ、そこは置いといて、その間に俺が何をしているかという、近くの小川で真つ裸になつて身体を清めるついでに人生初の川遊びをしていた。

気持ちいい。

この時期の冷たい小川もそうだが、こんな外で真つ裸な事が何よりも気持ちいい（意味深）

通行人が居たら、バレないようにそちらに向けて胸を張つて色々とおつ広げたい。

正直な所、オナリたい気持ちもあるのだが、流石にあんな事をした後にそんな気分

はなれなかつたので大人しく水中を観察中。

「と、冬萌・・・持って来たから着替えよ？」

小魚やタニシを見てみると、いつの間にか陸に母様が居た。何処か申し訳無さそう  
な、反省しているのか随分とオドオドしている。別に怒って無いんだけどなあー。

あの時は色々と感情的になってたっただけで・・・いや、確かに何の説明も無しにあ  
んな事をされて少し苛立つてるけど、凄い距離（母様曰く、普通なら徒歩二時間以上）を  
大した苦も無く移動出来たんだから、文句を言う筋合いは無い。二度とやって欲しくな  
いけど。

「ん、今行く」

バシャバシャと水を掻き分けて母様の下まで転ばないように歩いて行く。何かさつ  
きから母様がチラチラと見てるような・・・。

そんな疑問を抱きつつ、川から出てタオルで身体を拭いていく。渡された服は何と巫  
女服一式だった。母様が着ている脇から太股にかけてパツクリと開き、肩と袖が別れて

脇や横乳、太腿が丸出しになるアレ。そして、ピタツと張り付くインナーやスパッツ。序に履いていたサンダルもビシヤビシヤで暫く使えそうになかったので、ソックスも渡されて母様と同じ子供用の編み上げのブーツを履かされた。

・・・ははーん？そういう事か。

「.....」

「と、冬萌？どうか、したか？」

「んーん、何でもなーい」

母様が少し挙動不審な理由に見当が付いて色々と納得がいった。俺が気付いた事に気付いていないであろう母様に返事をして、渡された巫女服を着る。実はこの巫女服、普段着として何度か来た事があるので着方は分かっている。髪は濡れたままだが、この日差しなら軽く拭く程度で大丈夫だろう。

特に苦勞する事も無く着終わったので結局、お揃いになった事にポワポワとしながら母様と駅に向かい、駅の改札へと向かう。切符でも買うのかと思えば、そうでもなく普通に素通り。まあ、無人駅だし、特殊な機械がある訳でも無いから何も言われないけど、

いいのかな？

そんな疑問を持っている事に気付いた母様がどうかしたのか、と問うて来たので素直に言ってみた。

「駅って・・・えつと・・・テレビで見たんだけど、切符？みたいなのを買わなくていいの？」

「?・・・ああ、そういえば言っていなかったな」

納得がいったとばかりに思案顔になる母様。恐らく、どう説明しようか悩んでいるのだろう。その予想通りに数秒後に母様が懐から真っ黒なカードを取り出した。

「前に神薙家は何かと免除してもらえる、みたいな話をしたのを覚えているか？」  
「うん」

「その一つがこのカードだ。これがあれば、国内の公共交通機関の殆どが無料で使えるようになる。勿論、制限はあるがな。それでも普通に使っていたら制限に引っ掛るなんて事はまず無い。今、申請しているから入園までにはお前の分も届くと思うぞ」

ほへえ、便利な物があつたもんだね。なら、タクシーとかもある程度なら乗り放題つて事か。それにお金とか嵩張かさばらなくなるし、コンパクトに纏められていいな。

「無くしたら、どうなるの？」

「ん？別にどうもならんぞ？時間は掛かるが、申請すればまた届くし、悪用もされない。そもそもこれは私達神薙家しか使えないように出来てるらしいし、一目見ただけで普通は何の用途か分からん」

「へえー・・・所で、電車はいつになったら来るの？」

特に興味も失せたので、話題転換序に気になっていた事を聞く。実は俺が失禁した時から今の今まで、まだ一台も電車が来ていない。ここが終点だからと言って、幾ら何でも来なさ過ぎである。

「電車か？・・・えーと、この時間帯なら・・・後十分後だな。因みにそれを逃したら三時間後だ」

「え、三時間？」

「そうだ。寝坊したら電車を乗る距離も考えて五時間の遅刻……午前の欠席は確定だから、しつかりしろよ？ 母様に連れて行って貰いたいなら、話は別だがな」

「!? だ、大丈夫！ 早寝早起きは得意だから！ 母様は何も心配する事は無いよ！」

「そうか……では、その日<sup>寝坊</sup>を期待せずに待つとしよう」

絶対に寝坊だけは止めよう。待ち時間も合わせて五時間という事は電車で二時間も掛かる距離をあんな方法で移動されたら、服が何枚あつても足りやしない。

自力であの領域に行けたなら克服は出来るだろうけど、絶対に無理だ。イメージがまるで出来ない。



十分後。

髪がある程度乾いた頃、母様の言った通りに一直線の線路の遠くの方に、音楽のみの簡単な駅内放送と共に電車のヘッドライトが見えて来た。ウキウキしていると母様に黄色い線からは出るなよ、と嗜まれて自重して待つこと数分。

趣を感じるボロそうな一両編成の電車が漸く駅に着き、扉が開く。中には車掌さん以

外は誰も乗つて居らず、スツカスカだ。立ち上がる母様よりも早く、待ち切れなかつた俺は中に小走りで入り、見渡してみる。

外とは裏腹に普通に綺麗な内装。椅子は横に一列に並ぶロングシートタイプ。生前見た内装よりも身長故か何処か広いような気がしたが、どうやら上にぶら下がっていた広告などが綺麗サツパリ無くなっているようだ。まあ、あつた所で見る訳でも無いので残念とかは思わない。

「目を輝かせている所悪いが、そろそろ出発するから席に着け。ほら、こつちだ」

既に座っていた母様が目を輝かせていたらしい俺に声を掛けて、隣をポンポン叩く。うーむ、見慣れていはいあるけどこうして改めて見ると本当に綺麗なだよな、母様つて。そんな母様に隣に来るようにポンポンされると、こうドキツとしてしまうものがある。

「よーいしょつと・・・」

身長差的に思ったよりも高かつた座席に何とか乗つて座つたと同時に車内に出発の放送が流れる。すると扉が閉まり、ガタンツと車体が揺れるとゆつくりと動き出した。



五年間監禁紛いな事になってた所為で何もかもが凄く懐かしい。少し揺れが少ない気もするが、その辺の技術が進んだとかだろう。膝立ちになって外を眺めみると、神社からは見えない、まだ見た事無い景色が過ぎて行く。

「危ないぞ」

ずっと外を見ていると母様にそう咎められ、同時に持ち上げられて母様の上に外を向いた体勢のまま母様の足を挟むように股を広げて座らされた。固定するようにギユツと抱き締められ、胸に感じる母様のぽよぽよのお胸様を堪能しつつ、座席に膝立ちになって肩口から外の景色を眺める。

「・・・あ、鹿だ」

「猪の親子も居たな。後、イタチやリスも」

どうやら、母様も見ていたようでそのような事を声が横から聞こえた。見れば母様も首を捻って同じように外を見ていた。

「え、何処？」

「ふふつ、もう過ぎたよ」

すげえな。今の一瞬で見たのか。常人のそれを軽く凌駕するなあ。

「わっ！真っ暗・・・」

「トンネルだな。少し長いが出た時が凄いで。すぐに終わるからよく見ておけ・・・あ、蝙蝠」

「なんで見えるの!？」

「母様だからな」

ドヤ顔で意味不明な事を言う母様可愛い。

母様曰く、トンネルを出ると凄いらしいので、ジツと外を見て待つこと一分弱。トンネルから出た瞬間に現れたのは左右に連なる山々。青々と茂る草木に谷となっている所に流れる大きな川。空に昇る太陽を水面が反射し、映画のワンシーンのような景色だった。

しかし、それを堪能する間もなく、電車は再びトンネルに入り外は真っ暗になってし

まった。

「母様！母様！凄いい！何今の!?キラキラってなつてた！凄いい！」

凄いい（語彙力）

「わ、分かった。分かったから落ち着け。あまりこの状態で騒ぐな・・・んっ♡」

「他には!?まだ色んな景色が見れるの!?このトンネルを抜いたら次は何!?」

「と、冬萌！落ち着きなさい！」

「ッ!?・・・ごめんなさい・・・」

「あ、いや・・・母様も怒鳴ってすまない。でも、電車の中では静かにしような？マナーだから」

「はい・・・」

「ん、分かればいいんだ。」

母様の上でユサユサ暴れてると怒られました。自分でも流石にはしやぎ過ぎたと自重しつつ、思ったよりも母様に叱られた事がショックでショボンとしてしまう。

「ほら、別に怒ってる訳じゃないから、そんな顔をするな。おいで。ギュツとしてやるから、また外の景色でも見てみるといい」

「ん」

慰めるようにギュツと抱き締められる。再びふにゆんと母様のお胸様が押し付けられ、その感触を楽しみつつ外を眺める。

「……ツ♡……ん♡」

「……」

「……ん♡……あ♡」

先程から母様が身動きみじろをしている。理由は分かっている。俺にバレないように俺の身にバキバキちんぽを擦り付けてシコシコしてるんだろう。

実は最初に母様の上に乗せられた時から、母様のちんぽがフル勃起している事は分かっていた。やけにギュツと抱き締められるのはおちんぽを俺に押し付けてスリスリする為。話を合わせて来たのは、恐らくバレないスリルでも味わっていたのだろう。

叱つたのは先程の理由もあるだろうが、もう少しでイキそうになったから。流石に今から人に会いに行くのに服の中で射精する訳にはいかなかったのだろう。

母様の上に乗ってる間もずつつつと母様の服の中で反り返ったおちんぼがビクビクしながら身体に押し付けられてるんだもん。分かんない訳が無いよ。渡された服の中にも下着が無かったし。スパッツを下着変わりにする人は確かに居るけど、今回の母様の目的は別だろう。

何よりもスパッツがピチピチ過ぎておマンコの形がくつきりと浮き出てるし、妙に生地が艶やか。どう見ても着エロ下着です。着替えてる時も母様ガン見して来たし、隠す気あるのか本気で考え直したよ。

それに服を隔てているとは言え、霊力自体はどのような物理的障害は何の意味も成さない。さつきから俺もずっと発情しっぱなしで抑えるのが大変なのだ（お股は既に大変な事になってる）

ここでおつ始めるのも悪くは無いけど、車掌さんしか居ないと言つても流石にそこまですぐ直れてない。家以外での野外プレイは興味があるが、今はまだ勘弁して欲しい。母様もこの状況を楽しんでるだけで襲うつもりも無さそうだし、俺は俺で楽しむとしよう。

肩に顔を置いてるから、丁度互いの顔が見えない。母様も今頃は俺が外に夢中だとかおめでない事を考えているのだろう。ふっ、甘いな。真面目な顔して頭の中は煩惱だらけのムツリちゃんぽ母様の考えなんて手に取るように分かるよ。

今頃、イキたくて仕方無いけど、服の中で出す訳にはいかない、とか葛藤しているのだろう。娘でオナろうとする母様には少し痛い目を見てもらわなければ。

ほーら、おまんこを押し付けて裏筋をすーりすり♡

「ぐっ♡・・・うう♡」

「?・・・母様、どうかしたの?」

「ツ!い、いや、何でもない・・・」

「そう?・・・ねえ、母様、もう外はいいから前向いていい?」

「えっ・・・あ・・・」

ああ♡目に見えて動揺してる♡

果てて無い状態で快楽が無くなるのはツライよね♡

でも大丈夫♡まだ終わらないから♡

「ダメ？」

「い、いや・・・大・・・丈夫だ・・・」

すつごく名残惜しそうに手を緩める母様。動けるようになったので母様の上で身体の向きを変えて母様を背もたれ代わりに座る。

「はう・・・♡」

その時に態と足をおちんぼに軽くグニツと押し付けければ、案の定母様が喘いだ。傍から見たら、偶然だと思う程に自然な動きでしたので、恐らく母様もまだ確信は持てて無いのだろう。

尚も懲りずに俺をギュツとあすなる抱きをしつつ胸を揉んでくる母様。もう少し多くの霊力が胸にいつてたら確実に今のでイツてたな。

そんな母様に背を預けて足をブラブラさせる。足をブラブラするのは単なるカモフラージュ。本命はそれによりおちんぼが当たっている背中やお尻を態と大きく動かし、

それを気取らせない為。すると丁度お尻の間に挟まつてるおちんぼを左右のお尻で交互にシコシコシゴいたり、背中で左右に擦ったりする事が出来る。

「あ……♡くう……♡」

と言つても所詮は尻に背中。尻を動かす特殊な訓練なんてものをしてないから、可動域はそこまで大きくない。だからこそ刺激が小さくなり、今頃我慢汁ダラダラの節操無しのおちんぼにはこれが効く。

「ツ……♡と、冬萌ツ……♡」

お、そろそろか？はい、ストップ。

「ツ！……うあ……ああ……」

刹那そうな声を漏らす母様。そんなのを無視してジツとしていると、堪らなくなつた母様が俺の胸を揉みしだきつつ首元に顔を押し付けて傍から見てもバレバレな程に腰



を振り出した。

「フーツ♡フーツ♡」

「ひやう！か、母様！首、くすく擽くすくつたいよ！」

「あ・・・いや、すまない。何でもない」

あ、危ない危ない。今、少しイツちやつた。

「そう?・・・母様、顔が赤いし息も荒いけど大丈夫?」

「ああ・・・大、丈夫・・・だ」

うーむ、これは大丈夫ではありませんね。目の奥にハートが浮かんで見えるし、加えて獣のような目付き。背中に伝わるおちんぼもビクビク震えつばなし。一旦落ち着かせないとマジで射精するぞ、このちんぼ。

その不安は車内で流れる放送で払拭された。どうやら次の駅に着くらしい。確か、乗り換えは大体三回くらいだった筈。なら、ここで乗り換えてもおかしくはない。

「ん?・・・冬萌、次の駅で降りるぞ」

「そこから乗り換えるの?」

「ああ、十分くらい待つがな」

十分・・・イケるか?一、二回が最低、最高で四・・・いや、五回くらい、シゴいただけでイケたら重畳。普通ならかなり難しいが、母様ならイケそうな気がしてならない、安定の信頼感。

即席の計画を立てていると次の駅に着いた。ここも無人駅で線路が二つしかない簡素なもの。降りると同時に扉が閉まり、電車が進行方向へと走っていった。その向きならそのまま乗つてもよくない?と最初は思ったが、次に乗るのは向かいのホーム。途中で行き先が別れてるのだろう。

「母様!早く早く!」

「お、おい、何をそんなに急いでるんだ?」

母様の手を引き、階段を駆け上がる。俺が何故、こんなにも急いでるのかよく分かってない母様は困惑したように俺に引つ張られて着いて来る。改札側のホームに着いたので母様の方を向いて、母様のお股辺りをゴソゴソとして、思った通りの我慢汁だらだらで雄臭い蒸れ蒸れのおちんぼを取り出す。

実は母様の巫女服は着衣のまま、大した手間を取らずにおちんぼを取り出せるようになってる。前回のようには手を使わずに無理矢理やろうとすると服が破けるが、きちんと手を使えば、簡単に取り出せる。

「お、おい！何をツ・・・ひう♡」

「節操無しの蒸れ蒸れエロチンポは黙ってて・・・はむ・・・ング♡んツ♡んツ♡んツ♡」

母様の声を見殺しにすかさず、イラマチオ&両手コキ。先程、寸止めされたからか、一発目は数秒と経たずに尿道から胃の中へと遠慮無しに吐き出される。

「い、イグウウ♡♡ああ♡あ♡」

「んツ！ツ~~~~♡♡ぷはあツ♡・・・はあ♡はあ♡」

連続してイラマチオで抜こうと思っただけと予定変更。思った以上に量が多くて、もうお腹がタプタプ。後、おまんこが物欲しくて仕方無い。でもここで挿入したら確実に時間間に合わないから、巫女服の裏側や袖の中に常備さるているコンドームを取り出し、入れる面を外にして口に咥くわえて母様のおちんぽに装着してあげる。

再びイラマチオする程に喉の奥まで入ったが、ずりゆうつと喉から出す。口の中で止めてフェラチオと片手手コキシながら、エロ躊躇になつて残った片手でジユポジユポおまんこを弄る。

俺が着ている巫女服にも、ふたなりちんぽを取り出す為では無いがふたなりちんぽを挿入する為の穴が袴の折り目に紛れてある。そこから指を入れ、スパッツ越しではあるものの、ジユポジユポと指を入れてオナニーする。このスパッツはその伸縮がよく、かなりピツタリと手に張り付くのに抵抗が無い優れ物。寧ろ、少しザラつくから、いつもよりちよつとだけ気持ちいい♡

「?・・・と、冬萌・・・何を?♡」

母様、口ではそう言っているけど、自身のバキバキのおちんぽを実の娘がオナニーしながら手コキフェラをしているという光景をきちんと認識しているとその目が語って

るよ？それに期待してすぐにバキバキのピンピンにして・・・本当、仕方無いおちんぼ  
 なんだから♡

「は何っにつへ、か母あは娘あまののおおちんぼひんほひシコシコひしてひるふの。ひ時間はん無はいいはから  
大人しくシゴかれておほなひふひはれへへ・・・ん♡んツ♡んツ♡んツ♡」  
 「あぐう♡うう♡♡♡」

コンドームを生ちんぽに装着してシゴいたのは初めてだが、このコンドーム本当に凄  
 いな。ゴムの臭いが僅かにするが気になる程ではない。手でシゴいた感じ、ほぼ生のま  
 まと同じだし、舐めてもあんまり違和感が無い。見た目は薄過ぎて着けてないように見  
 えるのに、中々破れない。この世界の日本はとことん変態技術を極めてんなー。

「出るう♡♡♡♡♡」

「ん？・・・ふはあ・・・わあ、凄いでてる・・・♡」

コンドームに関心していると、あっさりと母様が射精した。昔、母様が一人でオナつ  
 てる時に遅漏っぽかったけど、そんな事ないのか？早漏もビックリの早さと量なだけ

ど。

それはそうと、コンドームに容赦無くビュルビュルと吐き出される大量の無駄打ちされた子種達。さつき出したばかりなのに勢いは劣る事無く、結局射精が収まったのはコンドームが大量の子種達で林檎三つ分くらいの大きさになった頃。

こうして見ると、よくもまあ何発も俺の中に出せたよなって思ってしまう。その時のイキ過ぎて臆気な記憶を思い出しただけで、子宮がキyunキyun疼いてしまうのはおちんぼに堕ちてしまった雌さがの性だろうか。

おまんこに一杯ドクドク注いで欲しいなあ、と思いつつ少しヘニヤツたおちんぼからコンドームを素早く外して口を結ぶ。

プルプルの白濁のスライムみたいになったコンドームを地面に置くとトプンツと震えて風が当たっただけでたゆんたゆんしている。目の前に反り勃ったおちんぼが無ければ、目が離せなくなりそうな程に魅力的に見えて仕方が無いのは、きつと秘薬の所為に違いない。

「はあ．．．．．はあ．．．．．♡♡♡♡♡」

「はむ♡．．．．．れろお♡．．．．．ペロペロ♡．．．．．ぢゅりゅりゅりゅりゅ♡♡♡」

「おひいいい♡♡搾り取られりゅう♡♡♡」

余韻に浸っていた母様のおちんぼを咥え、亀頭やカリを舐め舐めしながら裏筋を手でシコシコ刺激してするとすぐにピンツとおちんぼがフル勃起する。そうなつてから、残り少ない辛子や山葵を絞り出すように根元から亀頭へと尿道に残ったイキ遅れの子種達を手でギュツと握って搾り出しつつ、バキュームフェラで吸い取る。

カリ首辺りまで手で絞った所であつたドロドロに濃い子種の塊が一気に口の中に飛び出てきた。臭いが一段と酷く、ネバネバしていつまでも口や喉に留まり続けるそれらに強烈な性臭が鼻腔から脳まで至り、脳がドロドロに溶かされていくような錯覚さえしてしまう。

「んっ♡んん♡…ゴクツ♡…ぷはあ♡…はあ♡はあ♡…ああ♡」

や、ヤバイよお♡

時間無いのに乳首もクリちゃんもピンピンに勃起して、擦れるだけでイツちやうよお

♡♡

おちんぼお♡おちんぼ欲しいのお♡

漸く飲み込めた頃には自分でも分かる程に顔がアへって、乳首もクリちゃんも痛い程にピンピンに勃起してしまっていた。おまんこなんてトロトロに蕩け切って、ダラダラと垂れ流す愛液でスパッツがグシヨグシヨになっちゃってしまっている。

時間が無い、と自身を何度も鼓舞して、なんとか性欲を我慢して気合いで再びコンドームを亀頭に着けてそこから根元まで下ろそうとする。

そんな時だ。アレが来たのは。

「ツツ?! ひぎゆううう、ううう、うう、うう、ああッ♡♡おおに腹やかあ♡♡こ子だ種にえ♡♡こ子だ種にえ  
が♡♡♡」

しまったアア!!

霊力吸収の存在忘れてたアア!!

これじゃあ計画がツ・・・またイグウウ♡♡

ああッ♡♡イグによしまんにやいによおお♡♡

絶頂による身体の筋肉の弛緩。ここで崩れ落ちたら母様に犯される気がしてならな



いので、母様の方に倒れそうになる身体を支えるように手にあらん限りの力を入れて耐える。母様の腰に顔が着いて漸く身体を支えれたと思えば、顔の真横には先程勃たせて於いていき遅れ精子を吸い取っただけの絶頂間近我慢汁ダクダクおちんぼ。

しかも、両手はその先端をギュツと握っており、倒れると同時に我慢汁が潤滑油となつて根元まで一気に擦り上げた。結果、何度もイッた後の母様の敏感雑魚ちんぼがあつさり俺の顔の真横で盛大にイッた。

「お、ひい、いいいいい♡♡イギユウウウウ♡♡」

下品で脳に響くような嬌声を上げながら、無様にイキまくる母様。再び、運良く完全装着出来たコンドームにドロツドロの熱々ザーメンを吐き出し終わると、流星に短時間での連続射精は堪えたのか、その場に崩れ落ちた。

そうなる、母様に身体を預けていた俺も一緒に崩れ落ちて、向かいに座るように互いにペタンつとその場に座り込んだ。

「はあ．．．はあ．．．♡」

母様が顔を紅潮してポーツと斜め下を見ている。別に見ようとして見た訳ではないのだろうが、目線の先には子種でタプンタプンのコンドームを装着したままのへにやりとしたグツタリちんぽが広がった袴の上でビクビクしている。

未だに出切つてなかつたのか、時折母様が目を瞑つて快樂に耐えるように顔を強ばらせ身体を硬直させると、ちんぽが一際ビクンツと跳ねて尿道に残つた分も残らず出て来た。

「・・・・・・・・・・」

それで収まるかと思えば、そんな事は無い。ゆっくりとちんぽがその硬さを取り戻しつつ起き上がっていく。しかし、重くなつたコンドームを今のちんぽでは持ち上げられないのか、途中で留まり上下に跳ねるように動くだけ。

手で取る気力も無いのか、変わらずポーツとした表情でその有り様を見詰める母様。何度もビクンビクンと跳ねるちんぽ（正確には龟头部分のこんどーむの口）を先に回復した俺が手を伸ばす。

「あう♡・・・・・・・・ひゃんツ♡」

コンドーム越しに優しくソフトタッチしただけだというのに分かり易く喘ぐ母様。試しに撫で撫でしてみると、面白い程に反応してくれから、ついそのまま撫で撫でしてみたり、亀頭の裏部分を犬を可愛がるみたいにコシヨコシヨしてみたり、両手で優しく包んでサスサスと交互に擦ったりした。

「と、冬萌ツ♡・・・またツ♡・・・うツ♡♡うう・・・ッ♡」  
「へ？」

すると、まさかの三発目。別に又こうとしての行為では無かった（又ける筈が無いと思っていた）ので、ドピュドピュ出てくる子種に目を点にしてしまう。母様を見てみれば、気持ち良さそうに背を反らせてビクンビクンツと身体を震わせながら絶頂の余韻に浸っている。

流石に量は少なかったが、それは母様基準での話。そこらの男共よりは数倍多い量。既にパンパンのコンドームにはかなり危険な量だったが、なんとか破れずに済んだ。

完全にへにやったおちんぼから、ズリユツとコンドームを引き抜いて、溢れ出る前に素早くそして破れないように慎重にコンドームの口を閉じて、先に置いていた白濁スラ

イムの横に置きに行く。持った感触が凄く、ギチギチになつていたのでほぼ子種の塊を直に触れているようだ。でも、熱々でドロドロつとしてるけど、ベタつかないし、臭いもしないからなんか不思議な感じ。

そう言えば、さつき崩れ落ちた時によく破れなかつたな、と思い出しつつソツと置く。白濁スライム二体目の完成。間隔ゼロで置いた為に互いに触れ合っている白濁スライム達は、片方が揺れるとそれに連動してもう片方もぽよよんツとなる。正直、見て少し楽しい。

「冬萌・・・♡」

背後から声が聞こえたと同時に背中に軽い衝撃が襲う。背中越しでも分かり易く感じられるお胸様から、どうやら母様が後ろから覆い被さるように抱き着いてきたようだった。

どうしたのか、と様子を伺っているとスリスリとほっぺに頭を猫のように擦り付けて来た。「スーッ、ハーッ」って荒い息遣いが聞こえるから、恐らく匂いも堪能されてる。いや、別にいいんだけど、少々息が首筋に当たるから擦りたいだね。

「母様、これスライムみたいじゃない？」

「……ぷふッ」

わお……母様が吹き出すなんて珍しい。

「どうかしたの？」

「んん、何でもない」

目だけ向けて、文字通り目と鼻の先にある母様の顔に内心ドキドキしつつ様子を尋ねるが、母様は幸せそうに微笑むだけ。何でもないならそんな顔はしないで欲しい。眼福ではあるが、理由も分からず至近距離でそんな顔をされるとかなり心臓に悪い。

訳も分からず、スリスリと身体を擦り付けて匂いを俺に浸透させるような動きをする母様に悶々としつつ、ある事を思い出した。

「あ……母様、電車」

「……そう言えば、もうそろそろだな」

ホームにある時計を見てそう言う母様。結局、出せたのは三回か。まあ、どうやら収まったようだし、よしとするか。

安堵する俺を他所に流石にその辺の理性は残っていたらしく、デレッデレからキリツとした表情へと瞬時に変えて身体を離してくれた。因みにふにやチンは既に仕舞ってある。

「早くコレを片付けないとな」  
白濁スライム

「確か、トイレにそのまま流せば良かったんだっけ？」

「ああ、そうだ。急ぐか」

母様が大きい方を俺が小さい方を抱えてホームの女子トイレへと向かう。中は……まあ、無人駅らしくボロいトイレだったけど、ある程度の清潔さは保たれていた和式のトイレだった。

「……このまま流せるの？」

「無論だ。見ておけ」

知識としては知っているが、やはり不安だ。この世界のトイレもコンドームもかなり進んでいるらしく、このままコンドームに子種を入れた状態で流しても問題は無いそう。詰まる事も無いし、コンドーム自体がトイレに流れても問題無いように設計されている。（途中で溶けるらしい）

しかし、それは飽く迄も知識であり、このくらいの大きさの物を一気に流そうとする  
と前世に体験したトイレが詰まる事態となる。

慣れた手付きでトイレの穴の中に母様に置かれた白濁スライム。ギチギチに詰まってどう見ても流れる気配がしないソレを不安の眼差しで見ていると、母様が蛇口を捻ったと思った次の瞬間には水と同時ににゆるんつと流れて行った。

「どうだ？問題無かろう？」

「・・・うん、問題無い・・・っていうか、凄い滑らかに流れていった」

「さあ、それも流そう。今度は冬萌がやっつてご覧」

「ん、分かった」

同じように置いて蛇口に手を掛ける。しかし、ふと思ひ留まってトイレの中に置いた

コンドームを見遣る。

「・・・どうかしたか？」

「この子<sup>種</sup>達は本来なら冬萌に母様の遺伝子を残そうと種付けしようとした存在。でも、その役目を果たすどころか、母様の無駄打ちオナニーで膣内にも入れてやれずにトイレの中にゴ―って思うと、なんだか申し訳無く・・・」

「早く流せッ」

「いてッ・・・」

真つ赤な顔をした母様に頭を叩<sup>はた</sup>かれた。俺も九割程は冗談だったのでさっさと水を流してにゆるんつと流れて行つたのを見届けるとホームに戻って、電車が到着するのを母様の上に座って待った。流石に今は勃たせていなかった。

「・・・ねえ、母様」

「なんだ？」

「今日、随分と早漏だったけど、どうかしたの？」

「・・・んん？」



俺の疑問に鈍い反応を見せる母様。今一、質問の意味を分かっているようだった。

「なんか今日はあつきりと出たなあ、って思ってた。ほら、いつもはもつと．．．もつと．．．あれ？いつもこんな感じ？」

「おい待て。いつもじゃない。今回はきちん理由があるんだ」

「電車の中で娘を使つてオナニーしてたから？」

「なツ!?何故それをツ．．．!」

「ええ．．．気付かれてないとまだ思ってたの？あーんなビンビンになったのを押し付けられたら、冬萌じゃなくなつて気付くよ」

「あう．．．」

可愛らしい悲鳴を上げながら、俺の頭に顔を埋める母様。多分、耳まで真っ赤になつてゐるんだろうなあ、と思いつつ母様が立ち直るまで待つてゐると、唐突に顔を上げて弁解しだした。

「いや、確かにそれもそうなんだが、いつもより敏感なのはもつと別の理由があつてだ

な……」

「じゃ、それは何？」

「えっ……そ、それは……」

「それは？」

「その……えっと……だな……」

母様にしては珍しく、随分と歯切れが悪い。言い難そうな、何かを隠してるような……ん？隠してる？

……へえ、隠し事ねえ。ふーん。

「と、冬萌？どうしたんだ？急に不機嫌そうな顔をして……」

「べっつにー。不機嫌なんかじゃありません」

「そ、そうなのか？でも……」

「違いますー。母様の気の所為ですー。冬萌には無理矢理聞き出して置いて自分は隠し事してる母様なんか、一生無駄打ちしまくってシコシコしてればいいと思ってるだけですー」

「い、いや、でもこれは……その、どうしても言えないと言うか、言いたくないという

か・・・」

母様のそんな言い訳は駅内放送により遮られた。あからさまにホツとする母様。何をそんなに言いたくないのかは分からないが・・・まあ、別にもういいか。

「ほ、ほら冬萌。もう電車が来るから降りてくれ」

「はい・・・母様、もう電車の中では発情しないでね？」

「ツ！・・・あ、ああ、もうしない・・・と思う」

あ、全然反省してないな。ま、俺も楽しめたし、今日はいつか。

第7話・おちんぽケース冬萌ちゃん♡（そんな生意気なメスガキはトイレに連れ込まれちゃうよ）

『次は〜幻想学園前〜幻想学園前〜』

車内アナウンスが流れる。電車内の人達も増えており、満員程では無いがそれなりに立っている人が居る程だ。俺と言えば、他の乗客の邪魔にならないように母様の上に乘って抱き着いている。

恐らく、他の人から見たら幼子が眠って母親に抱き着いている、そんな微笑ましい光景に映るのだろう。だが実際は違う。

「冬萌、到着したぞ」

「ツ♡ツツ♡♡♡」

「はあ、寝ているのか。仕方無い、このままおぶって行くか」

現在、母様のぶつといおちんぽをおまんこ一杯に挿入されてます♡♡



何があつたかと言うと、母様、あれだけ抜いたにも関わらず、すぐに回復して次の駅で膝の上に乗せられたかと思つたら、乗客が乗つて来ているのに服の隙間から半勃起したおちんぼを取り出した。

慌てて抱き着いて隠そうとしたんだけど、その時に母様が俺の耳に口を近付けてこう言つたんだ。

「このままだと大きくなつて、下手をすればお前の身体からはみ出してしまひそうだし、そうなれば私の痴態が他の者に見られてしまう。どうすればいいか、ゆるゆるおまんこの優しい冬萌なら分かるだろう？」

そんな事を言われたら否が応でも身体が勝手に動いてしまふ。しかし、座席の上で立ち上がり、亀頭をおまんこにあてがう所までは良かったがどうしてもその先の決心が付かなかつた。

前の駅であれだけ急いで無駄打ちさせたのも、まだ不安の方が勝っている野外エッチ

をしない為だ。だがそうやって迷っている間も乗客は入って来る。幸い、人数も少ないスマホに夢中で気付かれていないが、それも時間の問題。

そんな時、母様が俺の腰を持って容赦無く落としてくれやがった。

「お、お、ツ~~~~♡♡ツ、ツツツ♡♡」

当然、母様の凶悪おちんぽに完墮ちしている俺のロリマンコが絶頂しない筈もなく、公衆の面前で無様にイキまくった。

幸い、喘ぎ声は母様のお胸様に顔を埋めていたので殆ど漏れていなかったが、物音が聞こえたのか乗客のほぼ全員がこちらの存在に気が付いた。

所々から聞こえてくる「うわつ、凄い美人」「なんで巫女服？」などの会話や独り言のような声。恐らく、写メとか撮られていてもおかしくない。

そう思うとイってる最中だと言うのに、余計におまんこがおちんぽをキュウキュウと締め付け、呼応するように半勃ちだったおちんぽがムクムクと大きくなっていた。

「か、かあ<sup>母</sup>ひやみやあ<sup>様</sup>あ．．．大きくし<sup>し</sup>にや<sup>な</sup>いれ<sup>い</sup>え．．．♡あッ♡」

お胸様の谷間から顔半分だけ出して懇願してみるが、何とか見えた母様の顔はその瞳を情欲に染め、嗜虐的な笑みを薄らと浮かべていた。

それを見た瞬間、絶対に虐め抜かれると理解し期待してしまった。そして動き出す電車。

母様は全く動く気配が無い。擦れてイカないように抱き着いて身体を固定しても、電車が少し揺れるだけで節操無くイキ果ててしまう。

この世界の技術は進んでいるのか、新幹線並みに振動が少なかった。故にあまり激しくイカなかったのだが、それが逆に良くなかった。

途中、何駅も停車して合計数十分の間、ずっと生殺しのようにバキバキで熱々のおちんぼをおまんこに挿入れられたまま。秘薬の効果でおちんぼを挿入している限り、おまんこが幾らイツても発情が収まらない。

冷静な判断が出来なくなってしまう俺は自ら腰を振り始めた。

「どうした？そんなに必死に動かして。皆が注目してるのに興奮しているのか？・・・お

「うっ♡締め付けが強くなった♡」  
 「う、うるひゃい♡かあひゃみやあ母によわかあ馬鹿．．．♡♡」

まるで呂律が回らないが、何一つとして否定出来ないのが悔しくて、それが堪らなく興奮してしまう。幸いだったのは数ミリしか動かしでなく、着ている服がかなり余裕のある物なので周りにバレていない事。

しかし、その数ミリしか動いていなのに襲ってくる快樂は凄まじい。ほんのちよつとの落差で腰を落とせば、子宮口が亀頭に押し潰され、ポルチオをキメられる。

突然過ぎて子宮口が開き切っていないから子宮の中に侵入されなかったが、これはこれでヤバイ。子宮口を押し潰されただけで、ぐにゆうと子宮全体が形を変えて子宮口と亀頭は熱いディーブキス。

母様はそんな俺のイキ様を楽しそうに眺めているだけ。それが堪らなく惨めでより絶頂を促した。



と、まあそんなこんなで今に至る訳だが、到着しても反応を示せなかったのは単に腰



砕けになってしまったからだ。母様がイク事は無かったけど、今にも発射してしまうんじゃないかってくらい膣内でビクンビクンと脈を打っている。

そんな俺に挿入したまま抱っこして電車を降りる母様。所々にある段差や歩く振動でイッてしまうが、それだけでは終わらない。他に人が居る気配はするのだが、ぶつかる様子が無い事に不思議に思いながらも改札に着いた。

すると何を思ったのか、おしりを持って揉み揉みしながらも俺の身体を支えてくれたいた両手を離し、落ちないように片手で背中を持った。

「ひぎ<sup>イ</sup>ゆう<sup>ク</sup>ううう♡♡かあ<sup>母</sup>ひやみ<sup>様</sup>やあ♡手ツ♡離しちヤツツ♡♡らめ<sup>だ</sup>ええ<sup>め</sup>え♡♡♡」

重力に従って落ちる身体。それを支えるのは一本のお腹に突き刺さった剛直おちんぼ。完全に潰された子宮がまるで亀頭のような輪郭に変えられ、継続的に暴力的な快樂が襲って来る。

それに加えて母様が歩く振動も直に伝わり、一步步く度に目がチカチカする程の絶頂を繰り返した。

「神薙様、お待ちしておりました」

「ああ、藍か。ご苦労だな」

「いえ、それではこちらに。紫様がお待ちです」

凜として厳格そうなイメージ、簡単に言つてしまえば秘書風の女性の声でした。何やら母様の知り合いらしいが、それを確認する余裕が今の俺には無い。

母様の知り合いらしい人の前でも無様にイキまくっている車の中のドアが開く音がしたかと思えば、母様がそれに乗り込んで反発性に富んだソファのような座席に座った。

車が出発し、電車よりも振動が少ないんじゃないかと思ってくらい静かに走り出す。これで漸くおちんぼを抜かれると思った俺は子鹿のように震える手を母様の肩に掛け、足になんとか力を込めて立ち上がるうとした瞬間、再び母様に腰を持つて奥深くまで落とされた。

「ほい、よお、おお、おおッ♡♡♡♡」

あ、終わったあ♡♡

バレた♡完全にバレちゃったよ♡♡

冬萌が実の母親の極太ちんぼで感じちやつてる変態さんだつて知られちゃったあ♡

♡

M字開脚で背中を仰げ反つて思いつ切りイキ果ててしまった。顔なんてアへ顔もいい所。天井を向いて舌を限界まで突き出して、目も上を向いて殆ど白目。顔をお胸様に埋めようが無かつたから、声は恐らく丸聞こえだろう。

「あ♡あツ♡ああ♡」

「藍、紫は元気にしているか？」

「ええまあ。元気過ぎて困ってるくらいです。居眠りが無くなったのは嬉しい事なんですけどね」

「それは冬萌も大変そうだな」

「冬萌・・・その可愛らしいお子さんのお名前ですか？」

「ああ、『神羅冬萌』私の自慢の娘だ。ほら、挨拶しないさい」

「ほお♡♡や、や、め♡ツ♡か、あひやみ♡♡やあツ♡♡イグツ♡ま、た、ツ♡♡お、お♡」

「・・・すまない。朝が早かったんでな」

「いえいえ、構いませんよ」

にやんれえ♡♡気にしにやいによ♡♡今、母様にジツポジツポしやれてイキまくつてるによ♡いに♡いいい♡♡♡

腰を持ったまま、まるで俺をオナホのように好き勝手に上下に動かし始める母様。幾ら後部座席と言えども、こんなにおちんぼとおまんこから卑猥な音が出て、俺の口からも下品な喘ぎ声が出てるのに聞こえていない筈が無い。

しかし、母様と藍と言う人はまるで俺が居ないかのように話し出す。その様子は宛ら道具のようであり、俺の中に遺伝子レベルで存在する肉便器根性が歓喜の声を上げている。

「そう言えば最近、紫様の姪っ子が産まれたんですよ。将来、この学園に通う予定なのでその時はよろしくお願いします」

「お♡♡お♡♡イグ♡♡またイグ♡♡イグの止まんにやいによ♡♡お♡♡♡♡♡

♡」

「そうか、友人が出来るか少し心配だったが、杞憂に終わりそうだな」

尚も普通に話し続ける二人にこちらも吹っ切れて我慢せずに嬌声を上げまくる。するとまたムクムクとおちんぼが大きくなって我慢出来なくなつたのか、母様が舌を突き出している俺の舌にねつとりと絡めて来て、そのまま口の中へと侵入して来た。

俺はそれが無性に嬉しくなり、母様の後頭部に抱き着くように両手を回して一切の抵抗をせずに喜んで口内を蹂躪させる。

下のお口だけでなく上のお口でもイカされ始め、快樂と酸欠で意識が殆ど保てなくなつた頃、トドメとばかりにおちんぼを突き上げられて母様と一緒に果てた。

「ングッ♡ ほん♡ん♡ん♡ん♡ ツ♡♡♡ ツ♡♡♡ ツ♡♡♡ ツ♡♡♡」

「ん♡ん♡...♡ふはあ♡」

口を離され、母様のお胸様に自然と身体が倒れて行く。ポヨンと反発してそのまま埋まると最高の枕に身体を預け、睡魔が襲つて来る。

慈しむように頭を撫でられ、それに抗う術を俺は持っていなかった。



「んッ♡・・・んほお、おおッ♡♡」

「冬萌、着いたぞ」

おまんこがいきなり何度も絶頂して目が覚めた。事態を把握しようと頭を回し、取り敢えず目的地に着いたのとおちんぼを引き抜かれて目が覚めた事は理解した。

未だに動けそうにないと判断したのか、抱っこしたまま外に出され、そのまま目の前にある大きな建物に入って行った。

入った瞬間、冷房が効いているのか快適な冷気が全身を包み、心地良い気分になる。外と同様、お屋敷みたいな作りをしている中を金髪ショート釣目美人な藍さんが案内し、辿り着いたのはとある扉の前。

藍さんがノックすると中から声がし、許可が降りたのか扉を開けた。中は校長室を豪華にしたような作りで左右に本棚や高そうな品々が置かれており、持ち主がどれだけ金持ちかを嫌でも分らされる光景だった。

「あら、いらつしやい」

一声聞かされただけでその者が美女であるとイメージする程に綺麗で魅惑的な声。目を向けると正面の執務机の社長椅子に藍さんと同じ色の長髪で母様と負けず劣らずの美女が万年筆を持って座っていた。よく見れば机の傍らに真つ黒な猫が昼寝をしている。

知的でクールな美女かと思ったんだが、眼鏡を外して筆を置くと待ち侘びたとばかりに子供みたいに楽しそうに笑っていそいそと立ち上がって近付いて来た。

服装が中華風の前掛けとドレスを組み合わせた導師服の様な物であり、コスプレみたえという点から先日の束を思い出す。

あ、因みに藍さんはビシツとスーツを着こなしている。着痩せしているように見えるが、こちらの中々のお胸様をお持ちのようだ。

「久しぶりだな、紫」

「ええホント。五年以上も会って無かったわね。子育てで忙しいのは分かるけど、一度くらいは会いに来てくれないんじゃない？」

「だから、こうして初めに会いに来ただろう」

「あら、それはありがとう♪なら不知火の所にもまだなのね。これから行くの?」  
「今日は行かんさ。また日を改めて行く事にするよ」

話を聞く限り随分と親しそうだ。恐らく、この人が紫つて人で学園の理事長を務めている人だろう。てつきり、オールバックのダンディなおじ様をイメージしてたから、俺の中の戸惑いが凄い。未だにドッキリか何かと疑っているくらいだ。

「初めまして。八雲紫よ、貴女のお名前を教えて貰える?」

流石は一教育機関のトップとでも言うべきか、母様との話が一段落すると抱っこされてる俺に優しく話し掛けて来た。

一瞬、五歳児らしくするか?と思つたが、なんか無駄な気がしたのでやめとく。

「神薙・・・冬萌です・・・」

「・・・あらあら、可愛いわねえ」



名前を言つて恥ずかしそうに母様のお胸様に顔をギュツと埋める俺に紫さんが微笑  
ましそうに笑う。

ちやうねん。

母様以外にこんな美人と近くで話すなんて初めてだから緊張しちやつて、何を話せば  
いいかよく分からないんだつてば。．．いや、うん。実は別の理由があるんだが．．  
それは後で話そう。

「と、所で．．今日は．．その、いいかしら？いいわよね？」

「ダメだ、また今度な。今日は今後の事で話があつて来たんだから」

何の話かはよく分からんが、急に余所余所しいと言うか恥ずかしそうと言うか、ソワ  
ソワした感じで俺をチラチラと見ながら紫さんが母様に何かを聞いていた。それを  
バツサリ切り捨てるとあからさまに落ち込んでいるような気配がする。

どうしたのかと見てみたいが、今はそれどころでは無いのでギュツと母様のお胸様に  
顔を埋め続けていると、急に母様が俺を下ろした。

「冬萌、お前は藍に校内の案内でもしてもらって来い」  
「?・・・分かった」

頭を一撫ですると、横からしやがんでいる藍さんが手を差し出して来たので素直に握ると嬉しそうに微笑んで一緒に理事長室を出て行った。

なんか出る時に「待って、えええ、ええ」って紫さんの泣き声が聞こえて来たが大丈夫だろうか？



部屋を出て少し歩いてすぐの事。藍さんが俺の異変に気が付いた。

「んツ♡・・・あツ♡」

「?・・・どうかしたか?」

歩き難そうにして、一歩踏み出す度に痙攣してたら、そりゃ誰だっておかしいと思う。どうしたのか、と言えば現在進行形で袴の下は子宮が飛び出ているのだ。

一歩歩く事に足や袴に擦れて襲つて来る快樂と共に軽くではあるがイッてしまう。先程、紫さんと会話した時だつて、それに気が付いた母様に飛び出た子宮の裏スジをコシヨコシヨされていたのだ。

声を抑えるのに必死だつた。

とは言つてもそんな事を初対面の藍さんに馬鹿正直に言える筈も無く、何とか誤魔化そうとしたが藍さんが何かを考え込むと抱っこされた。

「ほえ？何を・・・」

「何、大人しく抱かれてろ」

そう言つて、母様と同じように片腕に乗せられる形で抱っこされた。されたのはいいのだが、ここで新たな問題が発生した。

「ほによッ?!♡♡」

「どうした？何処か痛むのか？」

「ひ、ひいやあ、なん何れもないないれす♡」

し、子宮が♡潰されてツ・・・♡

俺の身体と藍さんの腕に飛び出た子宮が挟まってしまった。歩く度にグニグニと握ねくり回され、頭の中がグチャグチャに掻き回されるような錯覚を起こしてしまう。

一応、藍さんの首元に顔を埋めて声押し殺してはいるが、耳が近いから多分バレバレなんじゃないかな。それよりも子宮内の母様の子種が飛び出ないかの方が心配だ。

霊力を吸収して量が減ったとは言え、まだお腹の中でタプタプしている。一度出すと射精みたいにならぬ全部出し切るから、それだと粗相をしたのと変わらない光景になってしまう。

「・・・ふっ♡・・・んっ♡」

喘ぎ声とおまんこから出そうになる子種を男の頃のように我慢していると、とある部屋に入った。チラリと横目で見てここが何処なのかすぐ分かる程に特徴的な作りの部屋割り。

大体、四畳程の大きさに基本的に真っ白な部屋であり、中央付近には洋式の便器。連

れて来られたのは多目的トイレだった。

恐らく、尿意を我慢しているとしても思われたのだろう。しかし、どちらにしても都合がいい。ここで子宮をシゴいて中の子種を出せば、取り敢えずこの飛び出た子宮は収まる。その間に俺がイキまくるといふ弊害はあるが、そこは目を瞑ろう。

早速、藍さんにもう大丈夫と声を掛けて外に出てもらおうとした時、ガチャリという鍵を閉める音がしてそれを理解する前に両手で抱え直されて便座の縁に座らされた。M字開脚で。

「・・・？」

なーんか嫌な予感がする。

真下に向いたままギンギンに硬くなった子宮を袴の下でプランプランさせつつ、冷や汗を流す。真意を聞こうと顔を上げると何かが覆い被さり、俺が混乱している隙に侵入して来た舌に口内を好き勝手に貪られた。

「んぐうツ♡んツんー！♡ツッ、くく♡♡」

母様の方が個人的に好きだが、俺がイクには充分過ぎる程に気持ちいい舌攻めに何度もイってしまった。すると少量ではあるが、子宮内の子種をピュッピュッと出て行く。

攻められると一切の抵抗が出来ない性質なのか、はたまた単純に快樂で動けないのか。恐らく、個人的に本能の部分が喜んでる気がするので前者ではあろう。

別に拘束されている訳でも無く、強いて言えば頭をガツシリと掴まれているのだがそれでも身体は全く動かず、時折ビクンビクンと痙攣しながら唯々蹂躪され尽くした。

「ふはあ♡・・・あ♡にや・・・にや何をを♡」

「ふふっ♡何を惚けている？これがお前の仕事じゃないか♡こんなに顔をふにやけさせて・・・全く、流石は神雑家の人間とでも言えればいいのか。未恐ろしいな」

漸く解放され、苦し紛れに放った疑問も煙に巻かれた。俺を襲ったのは藍さんであり、見えた顔は相も変わらずな美しさを放っていた。しかし、微笑ましそうに俺達親子を見ていた筈のよく見れば狐のような黄金の瞳は車で見た母様と同じように情欲に染め、嗜虐的な笑みを浮かべていた。

違うとすれば、藍さんは何処か余裕が無さそうだった。

だが、そんな事は今はどうでもいい。俺の心は恐怖はあるもののそれを簡単に塗り潰してしまう程の歓喜に包まれていた。まあ、だからと言って現在混乱中の俺がその事に気付いた所で更に混乱するだけだ。この時、肉便器根性がハッスルしていたなんて、まだ肉便器歴が浅い俺には分からなかった。

そんな俺を置いて事態は進行していく。M字開脚中ではあるものの裾の長い袴だと正面から見ても普通にお股どころか足全体が隠れて見えない。勿論、俺からも藍さんからも中の状況を正確には知る事が出来ないが、当事者である俺は中の痴態をある程度把握している。

なのでスカート捲りのように覗くようにして、しゃがんで中を覗く藍さんに気が付いた時、見られたただけでおまんこから全身に電流のような快感が走っても仕方の無い事だ。

「・・・成る程な」

中を粗方確認した藍さんはスカートを下げると両腕だけをスカートの中に潜り込ま

せ、ソレを掴んだ。

「んひよッ?!♡♡」

掴まれたのは飛び出た子宮。そこを掴まれた俺は値踏みするようにクニクニする厭らしい手付きを跳ね除けようと抵抗する事もガクガクと腰を激しく痙攣させる事も出ずに、唯首を摘まれた猫のように大人しくなった。

女性として雌として大事な箇所をガツシリと掴まれたのだ。心臓を掴まれたと同じように急所を掌握されれば大抵は動けなくなる、あの現象のようなものだ。

前世でロリっ子におちんちんを鷲掴みされた事がある。あの時もマジで全然動けなかった。

「これを見るのは久しぶりだな。やはり、神薙の女はいい♡♡それにしてもあの人も良興味をしている。おまんこの部分だけ破るとはな」

「へ?何を・・・ほお、ッ!♡♡」

ニヤリと口角を上げ、目を三日月のように歪ませる。すると値踏みしていた左手はヒ



ダヒダをゴシユゴシユと削る勢いでいきなり激しくシゴかれ、右手は二本程の指を子宮口から中へと侵入させてニユポニユポし始めた。

「ひぎゆうう、うう、う♡♡や、やめ、ツ♡♡ひに、やあああ、ああ♡♡お、おツ♡♡ほ、おお、おお、おお♡♡イギユウ、うう、ううう、う、ううう、ツ♡♡♡」

我慢からの連続絶頂で子宮の奥が急に熱くなり、中から勢い良く子種が噴射する。おしつこを激しく出した時と同じようにジヨボジヨボという音が聞こえ、その間は右手のニユポニユポは無くなったが左手で変わらずシゴかれ続けた。

俺はと言うと座ってるのが便座の上という事もあり、殆ど動けずに苦し紛れに背筋をピンツと伸ばし、顔を真上へと仰け反らせてアへっているだけだった。

漸く弾切れになり、おまんこから手を離されて身体が自由になった。かと言って、イキ過ぎて動けるような状態でも無いのでそのまま便器に座り込み、上がっていたカバーを背を預ける。

「流石だ♡よく調教されている♡♡もしかして私が外では一番槍か？それなら遠慮無く、足腰がガクガクになるまで犯し尽くして、たつぷりと躡てやるからな♡♡」

「い……いや……」

「安心しろ。何処の部屋も防音設備は軒並み揃っている。外に音が漏れる事は無い」

どれだけ抵抗しようとも、仮に万全の状態だろうとこの体格差では簡単に押さえ付けられて無理矢理犯されるだろう。それでも苦し紛れの抵抗を試みる。

女同士であれ、浮気に他ならない。幸い、子宮の中の子種が無くなったので興奮は治まっている。普通の男相手にすら興奮しない身体にされたのだ。相手が女なら取り敢えず俺が快楽に堕ちるなんて事は無いだろう。

唇を奪われた件に関しては、ファーストキスをとうの昔に母様へと捧げているので惜しくも何ともない。寧ろ、こんな美人に求められてちよつと嬉しかったりする。

身体が動かないのでトイレの上でこのように冷静に分析している俺に便器に跨るようにして近付き、股間を俺の目の前に持つて来てベルトをカチャカチャと外す藍さん。

まさか、こんなロリっ子にクンニさせるつもりか、それともおしっこ飲ませたり？と見た目に反して中々の性癖の持ち主だと呆れていると、そんな俺の余裕を吹き飛ばすモノがベルトの下から飛び出て来た。

「……ッ」

中からソレがボロンツと飛び出ると同時にムワツと立ち籠める噎せ返るよう女性とは思えない程のムレムレの雄臭い性臭。鼻腔から脳へと侵入し思考を犯す。目と鼻の先に反り勃つ見覚えのあるシルエット。それから目が離せない。

藍さんは凶悪極太ちんぼの持ち主のふたなりだった♡

「そんなに食い入るように見るな♡興奮してしまうだろ？それにさっきまでの威勢はどうしたんだ？必死に舌まで出して、まるでコレが喉から手が出る程に欲しいみたいだな

♡」  
「しょ……しょんなこひよ……」

無い、と言おうとして気が付いた。自身の言葉がやけに舌足らずな事に。何の事は無い。藍さんの言う通り、おちんぼが欲しくて堪らない身体が舌を突き出していたのだ。

慌てて舌を引っ込める。藍さんがソレを見てニヤニヤと楽しそうに顔を歪めていたのだが、俺にはそれに気付く余裕が無い。

それよりも身体を抑える方が大変だった。イキ疲れていなかったら、今頃目の前のおちんぼ様に飛び付いてしゃぶり付き、腰をへこへこと媚びるように振っていただろう。幾ら何でもまだ会って間も無い人にそんな醜態を見られて喜ぶような変態では無いつもりだ。……身体は否が応でも喜ぶと思うけど……いやでも、それは俺の意思じゃないからノーカンで。

「ひうッ!?!」

「ほらほら、遠慮なんてしないでいいんだぞ」

あ♡ダメだ……♡

おちんぼでそんなにぺちぺちされたら……されたら……♡

「あむッ♡……じゅるるるッ♡」

「ふおお♡おおお♡♡ら、らめえ♡それしゅいい♡♡」

我慢出来ずに母様よりは小さいが、俺の身体からしたら充分デカいおちんぼを啜えて吸い付く。チロチロと尿道を攻めたり、啜え切れない部分を容赦無くシゴキ倒す。

たったそれだけで、さつきまでの余裕は何処へやら。下品な嬌声を上げてガニ股で腰をガクガク痙攣させだし、喉の奥まで飲み込んでおちんぼを締め付けて上下にシコシコしてやると結構簡単に射精した。

「ほお、おお、おお♡♡この喉まんこ最高おお♡♡」

嬉しい事を言いながら絶頂の余韻に耽る藍さん。常人とは思えない量の濃い子種が胃へと流れていくのが分かる。止まつてにゆるりと喉から引き抜くとムワアと頭がクラクラするイカ臭い臭いが喉の奥からする。

こんな下品な臭いで誘惑され続けたら、もう我慢出来ない。腰が抜けたのか、便器の目の前で座り込んでいる藍さんにスカートを軽く持ち上げて声を掛ける。

「藍<sup>さん</sup>しゃん♡」

「?・・・な、なん・・・ッ!?!」

声を掛けられて少し息が荒いが、顔を上げる藍さん。しかし、真正面で止まり驚愕の表情へと変わった。序におちんぼもムクムクと大きくなつて来た。

きっと、今の藍さんの視界にはスカートの下から覗く、愛液でトロトロ口になった発情ロリマンコが見えているのだろう。目付きが明らかに変わったのが分かる。思い通りの反応が帰って来て、悪戯が成功したかのように嬉しい。

藍さんが我に返っていない内にトドメとばかりに最後の言葉を投げ掛ける。

「(褒美) 褒美……く……だ……し……や……い……♡」  
「ふ……ふ……ふ……い……い……だ……ら……う……♡」

襲って来る腹を空かせた狐に俺は大人しくその身を差し出した。

## 第8話・想い人との擬似イチャラブセックス（幼女にちんぽを添えて）

理事長室に黒髪の美女がソファに座り紅茶を飲んでいた。カップをソーサーに置き、一息吐くと膝の上に乗っている黒猫を撫でつつ目の前のソファに視線を送った。そこには同じレベルの金髪美女がソファの上で体育座りをして酷く落ち込んでいた。

「はあ・・・いつまでそうしているんだ」

黒髪の美女こと母様が呆れたように言葉を掛けると金髪の美女こと八雲紫が顔を上げるが私拗ねてます、と分かりやすく口を尖らせていた。

「・・・だって、出来ると思ったんだもん。こんなの生殺しよ。なんで藍の方が先なのよ」  
「仕方無いだろ。アイツが一番適任だと思ったからだ」

何の話をしているかと言えば、何故自身の娘の外での初めての相手を友人では無くそ

の従者にさせたのか、という紫の愚痴とも言えるような内容だった。

つい先程、部屋を出て行った藍と冬萌。藍と子供の頃からの付き合いである紫は勿論、母様だつて藍が冬萌に手を出す事は確信していた。なぜなら、そうなるように車で分かり易く冬萌を犯したのだから。

「将来的にアブノーマルな性癖を持つ者を相手にしなければならぬとは言つても、初めてくらいは優しくリードしてくれる経験豊富なアイツの方がいいだろう」

「そ、それなら私だつて」

「お前、ここ数年まともに抜いてないだろ？」

「うぐつ」

八雲紫。幼稚園から大学まで全てが揃い、教育機関の中でも類を見ない大きさの敷地を持ち、その中の頂点に立つ人物。何もかもを一人で管理している訳では無いが、それでも休日なんて年に一度取れればいい方だし、立場的に無闇矢鱈に誰かを連れ込むなんて出来ない。

それを知っている母様は更に言葉を重ねる。



「そんな溜まりに溜まった状態で例え好みじゃないとしても、冬萌を前にして冷静でいられるか？アイツが放つ色香はあの年にして相当なモノだぞ。私だって、我を失った程だ」

その時の事、つまり冬萌の初めてを貰った日を思い出し、お腹辺りを擦る母様。その行動が、服で分らないがその下で勃起しているであろう自身の娘を犯したちんぽを當時を思い出して愛おしく思っている行動だと悟った紫は、突然惚気られてシラケた目を向けた。

「・・・確かに藍は、休日の日に街でナンパされるって言ってたから、私よりは発散出来るでしようし、私よりも経験豊富でしようね。でもだからと言って、昔の貴女と瓜二つな容姿をしている冬萌ちゃんを前にして、あの拗れた可愛い可愛い狐ちゃんが冷静で居られるかしら？」

「・・・どう言う意味だ？」

「なんでもないわ」

傍迷惑な人たらしに自身の従者の報われなさを察した紫。藍の家系は代々、生まれた

時から死ぬまで紫の従者ではあるが、好きな人くらいは出来るし結婚もする。勿論、主人以外とだ。

そんな可愛い可愛い自身の従者の思い人は目の前のエツちな巫女服を着込んだ性欲の化身。

しかし、母様本人はその事に気付いていないし、藍も神薙家とは結ばれないと理解し、自分の中で折り合いを付けている。同じふたなりな為に身体を重ねる事も叶わない。前の代、つまり冬萌の前の女性とはその気持ちが発散させる為に何度も何度も身体を重ねた。

だがその人も亡くなり、とうとうその劣情のやり場は何処にも無くなった。そんな時に現れたのが先代よりも母様とそっくり、生き写しレベルで似ている娘の冬萌。

藍が冷静で居られるとは到底思えない。しかも、話を聞けば車内で寄りにもよつて藍の目の前で盛大にヤツたらしい。

(冬萌ちゃん、大丈夫かしら)

その辺を全く理解していない阿呆に溜め息を吐きながら、紫は目の前に置かれた自身のカップに手を付けた。



目の前で昔のあの人が瓜二つな幼女が私に犯され、ダラしない顔になっている。小学校入学前の女兒が到底していいような顔では無い。服は剥ぎ取り、袖とブーツだけ。子宮に通常なら妊娠確実レベルで自身の子種を沢山注ぎ込み、子宮は飛び出て丸見え。

まるであの人を犯しているみたいで、久しぶりにゾクゾクする。町中で声を掛けられた娘に対して、ただ発散するのは訳が違う。それ程、私にとって神薙家の者との性行為には意味がある。

「おい、誘って来てもうお終いか？こっちはまだまだまだ犯し足りないんだ♡動けないと言うのなら、遠慮無く挿入れさせてもらおうぞ？」

「ま、まっひえ待って．．．ひゅ少こひし．．．イグツ♡．．．やし休ゅまましせえてえ．．．♡♡」

「言葉遣いになってないな。肉便器風情が生気だぞ♡どうしても休ませて欲しいなら、『もう冬萌のおまんこは藍様の子種で一杯です。これ以上、ちんぽ様で突かないで下さい』くらいは言ってみろ♡」

「ひ冬よ萌もえのによ．．．おまんこはあ♡藍様しやまおちんぽ大が好だい好しきゆきれすうからあ．．．

♡これ以上は♡ジユボジユボししにないれいくくらだひさい♡♡」

あの人なら絶対に言わないであろうその台詞。それを幾ら切羽詰っているからとは言え、何の躊躇も無く言いのけた彼女を見ているだけでちんぽに熱が集まっていくのを感じる。

なんて下品ではしたないのだろうか。あの人と同じ姿でそんな事を言うなんて・・・私の中のあの人のイメージをボロボロと崩れさせるそんな悪い子にはやはりお仕置が必要だ。

「全然言えてないが・・・まあいい。少しの間、そのぷにロリまんこは休ませてやろう」  
「ありがとう・・・ごじやいま——しゅッ!♡」

安堵していた彼女の腰をガツシリと挿んで目の前の穴へ、自身の肉棒を根元まで一気に突き刺す。何が起きたのか分からないのか、身体を仰け反らせながら目を白黒している冬萌。

快楽の波が収まってから、自身のお尻が犯されている事に気が付いてこちらに困惑の表情を向けて来た。

「ツツ♡．．．♡にやんれなののお♡言ったのに．．．♡おちんぽジュボジュボらめえ♡つて言ったのにい．．．♡無理なの♡本当にもう無理だからあ．．．♡しゆこしでいいから．．．休ましてえ♡」

「おまんこは休ませてやっているだろう♡それにズツポリ挿入つて．．．本当は欲しかったんじゃないのか？」

「しよんにや事にやい．．．♡」

「こんなに締め付けておいてよく言う．．．よッ！」

「おほッ♡お♡お♡お♡」

うひッ♡ヤバイ♡

このロリアナル、ちんぽ穴風情の癖に動く度に締め付けくるなんて生意気い♡  
気を抜くとすぐにイッてしまいそうだ♡

「ひぐうツ♡しよ．．．しよんにや♡激しくう♡らめえええ♡お尻気持ちいいによおお♡♡」

「こんなに乳首ピンピンにさせてツ♡犯されてるのにそんなに気持ちいいかツ♡この淫

乱ビツチがッ♡♡」

「ほによ、おお、おお、お♡♡乳首シコシコしちやらめえ♡♡ふにふにも禁止いッ♡これじゃおまんこ休めにやい♡子宮が一杯キュンキュンしちやつて休めにやいによ、おおおお♡♡」

「ああ・・・♡そろそろイキそうだ♡このまま中に出すぞ♡一番奥に一杯注ぎ込んでやるからな♡・・・うッ♡イクッ♡イクイクッ♡ううッ♡・・・♡♡♡♡」

「お、おッ♡おお、お、おおッ♡奥うううう♡♡あちゅあちゅの子種ぎだあ、あ、ああ♡♡♡♡」

暫く続く本気の射精。今日一番の量と濃さを誇る精子達が溢れ出す事無く、奥へと流れ出る。冬萌自身もイッているのであろうが、それを差し引いても締め付ける力が凄く、肉棒をまるで雑巾絞りのように締め付けてくる。

くう♡搾り取られるう♡

イッてるのに強制的にまたイカされるうううう♡

ああ♡凄いい♡射精止まんない♡

私が射精する度に冬萌はイツて更に締め付け、それで再び私がイクという連鎖が続いた。おまんこの時は全て挿入らなかったからこんな事にはならなかったし、何より膣圧もここまですでは無かった。

結局、私が足腰が立たなくなるまで互いにイキ続け、その場に崩れ落ちるのと同時にちんぽがズリユウツと抜けた。

「ほあッ♡・・・あ♡・・・ああ♡・・・ツ!?や、やらッ♡ダメダメッ♡来ちやダメッ♡」

放心状態だった冬萌が慌て出した。どうしたのだろうか、と顔を上げた瞬間、飛び出た子宮口とアナルから同時に大量の子種が溢れ出した。

「ほによお、おおお、おおお、♡♡出る、ううう♡出てるによ、おお、おッ♡おまんこもお尻も一杯い、いい、い♡♡止まんにやい、い♡藍しやまどれだけ出したのお、おお、お♡♡」

グツタリとしていた筈の身体を反り返らせ、ビクンビクンツと激しく痙攣している。

目はほぼ白目を剥き、舌を突き出し下品な嬌声を上げ続けている。

それが五歳になったばかりの幼子が魅せる姿である事に背徳感を禁じ得ない。出し切った筈のちんぽに熱が集まり、再びその剛直を取り戻す。

「あひい．．．．．♡．．．ほえ？藍しやま何を．．．ほお、ッ!？」

エツちな冬萌へのご褒美タイムはまだまだ続いた♡



目が覚めたら勝手知ったる家の寝室うちだった。寝巻きの白装束を着て布団に包まれ、襖から漏れる光から察するにもう陽も殆ど落ちているのだろう。

「．．．．．?」

軽く見渡して見ても母様は居ない。混乱している状況下で最も信頼している人物が居ない事に不安を抱いてしまうが、家なら大丈夫だろうと無理矢理安心させ記憶の整理



をする。

えーと・・・確か、電車乗って母様にオナホにされ、学園に行つて美人な理事長と出会つて・・・ああ、そうそう、藍様と一緒に見学に行つて・・・そこで襲われたんだつた。

・・・そつか、襲われたんだよな。性的に。

「・・・・・・・・」

お腹をサスサスと摩つてみる。子種が入っている様子は無いが、おまんことお尻に慣れ親しんだ異物感がまだ残つてる。・・・この歳でちんぽに慣れ親しむとか、考えてみれば我ながら凄いな。

・・・子宮に数回出してお尻にも出された所まではハッキリと覚えてる。その後には前と後ろから同時にナニかが出た事や金色の耳と尻尾？というよく分からない事も臍気ながらに記憶に残つてはいるが・・・その後がよく思い出せない。

いや、きつと犯されたんだろうけど、どうして今家に居るのががまるで記憶に無い。

布団に入っていたから疲れて寝たのか？臭いを嗅いでみると、いつもとは違うけど洗剤の匂いがするから、風呂には既に入ったのだろう。・・・まあ、母様に聞けば分かるか。

そう思つて布団をそのままに、ガクガクに震える両足に鞭打つて廊下を歩きながら居間へと向かうと何やら少し騒がしかった。騒音という程五月蠅い訳では無いのだが、少なくとも一人ではないような。

客人が来たのだろうか？と珍しく思いつつも開いている襖からひよっこり顔を出す  
と見覚えのある幼女が母様が作ったであろう料理をせっせこ運んでいた。

「・・・ッ！」

その姿を捉えた瞬間、既に身体が飛び出した。

「後は飲み物を・・・ん？うへえ!？」

「しなのさあああん!!」

その幼女は俺が無意味な露出プレイを暇潰しでしていた時に出会った、コスプレドS

ロリな『篠ノ之束』だった。

一瞬で眠気が吹き飛び、驚いている彼女にハイテンションで抱き着いた。割と本気で突っ込んだのだが、あの時と同じ格好をしている彼女は少ししたたらを踏むだけに留まった。

「スーツハーツ♡スーツハーツ♡」

「やめろ変態！」

深呼吸して身体をスリスリ擦り付けてただけなのに引き剥がされて、放り投げられた。解せぬ。

空中で身体を捻って着地と同時にもう一度突撃したら、束じゃない横から来た別の柔らかな何かにぶつかり、全身を大好きな香りで包まれた。

ああ♡見なくても分かる。母様のお胸様だ♡

「母様あ♡」

「騒がしいと思えば、起きてたのか。冬萌、もう夕餉の仕度も済んだから、テーブルに着きなさい」

「はーい」

聞きたい事は山程あるが、取り敢えず夕飯だ。名残惜しくはあるが、母様から離れて卓袱台ちやぶだいに並べられている料理の前に座る。

食前の合唱をしてそれぞれが料理に手を付け始める。お腹が空いているのか、誰も言葉を発さずに黙々と口に運んでいく。

うん、美味しい。母様が作る料理って豪快だけど繊細というか・・・まあ兎に角、大好き。味も普通に丁度いいし、何よりも愛情が感じられる。大事だよね愛情。

そんなこんなでそこそこに腹も膨れたので、聞きたい事を聞いてみようと思ったのが思い止まる。

考えてみれば、やってる事は色々とヤバい。大きな学校の理事長の秘書的立ち位置である藍様とそんな事をしたなんて知られれば、結構面倒な事になる。何よりも大人びてはいるが東は子どもだ。目の前でそんな下世話な話をする訳にもいかない。

・・・あれ？いつから『藍様』って呼ぶようになったんだっけ？

色々と頭を捻らせていると箸が止まっている事に気が付いたのか、母様が不思議そうに尋ねてきた。

「どうした？箸が止まっているぞ」

「え？・・・ああ・・・えっと・・・どうしてたば・・・の・・・のさんが居るの  
かなって」

「・・・そう言えば、まだ言っていなかったな」

名前を言おうとしたらギロリと睨まれたので訂正したが、果たしてこれはこれで間違っている気もするが取り敢えず後回し。

聞いてみれば、寝た俺をおぶって帰っている途中に駅からここまでの帰り道に束が歩いていたらしい。時間帯的にもかなり遅くなるので今日は家で預かる事にしたのだとか。

ほへ・・・ん？何で束が居たんだ？前はもう二度と来ないとか言っていた気がするんだけど・・・。

「あ、これ忘れてた」

母様の説明に耳を傾けていた東が懐から封筒を取り出し出した。疑問符を浮かべながら受け取った母様。東が補足した説明でそれが何なのか判明した。

「どうやら、先日の交通費らしい。」

まさか、態々これの為だけに来たのかと東を凝視していると、それに気が付いた東がそっぽを向いた。

「・・・別に来ないとは言ってないし。用があつたから来ただけだ」

「東ー!!」

「うわっ、気持ち悪!? テーブルの下から這いずって来んな! 後、名前で呼ぶな!」

んもう、素直じゃないんだからあゝこのこのゝ♡

嬉しさ余りに下から抱き着いてわーきゃーしていると、流石に母様に怒られた。自分の席に戻って食事を再開するのだが・・・ダメだ、顔がニヤける。

「・・・おい、その顔やめろ」

「ほえ?・・・あ、ごめんなさい・・・えへへ♡」

「・・・くう・・・ッ!」

真つ赤な顔で睨まれたので流石に自重する。

・・・うん?なんか束が急にソワソワしてる?偶にお股辺りの裾を気にしてるし・・・あ、そう言えば抱き着いた時に俺の下腹部がキュンとしたんだけど、あれ何だったんだろ?

まだ子種が残ってたのかな?うーん、でもそれなら今もキュンキュンしてないとおかしいし・・・まあ、実害は無いし気にする事でも無いか。



ちーちゃん以外は興味なんてまるで無かった。親もただ一緒に住んでる同居人やお節介焼きなお隣さん程度の認識だし、それ以外は顔すら覚えていない。

身の回りの事をするのが面倒で、それを代わりにやってくれるからそれなりに感謝はしている。だけど、その腫れ物を扱うかのような態度が鬱陶しくて、憂さ晴らしに

ちよつと遠出する事にした。

本当、適当にボケーツと何も考えず電車に揺られてたもんだから、気付けば終点だった。降りてから知った事だけど、思いの外乗車していたらしく、かなりの金額を払う事になってしまった。その気になれば簡単に稼げるとは言え、なんか損した気分だ。

次の電車は数時間後だし、ここまでお金を払って何もせずに帰るのもなんか負けた気がする。そもそも今はお金が無いので、取り敢えず散策する事にした。

近くにそこそこ大きい川が流れている無人駅を出てみれば、人っ子一人居ないド田舎だった。ここまでの田舎は初めてで、好奇心から適当にぶらぶらと歩いているとトンネルを見付けた。

そこを通ると似たような景色。向こうの方に山が連なり、人は居ないが何故か手入れされている大自然。遠目だが恐らくトンネルがある。

体内時計もまだ十分程度しか経っていないから、もう一度向こうのトンネルを目指した。

と言うのを四、五回は繰り返し返した。途中に集落のような家が沢山あった所があったけど、廃村なのかどれももぬけの殻。



何か争ったような形跡も見られたが、埃を被ってるから朽ちただけかもしれない。それ以上に手掛かりは無し。

他にも民家はあったが、どれも人が住んでいない様子は無く、少なくとも人が居なくなつて十年は経つていそうな雰囲気だった。

不気味ではあるが、こうも何度も見ていけば慣れるし飽きる。元々、幽霊の類は信じていないし、ジェイソンのような殺人鬼が襲つて来ても返り討ちにする自信があるのでこれといった恐怖心も無い。

幾ら何でも流石に飽きたので次で最後にしようかとトンネルを潜ると変わらずポツポツと民家がある景色の奥に一際大きな山の麓に赤い鳥居が見えた。

赤い鳥居と言えば神社。現にその先にある階段が続く所にそれっぽい建物がある。新しい刺激という事もあるが、何よりも自分の家と同じく神社だから気になつて向かう事にした。

こんな辺境の地にかなり立派な鳥居がある神社。非科学的な物は信じていないが居て欲しいとは思つてる。だつて浪漫溢れるじゃん？未確認生物とかなら尚更。

まあ結局、馬鹿みたいに長い階段を登つて出会つたのは露出狂の変態だったけど。こ

の歳で変態趣味に目覚めたのはある意味、これはこれで未確認生物な気もしなくはないけれど、私が望んだのはそういう事ではない。

そんな変態の厄介にならなければならぬのは屈辱極まりないが、何よりも腹が立つたのはその変態と出会ってから股に付いてるおちんちんが反応して仕方無い事だ。

よく分からないけど、アイツを見てるとなんだか胸の奥がザワザワしておちんちに熱が集まる。近付けば近づく程にそれは増していき、いつものように他人に興味無い態度のフリをして突き放した。

それなのにアイツは関わって来て・・・そのお陰でこうして電車に乗って帰れたのだけれど、なんか釈然としない。

地元に帰れば、真っ先にちーちゃんに殴られた。理由を聞けば私が出して、色々な人が一日中探し回ってたらしい。

だからと言って、流石の私でも助走を着けたちーちゃんの本気パンチはヤバイよ。危うくアイツみたいに馬鹿になる所だった。

そんな冗談を口にして気付いた。ちーちゃんは兎も角、両親の顔ですら見たら思い出す程度にしか覚えていない私がああ馬鹿の顔をハッキリと覚えている。と言うか、さつきからあの馬鹿の事しか考えていない。

つまり、ちーちゃんとかあの馬鹿は私の中で同じくらいの扱いって事になる訳で……いやいや無い無い。絶対に有り得ない。私の頭脳をそんな下らない事にフル稼働してるなんて、そんな馬鹿な事がある訳が無い。

頭かぶりを振ってその思考を外に追いやる。そんな私を変な物を見る目で見てくるちーちゃんに何でもないと誤魔化して家に帰る。

親に抱き着かれたりと一悶着あつたが、今の私はそれどころでは無い。何度振り払つても気付けばアイツの事を考えてる。

いや、本当は分かつてる。私がアイツに興味を抱いている事は紛れも無い事実なのだと。だけど、あれだけ変態と罵つた後にそれは私のプライドが許さないし、貸しを作つたままなのも嫌だ。

だから次の日に早速向かおうとしたが、午前中は迷惑を掛けた人達に挨拶して回る事になった。無視しようとしたけど、なんか怖い笑顔の母親に逆らえず午前中を潰してしまつた。

その後、なんとか自由になつた私は午後から電車に乗つて昨日の場所へと向かつた。

お金に関しては迷惑を掛けるのはなんか嫌だから自身の小遣いからだ。

しかし、問題が発生した。先日の神社へと辿り着いたはいいものの、そこは他の廃墟と同じくもぬけの殻。鍵が掛かっていなかったから中へと入れた。

不用心過ぎると思うが、ここまで周囲に人が住んでいないならそれも仕方無いのかも知れない。

少し洋風が混ざった家うちよりも完全な和風の作りになつている中を宛も無く彷徨つてみたが、やはり誰も居ない。昨日のアイツの話から推測するに家族構成は母親と娘の二人。争つた形跡も無いから、十中八九出掛けていると考えるべきだ。

「・・・マジか」

家から遠過ぎる故にそう何度も来る訳にもいかない。正直面倒い。ここまで電車も遠いのにそこから徒歩で更に時間が掛かる。交通面がかなり便利なこのご時世にそれは精神的にかなりクる。

出した結論は終電まで待つ。丁度、日没辺りで帰れば間に合うだろう。



「・・・帰るか」

結局、アイツが帰ってくる事は無かった。周辺を散策してみたり、アイツがやってたように鳥居に腰掛けてみたりと暇を潰し、気付けば山の向こうに日が沈み始めていた。鳥居から飛び降りて階段を飛ばし飛びしに降りて行く。行きは良い良い帰りは怖い、とは言うけれど怖いというよりかは陰鬱な気分だ。

「・・・まさか、な」

自分で考えてある可能性に気付いた。

『行きは良い良い帰りは怖い』、その言葉の元は日本の動播の『とおりやんせ』に出てくるフレーズの一つ。童謡という物は何かと謎が多い。この『とおりやんせ』もそれは同じであり、歌詞についてとある説がある。

それは『人身御供』説

昔は『七歳までは神の内』と言われ、7歳から人間扱いされたのだという。その年齢までに子どもは飢餓や病気で死亡したり、口減らしで人身御供されたり、身売りされたりすることが多くあつたようだ。

既に廃れて長い廃村に神社に居た真つ白なワンピースに身を包んだ七歳よりは幼い子ども。母親が居るとは言っていたが、状況証拠だけで実際に見た事は無い。

まさか本当に幽霊の類だったのではなからうか、と私らしくも無い考えが頭を過ぎる。

「いや、露出狂の幽霊とか信じたくないんだけど……」

ゲームとかでは内臓まで見せて来る超弩級の変態まで居る始末だから、寧ろそれが本来の幽霊として正しい性癖なのかも知れないけれど私は信じない。

怖いとかじゃなくて、私が抱いた浪漫の正体の変態つて事を認めたくない。まるで私がいイツと同類みたいじゃないか。嫌だぞ？ 私は絶対に認めないからな？

憂さ晴らしに小石を蹴りながら歩いていると突如、目の前に影が降りて来た。何事か  
と意識を集中させてみると、アイツが大人になったらこうなるんだろうな、と思える程  
にソツクリな私でさえ度肝を抜く美女がしゃがんで私と視線を合わせていた。

よく見てみれば、その腕の中には気持ち良さそうに胸に抱き着いて寝ているアイツが  
居る。恐らく、この人がアイツが言っていた母様なのだろう。

「こんな所で何をしている？」

女性にしてはやや低音で相手を萎縮させてしまうような言葉遣いだが、こちらを気  
遣っている事は理解出来る。普通なら私がここに居る理由からして、事情を話して用件  
を済ませるべきなのだろうが、今の私はそれどころではなかった。

今、この人は上から降りて来た。平原程では無いにしろそこそこ高い木があったり  
する。しかし、少なくとも常人がそこから私の目の前に飛び降りるのは不可能な距離  
だ。

どうして下を向いていたのか、その瞬間を見逃していた事を悔いてしまう。

「・・・今、何処から？」

「何処？・・・敢えて言うなら上だな」

「跳んで来た・・・よね？」

「そうだな」

「ツ〜ツ!!」

興奮が抑え切れそうにない。あれが単純な身体能力だとしたら、恐らくちーちゃんや私を軽々と超えている。変態に会いに来たら、とんでもない収穫を得られた。仮に何かタネがあるとしても恐ろしい性能だ。アイツが様付けで呼ぶのもなんだか分かる気がする。

色々と話したいし、聞きたい事が山程湧いてくる。私達と同種の天才なのだろうか。どうしてこんな所に住んでるのか。何故、そんな際どい巫女服を着ているのか。

言いたい事が多過ぎて言葉に詰まるという初めての体験をしていると、アイツの母様がとある提案をして来た。

「もう日が暮れるか・・・もしかしてだが篠ノ之束かな？」

「ッ！・・・はい、そうです」



．．．ああ、アイツが教えたのか。服装は我ながらかなりアレだから、まあ分かるよね。

「今日はもう遅い。親御さんには私から連絡を入れておくから、家に泊まっうちていきなさい」

「いいんですか!?!泊まります!喜んで泊泊まらせてもらいます!」

この時の私は会って間もないが敵わないと感じる人物に出会って極度の興奮状態となっていた。だから、私も抱えて跳ねぶように強請ねだったりと自分でも幼いと思う程に恥ずかしい事を色々としたのだが．．．その、なんだ。

空は気持ち良かった

◇

後から知った事なのだが、どうやら家うちの母親とおばさんは母校が同じで昔からの知り

合いらしい。

おばさんと言うのはアイツの母様の事で、おばさんが家の母親と電話をしている時手伝いをしていた私が質問をしについて母様と呼んだら、それが電話越しの母親に聞こえたらしい。

そしたら、「羨ましい」だの「家の娘を寝取るな」だのと愉快的事を言い出す母親におばさんは苦笑い。電話から聞こえて来た何処か微笑ましさを含んだ声に居心地の悪さを感じていたので、いい仕返しが出来てスッキリした。

電話が終わってから自分の事をおばさんと良いと言ってきたので、素直にそう呼ぶ事にしたのだが違和感が凄い。家の母親とそれなりに親しそうだったから、それなりに歳なのだろうけど、どう見ても母ではなく姉に見える。

いや、傍から見たら家も相当若いのだろうけど、それにしたっておばさんは若々し過ぎではなからうか？全くもって疑問が尽きないがそれは後だ。取り敢えず、手伝いを先に終えないといけない。

「しののさああん!!」

そうして意気込んだのにこれだ。私がちーちゃんにするように突撃するかのよう  
抱き着いてくる変態。容姿がここまで似ているのにどうしてコイツはこう…はあ。言  
い難い名前だとは思うけど、ここまで当たらないものだろうか？

と言うか、やはり胸の辺りがザワザワするし、おちんちんがなんか変だ。咄嗟に投げ  
飛ばした後におばさんが収めてくれたからよかったけど、もう一度抱き着かれたら  
ちよつとヤバかったかもしれない。

・・・ヤバいつてなんだ？

「・・・そう言えば、まだ言つてなかったな」

おばさんがアイツが寝ている間の経緯を話してくれた。つて、幻想学園つて私を通つ  
てる所と同じじゃん。え？じゃあコイツ、後輩になるん？マジで？・・・いや、なんで  
ちよつと嬉しく思つてんだ私。

「あ、これ忘れてた」

おばさんと出会ったの所まで話が進んで思い出した。本来の目的を忘れてしまう所

だった。慌てて懐から取り出してそれが何なのか説明する。受け取りを拒否されるかと思つたが、おばさんが何かを口にする前に私の視界に不思議そうな顔でこちらを見詰めるアイツが写つた。

あ、納得したような顔になった。・・・うわつ、何その顔。凄え、腹が立つ。

「東ー!!」

「ツ!？」

うえ!?な、名前!?つて、何その動き!キモツ!?ゴキブリみたいじゃん!

うわつ、ちよ、そこに頬擦りしたら・・・くっ♡

「冬萌、食事中だ」

「・・・はい、ごめんなさい」

はあ、はあ・・・クツソー、何なんだよもう。訳分かんないよ。なんでおちんちんがこんなに・・・くうツ。

◇

「嫌だ」

「えー、なんでー！一緒に寝ようようー！」

「絶対に嫌」

一緒に寝たいアイツと寝たくない私とで家の中で不本意ながら追い駆けっこした後結局、私は一人でアイツはおばさんと一緒に寝る事になった。

親は似たような寝巻きを着てたけど、私がこの白装束を着るのは初めてで何処か気恥しさがあるものの、浴衣だと思えばそれも無くなった。

布団に入り目を閉じる。前にも感じたが、夜は一層静かになり何よりも暗い。寝るにはいい環境で昨日、あんまり寝れてないのもあってかアツサリと眠りに落ちた。

だけど、尿意で夜中に目が覚めた。廁へと向かおうとしたが、考えてみれば私は何処に廁があるのかを聞いていない。

起こすのも忍び無いし、そこまでヤバい訳でも無いので適当にぶらぶらする事にし

た。．．．あー、なんで自分で『ぶらぶら』とか考えちゃうかなあ。おちんちん連想させるから、そう言うのは避けてたのに．．．はあ、まあいいや。

中々見つからないのもあり、ちよつと陰鬱な気分で家の中をグルグル回っているとある部屋の前に通つた時に何やら物音がした。耳を澄ませてみると、どうやらアイツの声だ。抑えてはいるようだけど、他が静か過ぎて普通に聞こえて来る。

こんな夜中に何をしているのだろうと、襖を少し開けて中を覗くと想像を絶する光景が目に見え込んで来た。

「えっ．．．．．は？」

寝ている以外は思考を止めた事が無いのだが、この時ばかりは一瞬だけ完全に止まった。見間違いかと思つたが、私の目は暗闇だろうと関係無くよく見える。

横になつておばさんに腰辺りに跨っているアイツ。おばさんは寝ているようだけど、その股間には私やちーちゃんと同じおちんちん．．．だと思われるナニかが垂直に直立していた。

いや、そこまでは．．．まあ、うん。いい訳無いけど今は置いとく。

問題はアイツだ。おばさんに跨って何をしているのかと思えば、おちんちんを両手で上下にシゴキながら美味しそうに恍惚とした表情で舐め上げていた。

普段なら蔑み、興味が失せる瞬間まで持ち得る限りの罵詈雑言で貶していたのだから。

しかし、この時の私はその場から動く事無く、ただ黙ってその醜態を目に焼き付けていた。

この日、私の人生は大きく変化する事になる。

第9話・寝てても母様ちんぽは最強♡（素人童貞ちんぽにも敗北しまくります♡）

子供だからなのか、それともこれが本来の神薙家として正しいのか、個人的には母様を見てると後者な気がするが俺は随分と性的な体力の回復が早い。

それどころか身体は性的興奮をしていないにも関わらず、特にヤツた後はその時の事を思い出して、また気持ち良くなりたいなあ、なんて思ってしまう。

秘薬を塗って無かったら今頃、束が同じ屋根の下に居るのに全裸になってオナってる所だ。

そんな時に理由はどうであれ、一度身体が興奮を覚えてしまえばどうなるか？ 答えは簡単。ちんぽが欲しくて堪らなくなる。

なに？ 普通はならない？

母様のちんぽを知らないから言えるんだ。穴をトロトロに解された後にあんなエグいちんぽでニユポニユポされてみる。男だろうが女だろうが簡単に墮ちるぞ。

まあ、そういう訳で冬萌をこんなエッチな子にしてくれた責任を母様は取らなければ



ならないのだ。そう、全部母様が悪い。

「母様・・・ねえつてばあ・・・」

ドSだろうがなんだろうがあんなに可愛いロリと寝室を共に出来ず、結局別室で寝る事になって数時間。仰向けになってる母様の上に寝惚けて乗り、お胸様に顔を埋めて寝てたら、窒息して真夜中に目が覚めた。

もう一度、寝ようと試みたが起き方が悪かったのか、どうにも目が覚めてしまった。それに寝ているからか、母様から霊力が微量ながら漏れ出てる。

普段と比べれば微々たる物だが我慢出来るかは別問題。そんな訳で我慢出来ずにエッチしたいと思ったのだが、母様が起きてくれない。束が居るのであまり大きな声を出す訳にもいかなないので何度か起こそうとしてみるも起きる気配無し。

・・・待てよ？もしかすればマウント取れるんじゃないや・・・ふむ。

「・・・お、起きないと・・・イタズラ、しちゃうよー？」

・・・よし、起きないな。

そうと分かれればさつきと布団を捲り、母様の股の間に陣取る。スツと裾を掻き分け……

「ほこよ、ツ!？」

ぶるんツと勢い良く飛び出したのは見慣れた半勃ち勃起ちんぽ。本人は寝ていてもやはり下の母様は起きててくれたみたいだ♡

俺をちんぽ中毒にしてくれやがった母様のちんぽは例え半勃ちだろうとかなりの大きさだ。しかも食い気味に母様の裾を分けたから、頭的位置が低くて必然的にちんぽを見上げる形になってしまった。

くそお……ちんぽの癖にい♡

人間様を見下すとか、信じられねえ♡

どつちが上なのか思い知らせてやらないと♡

まず手始めに両手で裏筋を優しく摩つてやる。スリスリと表面を撫でるようにすれば、すぐにムクムクと膨れ上がりフル勃起になる。

そうそう、ちんぽはそうやってピンピンになってればいいんだよ♡

俺に発情待った無しのかっさい臭い嗅がせておいて、半勃ちとか生意気過ぎなんだよ

♡  
♡

ちんぽが射精しないよう注意しながら、次第に擦る力を強めて行き、両手で上下に大きくシゴき始めた頃にはおつゆが溢れ出していた。

時折、ビクツと痙攣する母様が面白くてもつと虐めたくなってしまう。パクリと亀頭を啜えて、尿道辺りをチロチロ舐めつつ、肉棒を両手でシゴき続ける。

「ほおら♡母様、こうするの好きだよね？んむ・・・♡れろお・・・♡ふふっ♡凄いいビクビクしてる♡もうイツちゃう？イツちゃうの？尿道ホジホジされて、おしっこみたいにぶち撒けちゃう？♡いいよお・・・♡冬萌の喉まんこにい・・・♡一杯、出してえ・・・♡」

最近出来るようになった喉の開閉。それを利用して喉をくぱあ・・・♡と開き、ちんぽを更に奥へと入れていく。不思議と息は苦しくないが、口では出来ないの鼻で呼吸

をしている。

発情してる現状、かなり呼吸が荒くなるのだが息を吸っても吐いてもイカ臭い性臭が鼻腔を犯し、脳がグチャグチャに犯され、顔がトロンと惚けていく。

「んぐ．．．んっ♡ん♡」

喉マンコと言ってもやはり半分程度しか飲み込めない。残りは手で一生懸命シゴいて射精を促すと、寝ていて我慢が効かないのか、いつも以上に簡単に俺の胃に子種を植え付けてくれた。

「んぐううう♡♡んんツ♡．．．ん．．．んお．．．ぷはあ♡．．．はあ♡．．．っ、  
これでも起きないなんて．．．♡」

こつちは性感帯じゃない場所に子種注がれてイッたつて言うのに種付けした本人はちんぽを変わずビンビンにして素知らぬ顔で寝息を立てている。

流石は母様と言いたい所だけど、それが悔しいというか、まるでお前なんてその程度と言われているみたいで．．．くそう、今に見てろよ。

「い、挿入れるからね・・・♡ひう♡・・・い、挿入れちゃうよ?・・・本当に挿入れちゃうからね・・・♡」

つま先立ちでなんとかちんぽの上に跨り、アナルに亀頭を充てがう。腰を降ろしていないのに身長差で既に少し中へと侵入しているので、もつと焦らそうとしたのに我慢出来ずに腰を降ろしてしまった。

しかも、亀頭を挿入ただけで気持ち良すぎて腰が抜け落ち、気が付いた時にはちんぽの根元まで一気に挿入していた。

「へっ?—おほおほおおおお♡♡しゅ、しゅごおおお♡♡♡」

い、挿入れただけで・・・イツちやうなんて♡こ、このちんぽ卑怯だよお・・・♡

暫く絶頂の余韻に浸って腰に力が入り出してから、上下運動を開始する。おまんこのようにヒダヒダが擦れる度に絶頂する、なんて事は無い。

しかし、抜き差しする度に常にうんちが出そうな状態と抵抗無く出ている状態の窮屈

感と解放感が同時に襲い、おまんこの時とはまた違った快楽がやってくる。

「お、ッ♡お、ッ♡これ、ッ♡い、い、♡腰止どまんにやな、い♡♡」

声を抑えるのも忘れ、自分の意思とは関係無しに身体が勝手に腰を振りまくる。腰をダイレクトに襲う快楽で立つ事すらままならない筈なのに性欲とは恐ろしいもので、自分の意思では逆に止まる事すら出来なくなってしまう。

獣のように快楽に溺れ、尊厳を捨てたような腰振りアナルセックス。眠ってる人のちんぽでこんな無様な姿を晒してる自身の弱さが惨めになると同時に、それを自覚すればするほど腰がふわふわ浮くような感覚に襲われてしまう。

「ああ、♡イグツ♡ら、めえ、♡イグのお、♡♡おお、おお、おお♡♡い、グウウウ♡♡い、いいい、♡♡子種\*ぎただあ、あ♡お腹あづい、♡♡ドクドク一杯くり、ゆうう、うう♡♡」

母様の腰の上でちんぽをお尻に挿入れたまま、仰け反りアへ顔アクメをキメまくる。そうして散タイキまくって、お腹がポッコリ膨れると吐き出し切ったおちんぽの膨張が

収まった。

何らかの液体がローション代わりになったのか、余韻が引いて抜こうとした時はすんなり、ズリユウウウ♡と引き抜けた。

「ん、ほお、おおお、♡♡」

まあ、だからと言つて快楽を感じない訳じゃないんだけどね。それで完全に腰が抜けて未だに眠ってる母様の身体へダイブ。一時的にちんぽで拡張されたアナルをヒクヒクさせながら顔をお胸様に埋め、このまま眠りたい欲求に駆られるがお腹の子種が出そうなので気合いで厠へと向かう。

あ、その前にお掃除フェラしないと。

半勃ちちんぽを隅々まで綺麗にし、一回ゴツクンした後膝をプルプルさせながらなんとか厠へ向かう。途中、霊力の吸収が始まって外でイキまくったのはご愛嬌。

◇

「お、おとお、お♡吸収来たああ、ああ、ああ♡♡」

月明かりの下で今にも崩れ落ちそうだったアイツが突然、お腹を抑えて下品な嬌声を上げた。それでも内股になる事で膝をガクガク揺らしながらもなんとか立っている。

暫くそうして、おまんこから透明の液体をダラダラ垂らしながら一歩ずつ進み、廁へと入って行った。

「・・・・・・・・」

あの光景が焼き付いて離れない。こうして目を開けているのに全く別の景色を見ているみたいだ。

分からない。こんなのは初めてだ。なんだアレは？いや、性行為をしていたのは何となく分かるがアンタら親子だろ？調べなくても分かるくらいソックリだ。仮に親子で無いにしてもかなり濃い血が繋がっているのは確かだ。

それを・・・あんな・・・しかもお尻!?はあ!?もう訳分かんないよ!!この私の想像を絶したよ!くっそ!なんか腹が立つ!あんな奴に私が超えられたのもそうだけ

ど、何よりも



「……………くそ……………くそ……………」

——私もやりたいと心を奪われてしまった。

「アイツの所為だ……………全部……………アイツの……………」

アイツが入った厠の扉を開く。不用心な事に鍵を閉め忘れていたらしく、特に苦労も無くアツサリと全開させた。

「ほえ……………?……………え、は?」

月明かりを反射させ煌めく濡れ羽色の美しい黒髪。こうして見ると幼いながらも息を飲む程に整った顔立ちの持ち主は今、目の前でこちらを背にして和式便器にM字開脚で腰を下ろしている。

ここからでも分かる程にヒクヒクしているアナルが余計に私のおちんちんを刺激する。

首だけこちらに回し、私の存在に理解が及ばないのか、アホみたいな顔をして呆けている。反射的にその顔をこれから無様に歪める所を想像し、口角が無意識に上がつてしまう。

「しなの……さん?」

相変わらず名前を間違える。そこまで言い難い名前だろうか? まあ、どうでもいいや。私の心を掻き乱す阿呆にはきつちりと責任を取ってもらうのだから。

「な、何して……待って、今は見ちゃ——んぐ!」

コイツがあの人にしていたように、痛い程に勃起したおちんちんを口の中に振じ込んでやる。喉にコツコツ当たる感覚がして、その度に涙目で嘔吐えずきそうになっているがそれすらも封じ込めるように頭を押さえ付けて更に奥へと押し込む。

「ほら♡これが欲しかったんだろ? ……ん♡こうして欲しかったんだろ? あんな美味しそうにしゃぶって……本当、気持ち悪い♡」

くっ♡し、締め付けが・・・♡

さつきは苦しそうな顔してた癖に♡

喉奥に突っ込めば、物欲しそうな顔をしやがって♡

ん♡腰が・・・勝手に・・・♡

「んぐッ・・・」

んお・・・♡ん♡ん♡ん♡ん♡

喉にキウキウ締め付けられるう♡

ああ♡おちんちんの奥が熱くなって♡何かくる・・・♡何かが出ちやうよお♡

「ああ♡ツ♡あ♡あ♡♡・・・ツ♡ツ♡ツ♡♡♡」

「んお♡ツ♡・・・んふう♡・・・んくんく♡」

おしつことは違った感覚がした。腰がガクガクと震え、口が半開きになる程の道の感覚に襲われる。

恐らく、これが快樂というもの。本来なら、こんな感情モすぐに脳内で分析して鎮められる筈なのに心の中では未だに妙な感情が渦巻いている。

「はあ……はあ……」

「んきゅ♡……んく♡んく♡」

「ひゃ♡や、やめっ♡……イイイイ♡♡」

出し切つて余韻に浸っているとコイツが搾り取るように吸い付き出した。奥の方に残っていたナニカが一気にニルンと出て、腰が抜けそうな程の快樂がやって来る。

堪らずコイツの頭に身体を預けて、なんとか立とうとするがそれでもお構い無しに搾り取られる。

もう本当に空っぽになると愛おしそうに口の中でおちんちんを撫でるように舐められ、ゆつくりと引き抜かれた。

「ちよ……ちよつと待つててね♡……んっ……んん」

支えを失つてへたり混んだ私の目の前でアイツが踏ん張る。すると次第にアナルが

ヒクヒクしだし、直後に信じられない量の白い液体が流れ出て来た。

「お、おおお、おお、♡♡しゅごい♡♡いつもより気持ちいいによお、♡♡見てえ♡  
冬萌がイつてるとこりよお、♡もつと見てええ、♡♡」

先程、覗き見ていた光景が目の前で再現するかのようになイツは人間の尊厳を捨て切った獣のように鳴いた。にゆるにゆると途切れる事無く流れ落ちる、恐らく子種と思われるソレを見せ付けるかのようにな。

それが無性に腹が立った。何故かは分からないけど、どうしようもなく胸の奥がザワザワした。しかし、それと同時に興奮したのか、おちんちんも今までに見た事が無いくらいに膨張していた。

あの人程では無いけど、前に調べた平均男性と同じくらい。ソレを丁度出し終わったアイツの背後に回って、四つん這いにさせてアナルに挿じ込むように無理矢理突っ込んでやった。

「へ？ちよ、そつちは・・・んほお、お、おお、♡♡」

「あ♡・・・あう♡」

さつきまでクパクパしていたアナルは、私のおちんちんを感じ取ると只管に吸い付いて来た。おちんちんの皮がズル剥けて少し痛く感じるも、それ以上に暖かくて心地良かった。

そんな中でコイツが腰を振り始めるから、また腰が抜けそうになるが負けた気分になるので意地でも立ってやった。

「お、おひい♡やめツ♡腰い♡いやあ♡激し過ぎい♡♡」  
「うう・・・♡」

や、やつば無理い♡立ってらんないよお♡

ぐう♡でも悔しいから、おちんちんはまだ勃たせて・・・♡

「あう・・・♡」

「あつ♡や♡そ、そんな・・・♡気持ち良いの？冬萌のアナルウ♡そんなに気持ち良い？・・・♡いいよお♡好きに突いてえ♡束のオマセなロリ巨根で冬萌を滅茶苦茶にしてえ♡♡」

あまりの快楽に、背中に抱き着いて只管に耐える。だけど、耳元でコイツが何かを言う。とジュポジュポしながら吸い付いていただけのアナルに異変が起きた。

腸壁にトロみのある液体が分泌されたのか、それがローション代わりになり、おちんちんを出し入れする速度が上がる。

「やつ♡凄ッ♡激しい♡自分の事しか考えてないオナニーピストン好き♡♡もつとグチャグチャにしてえ♡冬萌の腹ペコアナルに一杯エツちなミルク欲しいのお♡お♡♡」

「なにこれえ♡♡．．．頭も腰もフワフワするう♡こ、こんな奴に♡いいようにされるなんてえ．．．♡♡」

プライドが許さなかった。一度は見下した変態の尻の穴に翻弄されるなんて、これまでの短い生で築き上げて来た確固たる天才としてのプライドが許せなかった。

だから、また射精そうになるのを全力で我慢して．．．．．それでもコイツは腰を振り続けるのを止めなかった。

「あツ♡あ♡あ♡．．．んう？♡．．．ダクメエ♡我慢したら駄目だよ♡ほら、腰止まっ  
てる♡冬萌が動くから、一緒に気持ち良くなる♡♡」

「やつ♡馬鹿ツ♡今動いたらツ．．．♡．．．♡イツ♡ツ♡  
——グウウウ  
♡♡♡」

「ひゃあ♡あ♡♡にやにこれえ♡エ♡♡子種と一緒にツ♡おしつこも来りゆ♡うう♡  
♡♡このおちんちん、完全に冬萌を便器扱いしてるによ♡お♡おお♡♡♡．．．お♡ほッ  
♡待つ♡嘘お♡射精しながらピストン卑怯おお♡♡た、束え♡本当に初めてなのお？  
♡．．．♡あんつ♡あつ♡．．．♡束え？．．．♡え、嘘．．．♡気絶してる？ツ  
♡♡んほおお♡お♡♡二発目来たあ♡あ♡ああ♡♡イギユウ♡うう♡♡ヒギイ♡  
まだパンパンしてるうう♡また射精しながらグチャグチャに掻き混ぜられりゆ♡う♡  
うう♡う♡♡お、起きてえ♡♡束え♡無意識ピストンとか卑怯だよお♡おお♡お♡  
」



「あ．．．♡．．．♡ああ♡．．．♡．．．♡あへえ．．．♡♡」



気が付けば、朝日が顔を出し、眼前ではアイツがうつ伏せのまま顔だけ横に向けて四肢を放り出しており、その瞳はほぼ上を向いて意識はありそうにも無い。

四肢で支えているのか、身体だけ和式便器の上で浮いて、顔は若干中に入ってる。まるで本当の便器みたいだ。

互いに着ていた白装束の寝巻きはほぼ全裸同然になっており、アイツの丸出しの下半身からはうんちみたいに白濁のトロみのある液体が、チヨロチヨロと失禁して出たと思われるおしつこと共に便器の中に流れ落ちていた。

ここまでの過程の記憶がまるで無く、流星の私でも呆然とする他無いが、スッキリしたのかへにやりとしたおちんちんを見てなんとなく察した。

「ここに居たか」

「ッ!?!」

背後から突然、気配も無く声を掛けられて思わず肩が跳ね上がった。恐る恐る振り向くと、やはりそこにはあの人が入り口の縁に寄り掛かっていた。

背に受ける陽の光がまるで後光のように射し、神々しさすら感じるが今の私はそれ所では無い。幾ら、アイツが誘って来たとは言え、状況を見れば悪者がどちらかなんて一

目瞭然。

それも片方が実の娘なら尚更だ。ちーちゃんや箒ちゃん達以外で初めて嫌われたくないと感じた人に何もかも終わつた後の場面を見られて、私は初めて焦りを覚えた。

「あ……いや………これ……は……」

普段なら己の考えている事を完全に言葉にしてくれる口が今はまるで動かない。何も考えられず、合わせる顔が無くて……服の裾をギュツと強く握り、目尻に涙を溜めて俯く。

すると、あの人が歩み寄つて来る気配がして、目の前まで来ると、襲うであろう衝撃に備えて身体が勝手に硬直して目を瞑つてしまう。

だけど……そんな衝撃は襲つて来なくて、罵詈雑言を浴びせられる事も無く……ただ優しく、ポンツと頭に手の平を置かれた。

「何があつたのかは大体把握している。その上で言わせてもらうが、お前が何か責任を感じる必要なんて何処にも無いんだ」

「……え？」

その行動と掛けられた言葉が信じられなくて、私らしくない素っ頓狂な声を上げてしまふ。思わず顔を上げてみると僅かに微笑みながら私の頭を撫でていた。

「まあ、その・・・説明すると長くなるから今は省くが・・・コレがそこでアへつてる馬鹿娘の仕事なんだ。今回は少し確かめたい事があって、このような形になってしまった。巻き込んでしまつて申し訳無い」

「い、いえ！・・・謝るのは私の方で・・・えつと・・・え、仕事？・・・え、あ・・・ええ？」

「取り敢えず、風呂を沸かしておいたから今は汚れを落として来なさい。後片付けとこの子の後始末は私がしておく」

「あ、すみません・・・お借りします」

我に返つて暫くし、自分が射精したとは言え流石に臭いがキツかったからお言葉に甘える事にする。少し整理したいし、そういう意味でもお風呂を進められたのかも。



「・・・行つたか」

束が見えなくなり、己の娘を一瞥する。そこには犯し尽くされた娘がなんとも無様な姿でアヘリ狂っていた。

「・・・・・・・・」

先程までの穏やかな表情は何処へやら。まるで虚無のような無表情になり、その場じゃがみ込む。そして愛しい愛しい最愛の娘の子種を排出しているエツチな縦割れアナルへと薄く青いオーラを纏つた手を伸ばし、容赦無く中を掻き混ぜた。

「お、♡・・・お、お、お、お、お、お、♡♡ほお、お、お、♡♡出りゅ、う、う、う、♡♡」

冬萌の意識が戻ると同時に指を引き抜くとダムが決壊したかの如く子種が溢れ出て来る。そんな量を性感帯となつたアナルを通ればどうなるか・・・それはご覧の通り。

口を尖らせて、はしたなく喘ぎ狂う幼女の出来上がりだ。

「ほあ……♡ああ……♡」

「起きたか」

「あ……かあひやま母……ひよちよつつひよお……まつひえ……♡」

「……随分と楽しんでいたようだな。昨日会ったばかりの子に」

「ふえ？……にや、にやにを……」

うつ伏せのまま力が入らず、立つ事が出来ずにいる冬萌をひよいと抱えて、自分の方に向かせる。そして、ぶらくんと力無く垂れる足の間にいつの間にか取り出したちんぽを差し込み、スコスコとゆっくり素股をしだした。

「人が寝ている所を襲って満足したと思えば、すぐに別のモノに乗り換えてアヘアヘ喘ぐとはな」

「え……え？……ま、待つて……それより……今、アナル駄目え……一晩中、オナホにされて……母様のおちんぽ様でこれ以上したら……壊れちゃうからあ

♡♡」

「その割には随分と物欲しそうな顔をしているな？ 媚びを売る雌のような顔をして．．．  
 全く、私の娘はどれだけ節操の無い淫乱なのだろうな。これは．．．お仕置が必要だな」  
 「ち、違つ．．．♡淫乱じゃないっ．．．もおん♡！母様があ．．．冬萌♡．．．をつほお  
 ♡．．．こんな身体にい．．．冬萌をちんぽの事しかあ．．．♡ちんぽでジユボジユボ  
 される事しかああん♡♡．．．考えられないように調教したんじゃん！」  
 「．．．勘違いの無いように言っておくと、お仕置する理由は別だぞ？」

「．．．ほえ？」

「教えた筈だ。少なくとも十三歳以下を相手にしては駄目だ、と。早過ぎると倫理観が  
 無くなり、暴走してしまうから、ある程度成長してからでないとその子の精神が狂う  
 と．．．渡した文献にもあつた筈だ」

「あ．．．あー．．．有つた様な．．．無かつた．．．様な．．．  
 あ、あはは．．．あ、でも罰なら、これは罰にはならないよ！」

「そうか？それなら、どうしておまんこはこんなにも物欲しそうにしているのだよな  
 ？」

「え．．．あ、いや．．．それは．．．そのお．．．」

「もう我慢出来ないのだろうか？一晩中アナルばかりを犯されて、おまんこに子種が欲し  
 くて堪らないのだろうか？こうして擦ってるだけなのに、おまんこからエッチなおツユが

溢れ出してゐるぞ?。」

「や、やらあ・・・♡言わないでえ♡♡」

「まあ、挿入れてやらんがな」

「え、はあ!?!な、なんで!?!」

「言つただろ、お仕置だと。なに、心配するな。昨日から勃起が収まらないコレをアナルで楽にするだけだ。いつもやってゐる事だろ?。」

「違おう・・・今、本当にアナル駄目なの♡♡空気が擦れるだけでイツちやつてるからあ♡♡」

「・・・ほう?会つて間も無い子に股を開くのには拒むのか?。」

「あ、いや・・・違う。そうじゃない♡あ、後で沢山するからあ♡い、今は駄目なお♡だから・・・亀頭をアナルの入り口でぬこぬこして、嫉妬を表現しないでよお♡♡」

「却下」

「によ、お、おお、お、お♡♡」

一息で根元まで挿入され、反射的に天井を向いてイキまくる冬萌。それから暫くの間、母様による子種でポテ腹になるまで敏感アナルをシゴキ倒す刑は冬萌の獣の様な喘ぎ声と共に続いた。



「ちーちゃん、私将来の夢が決まった」

「?・・・宙を目指すんじゃないのか」

「うん、それもただけど・・・それ以上に私は今、猛烈にエッチな道具を作りたい」

「は?」

「アイツ・・・神薙 冬萌って言ったっけ? 神薙・・・冬萌・・・かんなぎ・・・ともえ・・・  
うーん、かーちゃんはなんか嫌だし・・・冬だから、ふーちゃんでもいいや。ふー  
ちゃんをギャフンと言わせるくらいのエッチな玩具を私は作る事にするよ」

「は?」

「あ、オナホも作る予定だから、ちーちゃんも偶にテストとして使つてね。知ってるよ  
、毎日朝と晩にエッチな事してるの」

「は?・・・は?」



## 第10話：お隣さんはドSの皮を被った変態さん♡（ロリに無様に敗北する調教済み未亡人）

東がまさかのふたなり娘と判明& a m p ;筆下ろし（強がり）を終えて一週間。あれから一度も東が家に来ない。

いや、来ないのはまだ分かるけど、連絡が一切無いつてどうなん？嫌われてる自覚はあるけど、これでも一応は身体を重ねた関係だよ？ちよつとくらい声を聞きたいって思うのは我儘なん？母様と東のお母さんが知り合いらしいから電話番号くらい知っていいそうだし。

え？なら、なんでこつちから電話しないのかって？

・・・いやね、掛けようとはしたんよ？だけどいざ、母様から番号聞いてコールしようとして、ふと気が付いた。

気まずいというか・・・何を話せばいいのか、まったく思い浮かばなかった。あれだけ何ともなかったのに途端に怖くなって・・・結局、掛けるのは止めた。

・・・ええ！そうですよ！ビビりましたが何か!?仕方無いじゃん！滅茶苦茶嫌

われてた時は良かったけど、少しとは言え距離が縮まって、その距離がまた離れるのが怖くなったんですよ!!

そんな俺の心情を察してか、母様が代わりに電話した所、東が今は会いたくないと東ママから言われたそう。

．．．．．別にいいし。元から嫌われてるから今更だし。会いたくない、なんて前から言われてた事だし。何やかんや言っただけの時のために会いに来てくれるし。冬萌知ってるよ。東は優しい子だって。

で、まあそんな事を思いつつ、結果は冒頭のように時間だけが過ぎた訳ですが．．．いつまでも落ち込んでなんか居られないぜベイベ!

東の件は置いて、今日はお出掛けです。．．．そう言えば、前回は町には行つてなかつたなあ。結局、エッチする為に外出しただけって．．．まあ、嫌いでは無いし今の今まで普通に忘れてたから、特に気にしてないんだけどね。

さて、ここまで前置きしておいてなんだが、別に今回は町に出る訳では無いし電車に

も乗らんぞ？

今回は母様曰く、ご近所さんの家に行きます！

ご近所さん（母様基準）ですね、分かります。



### 『水城家』

それが今回お邪魔するお宅であり、神社の階段を降りて右の方にある山を一つ越え、生い茂る森を跳び越えようとした母様を説得して歩く事三十分。（ご近所とは一体？）

母様曰く、マジモンの忍者で御先祖様の頃から懇意にしているようにも見えなかつたので疑い半分、ござるかく？と思つたが母様が冗談を言っているようにも見えなかつたので疑い半分、期待半分に話を聞いていた。

俺と同年の子も居るから、仲良くするように言われた。因みにふたなり娘らしい。

ほほう？……いや、別に手は出しませんよ？分かつてるつて母様。神薙家の掟ですもの。……でも手を出された場合、それは冬萌悪くないよね？

### 閑話休題

開けた所に出たと思えば、そこには森の中にも関わらず場違いなお城のような大豪邸が佇んでいた。

「……?……?……?」

景色の変化が急過ぎて理解が追い付かないが、母様が豪邸へ足を進めたので取り敢えず付いて行く。大自然の中に立派過ぎる洋風の建物、一目見て分かる庭園のような手入れが行き届いた庭。

金持ち。圧倒的金持ちだ。ブルジョワって奴か。おのれブルジョワめ。

忍者つてもうちよつと……こう、集落のような、そうでなくとも昔っぽい家をイメージしていたんだけど、思いつ切り俗世に染まってんな。庭に橋があるっておかしくね?

ちよつと残念だったり驚愕だったりと色んな事を思いつつも玄関前に辿り着くと母様が普通にノックした。すると、扉が一人でに開いた。

「ッ!?!」

驚愕やら恐怖で身体が硬直している俺に気付いていないのか、母様はスタスタと中へと入って行く。誰か開けたのか、と思つて俺も恐る恐る中に入ったが誰も居ない。

中は明かりは付いているがまだ外が明るいからかなのか、天井にあるシャンデリアの照明はあんまり明るくないし、部屋の端で蠟燭が揺らめいている。夕暮れのような光量が余計に不気味だ。

なんかそれっぽい雰囲気だなあ、なんて現実逃避していると入つて来た玄関の扉が勝手に閉まった。

「ひい!？」

無理! こういうの本当に無理だから!! あれだろ!?! カラクリ屋敷みたいな、そういう感じなんだろ!?! ゆ、幽霊とか信じないからな! 居ても真つ黒くろすけくらいだろ!

やーい! お前ん家おっぱけやーしきー!!

「・・・あれ?」

内心で一通り騒いでから気が付いた。右を見ても左を見ても正面を見ても誰も居な

い。

「か、母様……?」

声を震わせながら呼んでみるが返事は無い。冷や汗を流しながら周囲に誰か通った跡が無いが、何度も注意深く確認するがなんの手掛かりも無い。

適当にその辺の扉を開いてももぬけの殻。耳を済ませても何も聞こえてこない。

……嘘でしょ……ハグれたの?

その結論に至った瞬間、回れ右をして玄関の扉に手を掛けるが――

(あ、開かねえええ!!?)

ガチャガチャと回しては押し引いてを繰り返すが開く気配がまるで無い。突進しようとしたが触った感覚で絶対に開かないし、こっちが痛くなるだけだと早々に諦めた。

「か、母様……！」

大きな声で言おうとしたが、恐怖故かどうしても声を張れない。届いてもこのロビー内だけであろう音量で発せられた言葉は一切反響する事無く、俺が黙ると同時にシンと静まり返った。

「……む、無理だよお……こういうの本当に……本ツ当に……ダメなんだよお……」

家のように真つ暗な境内だろうと何度も行ったり来たりしてたら問題は無い（と言っても慣れるのにかかる時間が掛かった）。だけどここは間取りが全く分からない（失礼だとは思うが）雰囲気最悪の屋敷。

だが、出れないのであれば何か行動をすべきだろうし、何より母様は徒歩だ。もしかすれば、そんなに遠くへ行っていないかもしれない。今から探しに行けば、恐らく出会える可能性が高い。

気を取り直して、希望を胸に一步を踏み出した瞬間、先程確認して誰も居なかった筈

の部屋から、背後から首を断つてきそうなお面？と執事服を着て、全身を禍々しい薄青いオーラに包まれた何かが扉を開けずに出て来て、そのままふわふわ浮かびながら目の前を通つて壁に吸い込まれて行つた。

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・見たら分かる、アカンやつやん。

見た目もそうやけど、中身がなんか紅く光つてたし。捕まったら絶対に挽き肉にされそう。いや、もしかしたら生きてまま全身を捌いて料理にされたりとか・・・・・・・・あ、ヤバい。嫌な考えばかりが頭に浮かぶ。

無理だ。完全に心折られた。全身鳥肌が立って汗も吹き出してるし、心の声すら若干震え始めてる。後、ちよつとチビつた。

一応言つとくけど、今の別に叫ばなかつた訳じゃなくて、叫べなかつただけだかな？今は何かあればすぐに叫びそうだから、必死に両手で口を押さえてるよ。

どうしようかなー・・・・・・・・行きたくねえなー・・・・・・・・でもなー・・・・・・・・このまま行動しないのもなー・・・・・・・・あ、あの骸骨が行つた方が分かつたんだから、そことは別の方向に行け



ば会わずに済むんじゃない？

よし、そういう事ならさっさと行こうそうしよう。ホラゲーみたいな展開だと色々謎解きしなきゃ絶対に出れないから、目的は母様を探す事だ。こんな所で謎解きなんかしたくない。

全く。ま、迷子になるなんて……母様も……おつちよこちよい……だ……な……うう……！なんで置いて行くのさー！

タツタツタツと音を極力立てないように小走りし、扉を慎重に開いてその先の廊下を掛けて行く。

因みにその幽霊が行った先に母様が居たとか居ないとか……。



「おや？誰かと思えば六華様りっかではないですか。お久しゆうございます」  
「……じいや、私は母様ではない。娘の冬魅ふゆみだ」

邸内を歩いてきた冬萌の母である冬魅の目の前の床から、にゅつと顔？が生えて来

た。それは先程、冬萌が目撃して勝手に心が折れた元凶である水城家の執事。名前のよ  
うなモノは無く、強いて言えば『冥界の執事』が名前。

もう何十年もこの家の執事をしており、彼の事を一言で説明するなら『ボケ始めた地  
縛霊』が妥当だろうか。

冬魅自身も昔からお世話になつてはいるが、彼女の彼に対する評価は『優秀だが面倒  
臭い』というあんまりなものだ。と言うのも本当にボケてはいるのだろうがそれを態と  
やつてる節があり、一々訂正するのが面倒なのだ。

数回程度ならまだしも会う度にボケる。彼が家事をしに部屋を出て、数分後に出会う  
とまたボケられるのだから、多少イラついても仕方が無い。

「おっと、これは失礼致しました。いやしかし、少し見ない間にまた随分とお綺麗になら  
れましたな。先代様と見違えてしまいました」

「……まあ、親子だからな」

自身の母親に似ていると言われ、満更でも無い様子の冬魅。今の彼女にとって最も大  
切な人は冬萌だが、他がどうでもよくなるなんて事は無い。

同じ神籬の人間であるからして必然的に冬萌と同様、冬魅も嘗ては重度のマザコン

だった。それは冬萌が産まれた今でも変わらず、順位は冬萌の下だが好感度は前のままだ。

「所でいつから館内に？ 偶々、私を通ったからよかったものの、そうでなければ奥様方が何処に居るか分からず、彷徨う羽目になりましたよ？」

『『いつ』も何も、じいやが開けたんだだろうが。中に入っても居ないから、こうして探していたんだ』

「はて、そうでしたか？ これは失礼を。近頃、物忘れが酷くつて。それはそうと今日はどのようなご要件で？」

「はあ、電話で話しただろう。今日は冬萌・・・私の娘の挨拶に来たんだ」

「おお！ そうでしたそうでした！ して、その冬萌様はどちらに？」

『『どちらに』って、ここに・・・』

右を見て、左を見て、察した冬魅は冷や汗を流しながら後ろを見る。だが居ない。表面上は冷静に、然れど内心は大慌てで小首を傾げているじいやと目を合わせる。

「・・・・・・・・・・はぐれた」

絞り出すように口から出たその言葉は何とも弱々しいものだった。



「……よし、次」

ドアを閉めて小走りし、次の扉を開く。

……ふむ、人の気配は無しか。

「……次」

また閉めて隣の扉を開く。まるでホラゲーの主人公のように恐れる事無く部屋を周り（探索はしていない）、母様を探し続けてはいるが未だに人っ子一人として見付からない。

まだ朝とは言ってもそれなりに日が登ってるから、使用人の一人くらい居てもおかしくないと思うんだが本当に誰も居ない。それに外の光が全然届いて無いし、明かりも少

ないから日没時のように暗い。

これまで見て来た部屋はベッド等の一通りの物はあるが使っていないさそうな感じ（恐らく来客用）だったり、本当に何も無かったり、単なる物置になっていたりと・・・うん、色々と無駄遣いしている。

こんな感じの大豪邸に住んでみたいとは思ったけど、これ程まで部屋が使われていない現状を目の当たりにするとそんな憧れも消え去る。まあ、元よりこんな幽霊屋敷はこつちから願ひ下げだが。

・・・幽霊と言えば、あのロビーで見た執事の幽霊はどうなったのだろうか？あれ以来、会っていないどころか何のアクションも無いんだけど。

何も無いって余計に怖いよね。襲うなら襲うでさっさと追い掛けるなりなんなりしてくれた方が精神的にかなり楽なのに。

——ドドドドドツ!!

「ひいひい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!嘘です!嘘です!嘘です!来ないでえ!!!」

丁度、頭上の天井に誰かがかなり激しく走ったような音が響いて来た。何の心構えもしていなかった俺は反射的に近くにあった扉を開いて、その中に身を隠してしゃがんで頭を両手で覆う。うー☆

「……どっか行つた？」

正気を取り戻すと音はもうしていない。扉を開いて外の様子を確認しようとしたが……まあ、うん。無理だ。怖い。

あの……あれだ。逃げ切つたと思つて振り返つたら背後に居た、つていう展開を妄想しちゃうから超怖い。

開けたら目の前に立っていた、とかさ。うん、無理。本当に勘弁して。てか、なんでこんな目に遭わなきゃいけないんだ？そもそもその発端は……よし、帰つたら搾り取つてやるから覚悟しておけよ、母様？

「……まじか」

……今さ、ふと気が付いたんだけど、最初に見た執事の幽霊はふよふよ浮か

んでたよね？それが突然、足音を立てまくるってなんかおかしくね？

いや、態とつて線もあるけど……もしかしなくても、この屋敷に二体居たりする？

……いや、いやいやいやいや。ま、まつさかー。そ、そんな事ある訳無いよー。きっと母様が慌てて探してるんだよー。でも俺は外に出る勇気が無いからここに居る事に気付いて。超気付いて。愛のぱうわーとかで何とかならない？

さて、そろそろ背後から聞こえる物音から目を逸らすのをやめるか。本当になんなのか、この怒涛の展開は。

さっきまでノーアクションだったじゃん。なんで急に畳み掛けてくる訳？仕舞いには気絶して現実から逃げてやろうか？

………チラッ

「うう……あああ……」

「ツ~~~~~!!?!?!」

見てない見てない見てない!!俺は何も見えてない!貞子みたいなのがベッドの上で這いずつてた気がするけど絶ツツ対に気の所為だ!!画面無いもん!井戸も無いもん!貞子が出て来る訳無いじゃん!!

「だあ……れえ……?」

居る!やつぱ居る!!三体目!?三体も居るの!?母様は何処!?早くしないと娘が r 1 8 G みたいな芸術品になっちゃうよ!

「誰か……居る……の?」

「ひいひいひいひい!!!」(恐怖)

「ぎゃああああああ!!!」(驚愕)

無理!もう無理!!出るぞお前!俺はこの部屋から出るぞ!!外に誰が居るとか知った事か!現在進行形で俺の背後に居るからそつちの方が優先じゃボケエ!!

(なぐんてあかないのおおお!!)



入って来た時と同じように押しつけて開けようとするが当然、開く訳が無い。

何故開かないのか理解出来ず、そうしてガチャガチャしたり、引き付けて力任せに開けようとした所で気が付いた。

あ、押すんじゃないで引くんだったわ。

入った時に押したなら、出る時は引く。当たり前ではあるが、錯乱しており恐怖で思考低下、おまけに背後には化け物（？）が居るから後退したくないという心理状態なので気が付かなかった。

これで抜け出せる、と扉を開いて気が抜けた瞬間、最悪な者が目の前に立っていた。ソレは胴体しか見えなかったから一瞬分からなかったが、顔を上にあげる途中で間違はなくあの時の幽霊執事であると本能的に察した。

違う。纏ってるオーラがまるで違う。先程までのオーラは不気味ではあるが、まだ静かで穏やかだった。だが、目の前でこちらを見下ろす幽霊はそのオーラの量を数倍に増し、燃え盛る炎のように荒々しく、まるで怒り狂ってるかのようだ。

その怒りに呼応するかののように館が震え、周囲の家具がユラユラと浮かび上がる。恐怖で視線さえも外せず、その恐ろしい骨のお面を半泣きになって見ていると怒声が響い

た。

「お嬢様に何晒しとんじゃゴルアアア!!」

ドスの効いた、聴く者を萎縮させるような怒りを乗せた咆哮と呼ぶに相應しい怒号。恐慌状態にあり、そんなモノを真正面から浴びた俺はと言うと——

「……………」

立ったまま気絶し、白目を向いて失禁していた。

◇

「貴様ア……!ここから生きて帰れるとオ……思う——」

「おい」

怒り狂った執事が既に意識の無いまま粗相をしている冬萌に襲い掛かろうとしたそ

の時、執事のその頭蓋を背後から何者かにガツシリと片手で掴まれた。それはもう顔全体に罅ひびが入る程にガツシリと。

静かに放たれたその声に執事は何一つ反応が出来ない。この姿になってから久しく感じていなかった、明確な死の恐怖。それが執事の身体を硬直させていた。

「人様の娘に何をしている？」

それは何処までも抑揚が無く、ただ台詞を読んてるだけのような何の感情も込められてはいない。だが、言葉に込められてはいなくとも、掴んだ本人である冬魅からは執事以上に殺気が霊力となって溢れ出していた。

「・・・取り敢えず、十回死ね」

その言葉を最後に断末魔を上げる暇すら与える事無く、頭蓋を握り潰した。



天蓋付きのベッドって初めて見た。

それが目覚めた時の感想だった。幽霊に襲われたかと思つたら、気付けばもふもふの上質な毛布とふかふかのベッドに挟まれ、程良く沈む枕に頭を預けている。

．．．!?

「幽霊は!？」

飛び起きて周囲を見渡す。相も変わらず薄暗い部屋であり、一人部屋だとすれば僅か大き過ぎる気がする。まあ、言つてしまえば探索中に見掛けた部屋と同じなので、つまりはまだあの幽霊屋敷から出られてない訳だ。

．．．気付けば自宅とか、そんな都合がいい展開は無いか。さて、となるとどうしようか。こうして寝ていたという事は十中八九誰かが移動させたって事だろうし．．．。

「よし、待機していよう。おやすみ」

頭まで被り直して全身をふかふかのもふもふに包み込む。誰かが運んだなら、その内にあちらからこんにちはしてくるだろう。うむ、こういう時は無闇矢鱈に移動するとお助けキャラとすれ違いになるって、物知りの冬萌は知っている。

ほわあ♡直に肌に触れるから、身動きする度に全身が滅茶苦茶気持ちいい♡

「……ん？『直に』？」

はい、ちよつと確認入りませす。

ふむふむ……背中が丸出し……のスク水みたいな感じ……下半身は……おまんこがギリギリ収まって……おお、お尻はアナルしか隠れてないぞ。ぷりぷりのロリ尻が面白いくらい丸出だ。

結論から言うと、面積の小ささなら前に着たレオタードよりも酷いぞ。ハイレグって奴に近い。しかも乳首の形が丸分かなりな程にピッチリで伸びるから、身体のラインがモロに出る。母様が見たら勃起不可避だろうなあ。

試しに乳首クリクリ……くふっ……やっぱり、擦っただけで気持ちよくなれないか……。

「冬萌」

「ひよえ、!?!」

乳首弄りに夢中になつていた訳では無いが、人の接近にまるで気が付かなかつた。身体を跳ねさせて上を見上げれば、母様がジーツと観察するように見下ろしていた。

「え．．．あ、母様．．．．!?!いや、違ッ!」

安心すると同時に母様の目が現在進行形で乳首を摘んでいる俺の手に向けられていゝる事に気が付き、即座に否定しようとした。

もう色々と晒した仲であるとは言え、オナニーしていたとバレるのはかなり恥ずかしい。それが誤解であるなら尚の事．．．いや、うん。気持ちよければそのまましようとしたから、あながち誤解ではないのだが．．．まあ、それはそれ。

しかし、だからこそ否定しようにも上手い理由が思い浮かばなかつた。そのまま『気持ちいいか確認してた』なんて言えば、もうね。普通にアウト。そのまま犯される未来しか見えない。

そうして黙った俺に何を思ったのか、母様はベッドに腰を下ろして俺を膝の上に乗せた。意味は分からんが取り敢えず、頭をお胸様に預けてぽへーとしていると突然、擦っただけだった筈の乳首に電流が走った。

「ひうツ!?!♡」

何事かと思えば、母様の仕業だった。このハイレグ?の所為でピンピンに勃起しているのが余計に強調された乳首をこねくり回したり、ぐにぐに摘んだり、先っぽをコシヨコシヨして・・・くふう♡引っ張るのダメえ♡

「母様あ・・・んん♡んん♡♡ツ・・・あ♡イクツ・・・ツ~~~~♡♡♡」

不意打ちで靈力一杯注ぎ込むのらめえ♡♡

あう・・・乳首コリコリになっちゃったあ♡

「ま、待つて♡イッた♡イッたから、乳首ダメえ♡・・・イクツ♡イクイクツ♡あッ♡あ

あゝくゝ♡♡」

乳首での連続絶頂。おまんこを触られずにイクというのは中々に腰にクルるものがあり、いつの間にか母様の上で足を180度に広げ、腰を突き出しビクンビクンとおまんこを痙攣させていた。

そんなアへっている俺を母様は優しく包み込んで慈しむように頭を撫でてくれた。霊力も途切れて快樂が引き、その暖かさに何もかもを預けていると母様の膝の上から降りされた。

「不知火を呼んでくる。少し待つてなさい」

そう言つて部屋を出て行つた母様。それに比例して母様からの霊力が無くなるから、快樂も引いていくのだがそうなると自身の愛液でグシヨグシヨになった衣服が気になつて仕方無い。

しかし、この服の脱ぎ方が全く分からん。適当に動かすとグチヨグチヨして気持ち悪いし・・・お、ぶつくりまんこに引つ掛けて横に寄せるコレ・・・エロくね？



「冬魅く？冬萌ちゃんの様子はどうか？」

おっぱい。

入室してきた人物に対して反射的に抱いた感想がそれだった。何だあれ。母様よりもデカいぞ。

ノースリーブのシャツでお胸様がデカ過ぎるなからなのか、一番上とお腹辺りのボタンしか止めてないとか絶対に狙ってるだろ。そこにちんぽ突っ込めって誘ってんのか？谷間丸出しじゃねえか。

それによく見てみれば胸の辺りにボタン着いてないし。あれか？止めても弾け飛ぶからもうこのままでいいや、的なそんなエッチい理由か？ご馳走様です。

下は短めのタイトスカートを履いている。肉付きが良過ぎてスカートがムチムチになってるし、スラツとした脚を歪ませるスカートの端が中々に悩ましい。

後、声がエロい。なんだこのねっとりボイス。耳元で囁かれたら勃起不可避やな。いや、今はちんぽ無いけど。

「あら〜？・・・あらあら♡」

色々失礼な感想を抱いているとお胸様……じゃなかった。その持ち主が微笑ましそうに頬に片手を当てて微笑んだ。

元々、垂れ目で随分と穏やかそうな人だという印象を抱くのだが……心做しか、胸やおまんこやら、そう言った場所に視線を感じるのとは気の所為か？

いや、そもそも全身隈無く観察してような……ああ、もしかして今着てる服？を見てるのか。家にこんなドスケベ衣装なんて無いし、消去法でこのおっぱいさんのなんだろう。

……あ、おまんこ丸出しだった。

「ごめんなさいね。家のじいやが怖がらせちゃったみたいで。何処か悪い所は無い？」

歩くだけでおっぱいをバインバインさせながらこちらまで寄って来て、目の前で前屈みになって視線を合わせたおっぱいさんが心配そうに覗き込んで来る。

近くに來られて一層思ったがおっぱいがしゅごい。見惚れるとかではなく、圧倒される意味でしゅごい。幾らなんでもデカ過ぎじゃね？それでそのほっそりスタイルとかマジですか。

……あ、丸出しどころか股全開だった。さ、流石に初対面の人に布越しとは言え、イッ

たばかりのおまんこを見られるのは恥ずかしいから閉じよう……ひう♡おまんこぐつしよりしてて、少し気持ち悪い……。

「だ、大丈夫……です……えっと、神薙冬萌と言います」

「あらあら、ご丁寧にどうも。『水城不知火』よ。貴女のお母さんとは昔からの仲なのよ」

特に話す話題も無かったから自己紹介したら、そんな返事が帰って来た。

ほへえ、この人が水城家の人だったのか。それに昔からつてのは……幼馴染つて事かな？ 凄いなあ、こんな美人同士が幼馴染なんて。きつと当時は色々と周囲の性癖を拗らせたに違いない。

あれ？ 待てよ。て事は、この人が忍者？ ……ええー、ウツソだー。こんな身体で俊敏に動けないでしょ。お胸様が凄まじい事になるぞ。あ、もしかしてお色気の術とかそういうヤツ？

不知火さん、ちよつと忍法に興味があるんで俺に対してヤツてくれませんか？（下心）

「冬萌ちゃんと同い年の私の娘が居るのだけれど、ごめんなさい。……んっ♡……まだ夢の中なの。今日が楽しみであんまり寝れてなかったのよ、あの子。……あつ♡……」

冬萌ちゃんに驚いて一度起きたのだけれど……っ♡……やっぱり睡魔には勝てなかつたみたい♡」

何かと邪推してると不知火さんがそんな事を話し出した。けどさ、もう少し隠す努力をしよう？角度的にスカートの中身が丸見えなんです。何でノーパンなんですか。

いや、そこはいいんです。役得ですからね。問題はだね、ちみい。なーんでふたなりちんぽをギンギンにさせていらっしやるんですかあ？

しかも、何普通にシコシコし始めてるんですか。蹲踞の姿勢でシコシコするなんて、エッチ過ぎるでしょ。俺がこんなドスケベ衣装着てる時に目の前でそんな事されたら……ああ、ほら。俺の乳首が勃起してるの丸分かりじゃん。

「ん？……んふふ♡どうしたの？冬萌ちゃん。何かあったのかしら？」

「……い、いや……なんでも……無いです……」

目敏く見付けた不知火さんが舌舐めずりをしながら、そんな事を聞いて来た。視線が肉食獣のそれだと丸分かりな程に怪しく光らせ、視線は俺のピンピンになった乳首に釘付け。

隠せば、色々肯定しているような気がして気付いていないフリを貫くしかない。

どうしたも何も貴女が急にシコシコしだしたから、こちらビツクリし過ぎてどう対処すればいいか分からないだけだよ。決して、ご立派なギンギン勃起ちんぽに興奮して顔を赤らめてなんかないから。

「あつ♡…ん♡イクツ♡…うつ♡」

「ツ!?!♡」

量は少ないものの、真っ白でこつてりしたザーメンがピュルピュルと俺目掛けて飛んできた。おっぱい…じゃなくて、不知火さんのドスケベオナニーショーに夢中だった俺は避けずに、子種を吐き出す尿道をただジツと見ていた。

そうすると必然的に俺の顔にぶっかけられる訳で…ムワツと顔中に広がるイカ臭くきい臭においに頭がクラクラしてしまう。

と言うか、初対面の子供相手に見抜きして子種ぶっ掛けるとか失礼にも程があるだろ。いいぞ、もつとやれ。

「んっ…ふう♡あらあら、ごめんなさい。すぐに拭き取るわね」



お臍で微妙に固定して、人差し指でカチを擦ったり、根元の部分をクルクルなぞったり……

「あつ♡ダメっ♡いい、それ凄いい♡」

裏筋をススス、と何度も行ったり来たりさせたり……

「や、やだ♡またイツちやうう♡娘と同年の子に弄ばれてえ♡……イツちやうう♡♡」

お腹を押し付けて亀頭を……って嘘!?もうイツたの!?

「あつ♡……ああ♡……あはあ♡」

あつ、やば♡こんなこつてり特濃ザーメンをお臍に直撃されたら……うひい♡お、お臍を伝って♡子宮に刺激がああ♡

「……んふふ♡……や、やってくれたわね♡まだ幼いから手加減してあげたけど、も

うお遊びは終わりよ♡大丈夫、冬萌ちゃんは天蓋の皺の数を数えてるだけでいいのよ♡」

瞬間、視界が一気に移り変わり、背後をポフンツと柔らかい何かに包まれ、眼前にはおっぱいが広がった。

状況を説明するとベッドに横にされ、覆い被さるようになんて見下ろされている。そして、股の間にしっかりとピンピンちんぽを通して、逃げられないようにロックされている。

「そして、これをこうして・・・んしょ♡」

「やあ・・・♡おちんぼが中に入って来るウ♡♡」

「ふふつ♡全く抵抗しないなんて、オナホとしての心構えがしっかりしてるのね♡」

や、熱いよお♡

お股の部分から、おちんぼをハイレグの隙間に挿入されて、エライ事になっちゃったのお♡

ピッチリスーツだから、おちんぼの形がクツキリ浮き出でて超エッチい♡



「こおら♡足を自分から広げてお股ゆるゆるアピールは可愛いけど、そうじゃないでしよ♡こうして・・・んっ♡しっかり足で挟みなさい♡♡」

「あ♡・・・ん♡」

無意識に開脚という名の服従ポーズを決めていた俺の両足をピツタリと閉じられ、太腿で熱々のちんぽを強制的にホルドさせられた。

好き勝手言われて言い返そうとしたが、直後にちんぽをヌコヌコされてそれも叶わない。だって、結果的に全身でセンズリされてるんだもん。思った以上に気持ち良くて少しビツクリしてる。

しかも、俺の無けなしのちっばいを鷲掴みにしてパイズリまでされて・・・くう♡滅茶苦茶に捏ねくり回されて乳首擦れるう♡

「お♡んお♡い♡い♡ひ♡い♡」

「ああ♡いいわあ♡これよこれえ♡・・・んふふっ♡本当に可愛い声で啼くわね♡あの人を思い出しちゃう♡貴女の先代様もよくこうして私の慰み者になつたのよ♡♡・・・ん♡あっ♡イグツ♡♡ヤバイ♡久しぶりで・・・もうう♡・・・あッ♡ツ♡んほお♡」

お。お。お。お。お。♡♡♡ 出りゆうう。う。う。う。♡♡♡

「やあ♡熱いの来たあ♡♡あつ♡溢れ出て……。んぐツ!んつ……。んお……。んお……。んお……。んぐんぐ♡♡♡」

多過ぎイ♡子種が溢れ出て溺れちゃうよお♡。。。こ、このままだと溺れ死んじやい  
 そうだから、飲み干してただけだから♡別に強姦紛いの事をしている変態さんに媚び  
 売ってる訳じゃないからな♡

「ほお。。。♡あはあ。。。やつぱり最高だわあ♡。。。んお♡ちよ、冬萌ちゃん。。。  
 駄目よ♡今イツたばかりで。。。敏感なお♡カ리를そんなにコシヨコシヨした  
 らあ。。。んツ♡こらツ♡駄目つて。。。くう♡も、もう怒ったわ♡冬萌ちゃ  
 んが悪いのんほお。おお。おお♡しよ、しよんにやああ♡♡ちんぼ穴に指突つ込むの禁  
 止い♡♡卑怯よそんなの♡あ、あの人に調教されたかりやあ♡♡すぐイツちゃうによ  
 お。お。お。お。お。♡♡♡」

うお!?なんだこの人の尿道。。。物凄くすんなりと人差し指が入ったぞ。。。あ、な  
 んか競り上がって来てる。。。ふむ。少し懲らしめるか。

「!?…いひい、いい♡ら、らめえええ、ええ♡塞がにやれえええ♡射精れないのお♡こてこてのザーメンが逆流しちゃうのお♡♡」

流石に全部は無理か。隙間からブピュツて溢れ出してる…♡♡♡むう、それにしてもこの人、流石に少し五月蠅いなあ。

でも黙らせようにも手は届かないし、口の中には未だに飲み込み切れない子種で一杯だし…♡♡♡あ、丁度いいや。さつきからガツチリ抱き締められっ放しの脚を使おう。

「んぶ…♡あ、駄目…♡そんな事されたら…♡♡♡んほお、お、おお、おお、お♡♡♡」

え…♡なんか今までで一番イツてるんですけど。まさか、顔を踏ん付けられる事に興奮したのか？

…♡♡♡ふーん。

「や・・・駄目♡これ以上、そのちっちゃくて可愛いぷにな脚で踏んだら・・・  
んふう、うう、う♡♡おとお、おお、お、♡♡」

うおつと!?!・・・不知火さんが思いつ切り仰げ反つて、ちんぽを服の中に突っ込んでる所為でその反動でなんか立場が逆転したんですけど・・・。

こんな大胆過ぎる体位の変え方があつたなんて・・・世界は広いなあ。

「んふう・・・んぐう♡いひい、い、♡も、もつとお♡もつと踏み踏みしてえ♡」

・・・それにしてもまさか不知火さんがドMの変態だつたなんてなあ。今だつて、開き直つたのか俺の足を変わらず拘束しながら、自分から俺の足に顔を押し付けて来る。

その間もちろんぽはイキつ放しなのだが体位の関係上、溢れ出た分はそのまま下に落ちて行く。と言うか、そろそろ隙間に入った子種をとうにかしたいんだけど。

全身を子種が泳いでるみたいで・・・それにオまんこ辺りに行くとおまんこが自主的にゴクゴクしちゃう訳で・・・あつ♡子種に気付かれた♡心做しか一気にオまんこに押し寄せて来たあ♡♡

「ほお、♡んふう♡♡スうー♡ハアー♡はあ♡はあ♡．．．おお、ん!? ああ、ああ、あ、あ、♡♡キチャああ、あ、♡♡」

!? え、ちよ、どゆ事!? 何もしてないのに突然大量の子種が．．．．．いひいんツ♡♡こ、こら♡おまんこにそんな大量に押し寄せたらあ♡ぜ、全部受け止めるからア♡そんな慌てないでよオオ♡♡

訳も分からず、まるで噴水のように溢れ出た子種を俺．．．のおまんこは必死に飲み込み、それすら追い付かぬ速度で襲われ、子種自らに無理矢理侵入されてしまう。

まるで意思を持っているかのような子種にドキドキしてしまうが、それよりも好奇心が勝り、更に激しく脚で顔を踏み付ける。

それは不知火さん：．．いや、ドMの変態おば様が完全に気を失うまで続いたのであった。

# 第11話・ドスケベビッチ冬萌ちゃん♡（でもやつぱりクソ雑魚）

「ツ♡・・・ん♡お♡・・・ツ♡」

「あ、壊れちゃった」

ベッドにうつ伏せで枕に顔を埋め、腰を突き出しちんぽだけベッドの縁からはみ出た体勢でおぼ様は完全に気絶した。

ベッドの縁を板に見立て、足で踏み付けてビクンビクン跳ねるちんぽを固定し、ぐにぐにと力を込めるだけで簡単に射精していた。

しかし、流石に出し過ぎたのか、潮をちんぽから大量に吹き出すのを最後にもう痙攣するだけで何も出なくなった。

先程までの妖艶さは何処へやら。白目で舌を突き出し、色んな液体で顔がグチャグチャになった阿呆面を晒したおぼ様にきて、どうしようかと悩んでいると背後に気配を感じた。

「冬萌」

「あ、母様！」

条件反射の如く、母様へと抱き着く。お胸様と両手で優しく抱き止めてくれて熱い抱擁を交わす。

んふう♡最高の夢心地♡ちんぽも胸も無駄にデカいだけのお婆様とは大違い♡

「母様、お婆様壊れちゃった」

「ん？・・・ああ、そういう事か。大丈夫だ。いつもの事だから、すぐに治るだろ」

「・・・え、昔からそうなの？」

「昔からと言うか、母様・・・お前の先代がそうなるように調教したんだ」

「ん♡・・・へ、へえ・・・そう、なんだ・・・」

ヌプ♡とシレッツと指をおまんこに入れられて、腔内をサスサスと撫でられる。結局、攻めるだけで何の手出しもされなかったおまんこはそれだけでトロトロにされ、快楽に耐える為にお胸様に顔を埋める。

「んっ♡・・・ふっ♡・・・か、母様あ♡」  
 「どうした？」

「おまんこお♡おまんこぐちよぐちよにしてえ♡おば様のちんぽ、見た目だけの情けない、挿入れる前に使い物になら無くなっちゃったのお♡♡だからやあ・・・♡」

「その割には子種で一杯のようだが？」

「ふえ・・・？・・・ち、違うのお♡それはあ♡・・・んひゅ?!♡」

勝手におまんこがゴツクンしただけ、そう言おうとしたが子宮口を指で撫でられ、それどころでは無くなる。あれだけ子宮内の子種を出さないように閉じていた子宮口が母様にコシヨコシヨされただけでアツサリとパクパクしだした。

そのまま物欲しそうな子宮口を摘まれて、外へと引き摺り出される。

「ん、ほお、お、おお、お♡♡」

腰を突き出し、子宮が宙でプルンプルンと震える。当の俺はと言うと、今までの我慢していたツケが回って来たのか、あまりの快楽に身体が硬直してしまう。

必死に耐えようと全身に力を込め、そうするとこんな状況にさせられた元凶である母





い。生存本能すらも蹂躪してくる母様の熟練の手コキに、もう生命として敵わないと細胞の隅々が理解してしまっている。

自分の身体なのに、主導権は母様のもの。その事実には臆気な意識の中で気付き、更に興奮してしまうのは仕方ない事だ。

「おっ♡…おっ♡…おっ♡…おっ♡…おっ♡…おっ♡」

最早、力すら入らず、ただ母様に身体を預ける。それでも突き出した腰は元に戻らず、今も尚扱かれている。

薄れ行く意識の中で最後に感じたのは、一体何年ぶりに体感したのか定かでは無い射精感と、まるで射精するかの如く吐き出された、情けないおば様の子種達が元の場合へと逃げるように俺の子宮口から吐き出される圧倒的な快楽と解放感であった。

◇

「おっ♡ほっ♡…♡…♡…♡…♡…♡…♡…??」

「あ、本当に起きたわ」

「な？面白いだろ」

両乳首に走る電流で一瞬にして意識が覚醒した。

訳が分からず、横になったままキョロキョロすると二人の美女が覗き込んでいた。

「・・・何してるの？」

「お寝坊さんを起こしただけだ」

「もうお昼よ、冬萌ちゃん。ゆきかぜも起きたらしいし、そろそろ昼食にしようと思うの」

二人の美女、母様とおば様はどんな男でも魅了出来る微笑みを浮かべながらそう言った。・・・それぞれ、ピッチリドスケベスーツから丸見えの俺の乳首をコリコリと弄りながら。

「母様」

「なんだ？」

「冬萌はもう少し真面な起こし方があったのではないかと抗議したい」

「嫌だったか？」

「・・・霊力が無いから嫌」

「ふふっ、可愛い奴め」

ほふほふと頭を撫でられる。そんな母様との至福の時を無視して、クソ雑魚ちゃんぽお様が未だに俺の乳首を弄り、おまんこにまで手を伸ばし、俺の手にフル勃起ちゃんぽを擦り付けようとして来たので軽くシバいておいた。

無様な嬌声を上げながら仰け反る変態は置いといて、母様に抱っこされて部屋を出る。

その間も乳首とおまんこを好き勝手に弄られ、服の下のご立派なビンビンちゃんぽを押し当てられるが、極自然に霊力を流し込まれた俺に抵抗する術も気も無かった。

小さい快樂の波を継続的に受けながらも、俺達は食堂へと向かった。そこには予想していた金持ちっぽい長いテーブルではなく、普通の一般家庭サイズの椅子に少女が寝惚け眼でポツンと座っていた。

「・・・・・・・・すびー・・・・・・・・」

あ、寝た。

「・・・誰、この可愛い子」

「不知火の娘だ」

不知火・・・ああ、おば様の事か。

そのままテーブルに突っ伏して幸せそうに涎を垂らす褐色ロリを見詰めていたら、母様が床に下ろしてくれた。

トコトコと自分の足で歩いて隣の椅子に座る。そして、同じ様にテーブルに頭を乗せてジーツと観察してみる。

「え、人間だったの？」

「・・・どういう意味だ？」

思わず出た独り言に母様が反応した。流石に意味がわからなかったのか、困惑増し増しの声で問い質して来た。

「さつき会った・・・と思う。気絶する前に」

「・・・そう言えば、ゆきかぜの部屋で気絶したんだっただか」

ゆきかぜ・・・ふむ、このアホ可愛い寝顔のロリはゆきかぜと言うのか。可愛い。

こうして机に突っ伏した状態だと腰まで届く長い茶髪。それでピンと来たのだが、あの時の呻き声を上げていたお化け二号はこの子だったらしい。

寝起きで声も枯れていたのか、あれはマジで怖かった。

いつ起きるのか、とジーツと観察し続けていると俺達が入って来た所とは別のドアが開いた。身体を起こしてそちらを見る・・・と同時に全身能力を総動員して、母様の方へと逃げる。

「か、母様あああ、あ、!!」

「おっほ♡」

途中で躓いてそのまま母様の股間に顔からダイブしたが、そんなの気にしてる暇など

無い。出来る限り身体を密着させて、何がなんでも離してなるものか、と腰に抱き着く。

「ちよツ・・・んふ♡と、冬萌ツ♡・・・急に、どうしツ・・・た♡」

「お、お化け！お化け！お化けが!!」

「冬萌ちゃんの悲鳴が聞こえたけど、何かあったの!?!」

「んにゃあ・・・んんん？ふわあ・・・あ、爺や・・・おはよ・・・なんで落ち込んでるの?」

「あ、いえ・・・お嬢様、お気になさらず」

なんか一瞬でカオスになったけど、俺はそれどころではない。今でも鮮明に思い出せるあの幽霊が目の前に居る。

正気を保って居られる筈も無く、普通にトラウマとなった存在を目の当たりにして恐慌状態に陥る。母様が荒い息をしているのにも気付かず泣き叫ぶ事暫く。

場が収まったのはそれから数分後の事で。

テーブルに母様と俺、おば様とゆきかぜが対面同士に座っている・・・俺は母様の膝の上で必死にしがみ付いているけど。

だって、普通にテーブルの横に居るもん。

なんで皆、そんなに平然としていられるの？

大人組は分かるけど、ゆきかぜも子供じゃん。

怖いじゃん。あれ、普通に怖いじゃん。

幽霊どうこう以前にビジュアル怖過ぎるよ。

「ほら、冬萌。怖くないぞー。唯の骨だぞー」

「冬魅、それ全く慰めになってないわよ。子供にとって、骨は普通に怖いでしょ」

「え、そうなのか？」

「・・・そういう類に耐性があり過ぎるのも考えものね。貴女のお母様も普通に怖がつてたでしょ」

「怖がる母様は凄く可愛かったぞ」

「そうね・・・」

談笑する二人を気にせず、横目でジッと幽霊を見る。なんか、心做しか中の炎がシヨボくなってるけど、だからって怖いものは怖い。



「あー・・・爺や、少し席を外してくれる？冬萌ちゃん、暫くは無理そうだから」  
「・・・はい、奥様。冬魅様、冬萌様、誠に申し訳ございませんでした」

一礼して、フワフワと部屋を出て行く執事姿の幽霊。扉を開けるのではなく、普通にすり抜けて出て行くものだから、思わずビクツと震えてしまった。

少しして気配が消えたので緊張も解れてくる。母様に終始、頭を撫でられていた事に気付くくらいには余裕が戻り、恐る恐る自分の席に座る。

「それじゃ、いただきましょうか」

「そうだな」

大丈夫だと悟った二人が手を合わせて合掌。俺と興味深そうにこちらを凝視してる目の前のゆきかぜも続く様に合掌。

テーブルの上には高級そうな食器に、これまた高級そうな食材が美しく盛りられている。全て洋食で、正に貴族つて感じの豪華な昼食。目の前ではゆきかぜがスパゲッティを大量に口につ込んでモツキュモツキュして色々と台無しにしてるけど・・・。  
なにあれ可愛い。

「ほーら、ゆきかぜ。口に一杯付いてるわよー」  
「んー」

おば様が持った布巾にゆきかぜが汚れた口を持って行く。自分でするのではなく、やってもらうという前提で行動している姿が子供っぽくて可愛らしい。

「あ、母様。それ頂戴」

「・・・今、自分の食べただろ」

「あー・・・」

「はあ、仕方無い。ほら、あーん」

「あー・・・ん」

メインというヤツか。この肉料理のステーキ、素敵。柔らかくて味も濃過ぎない。普段は和食だから、こうした洋食料理は本当に新鮮。朝から激しい運動したから、まだまだ食べられるぞい。



昼食を済ませ、子供同士で遊んで来なさいと言われたのだが……さて、どうしたものか。

「……………」

「うにゅ……………に<sup>何</sup>やに<sup>す</sup>ひゅんによ」

現在、終始黙り続けているゆきかぜに身体を弄られております。

顔をペタペタとしたと思ったら、今度は頬つぺたを掴まれてグイーンって伸ばされたり、お餅のようにコネコネされたり。

いつまで続くのだろうか、とされるがままになっていると突然動きが止まり、むにゅつと両頬を押し潰された。それはまるでムンクの叫びの様に、母様譲りの美形を崩す変顔となった。

「……………」

「……………ぷっ」

あ、笑った。……笑った!?

「アツハツハツハツハツ!!」

この小娘、黙っていれば調子に乗りやがって。

あれだけ弄っていたのに、今では床でゴロゴロと笑い転げている。流石の冬萌もこれには遺憾の意を表明します。

幾ら可愛くても腹立つモノは腹立つのです。

ンモツチーン!!

「ひーっ……!ふうっ……!」

「てりやー!」

「うわっ!?!ちよ、な、何すんのよ!」

「それはこっちの台詞!あれだけ好き放題しておいて、お咎め無しと思うなよ!!」

お腹を抱えて仰向けになって息切れしていたゆきかぜの背中に馬乗りになり、手を

ワツキワキさせる。俺が何をするのか察して暴れようとするが、今更遅い。

「ほくら、こちよこちよこちよこちよこちよ！」

「アヒヤヒヤヒヤ!!や、止め!いひひひひ!!」

脇を閉じて抵抗しようとするが、そもそも脇に膝を挿し込んで横腹を擦っているので閉じる事すら出来ない。故に足をジタバタする事が出来ず、罰はゆきかぜが笑い声すら挙げれなくなるまで続いた。

「ツ・・・あツ・・・・・・ひひツ・・・」

虚ろな目で涎を垂らし、ビクビクと震える姿は正にレイプ直後。笑い過ぎたが故に頬も紅潮しててなんかエロい。

・・・ん？

「ちよつと失礼しまーす」

満身創痍のゆきかぜをゴロンと仰向けにする。

今、ゆきかぜはTシャツに丈が膝上くらいのスカートを履いている訳だが、その状態でうつ伏せにして足の方から見ると色々丸見えになる。仰向けになってもまた然り。母様から聞いてたから、そこまで驚きはなかったのだけど……。

「……………なんで勃起してんの？」

可愛らしい女児用のパンツツから、これまた可愛らしいロリおちんちんが顔を出していた。しかも、なんかビクビク痙攣して液体がトロリと……………。

え、もしかしてイツたの？

「……………追加でこちよこちよ」

「あ、ツ……………あひ、ツ……………」

お、おお……………なんだろ。ピクンピクンするおちんちん、凄く可愛い。今までは母様とか藍様とかおば様とか、もうお下品過ぎるくらいのにイチモツだから、これはこれで新鮮。

・・・しょ、食後のデザートがまだだし・・・チラツチラツ。

「・・・よし、意識が朦朧としてる。・・・い、いただきまーす・・・はむ」

んツ!?す、凄い・・・♡

口の中でピチピチしてる♡

んふふ♡初めてなのかな？意識は殆ど無いみたいだけだ、身体は困惑してるのがおちんちんから伝わって来る。

それでもやっぱり本能なのか。ドンドントロトロの我慢汁が溢れ出してくる。お子様ちゃんほげだ、性欲は中々にありそう♡

「はむはむ♡・・・んっ♡・・・ん？」

お？なんか一際跳ねたと思つたら、ピユツピユツと出て来た。へえ、まだ精子は出来てないのかな。凄いサラサラで飲み易い。味もなんか・・・甘い。

「ぶっぶっ・・・♡あはあ♡まだまだ元気だあ♡・・・も、もう我慢出来ないよお♡」

おまんこにピッチリ張り付くドスケベスーツを横にズラし、ぷにぷにのぷっくりまんこに引つ掛けて何の躊躇も無くおまんこを丸出しにする。

ゆきかぜの上に跨り、両手を顔の横に着けて四つん這いのまま、腰を突き出してガニ股にする。

トロトロと流れ落ちる愛液がまるで涎のようで、今か今かと待ち侘びているようで。快楽に染まった俺の顔がニヤニヤとニヤけるのが止められない。

「うえへへ♡ごめんねえ、こんな事しちゃって♡でもお、ゆきかぜが悪いんだからね♡そんなお子様ちゃんぽを一生懸命勃起させて、冬萌を誘惑するから♡責任取ってもらわないとだねえ♡♡♡えへ♡えへへ♡無垢で何も知らない五歳の初めて・・・いっただっきまーす♡♡」

「お、ほ♡」

あつはあ・・・♡腔内で凄いビクンビクンしてるう♡挿入ただけでイツちやつたのかなあ？まだ子種も作れない癖に、頑張って孕ませようとして・・・かあわいい♡♡ほらッ♡腰振ってあげるから、もつと一杯射精して♡頑張って冬萌を気持ち良くさせ



て♡♡トントン♡

「あッ♡…いひひいいい♡♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡ほお♡  
おおお♡♡」

んもお…さつきから、アへつてばつかじやん。そんなちつちやな舌出して啼くつて事はキスして欲しいのかな？熱い熱い熱烈なチューをして欲しいんだよね？

仕方無いよね♡そっちが強請つて来たんだから♡いひひ♡こつちの初めても冬萌が貰つてあげる♡♡逃げられないように頭を抱き締めて…。

「あーむ♡んふっ♡甘あい♡…じゆるっ、ずるるる♡♡もっひよ♡もっひよおお♡  
…べろっっ♡ぢゅううっ♡♡」

あつ♡おつきくなつてるう♡♡えへへ♡冬萌に身体を食られて興奮してるんだあ♡  
♡嬉しいなあ♡嬉しいなあ♡♡

もつともつくと食べ尽くしてあげるからあ♡戻れないくらい冬萌を身体に刻み込んであげる♡♡えへへ♡えへへ♡♡

「あつ♡あつ♡す、凄っ♡この子、ずっとイッてる♡乳首ピンピンにして仰け反って、頑張って快樂逃がそうとしてる♡♡いひひ♡服の上からでも丸見えな程に弱点晒して：：  
本当にお馬鹿♡♡」

ちっぱいが丸出しになるまで服を捲るとまだ膨らんで無いお胸に可愛いピンクの乳首がこれまた可愛らしくピクンピクンしてる♡

不規則に指で上下にペシペシ弾いてやれば・・・いひひ♡乳首でイッてるよ、この子♡エッチだなあ♡あの変態おば様に既に調教されてたのかな？

思えば、あの程度の擦りであへるんだから、相当に敏感なのは確か。こんなスケベな身体のロリにはやっぱりお仕置が必要だな♡♡

「よいしょ・・・んふうー♡子宮を・・・んっ♡」

身体を起こして、下腹部に集中する。さつきからお預けばかりくらつてる腹ペコ子宮を自力で降ろして・・・おっほ♡お子様おちんちん発く見く♡

「バキュームフエラ子宮バージョン♡・・・年端もいかない癖に冬萌を誘惑した悪い子には・・・もつともつくと責任を取ってもらえないとねえ♡ひひっ♡」

床に押さえ付けられ、おちんちんはおまんこの中にズツポし♡逃げ道なんて何処にも無い快樂地獄のお時間だよー♡

「あひっ♡や、やばっ♡これ、思った以上に♡いひいッ。♡き、気持ちいい・・・♡♡あつ♡え、ええ!?!ちよ、おしつことか聞いてッ・・・いひい♡ひい♡い♡熱い♡♡♡だ、ダメえ♡それ子種じやないかりやああ♡♡あつ♡い、言う事聞かないのお♡冬萌の子宮なのにい♡おしつこを子種と勘違いしてゴクゴクしちやうによお♡お♡冬萌の子宮馬鹿過ぎいい♡♡じ、自分から便所に成り下がろうとするにやんてえ♡ええ♡♡え♡♡やめりよ♡お♡お♡♡んほお♡お!?!・・・へ?え、ちよ、腰動かしちやっ♡♡ほお♡お♡お♡お♡お♡♡嘘ッ♡気絶してるのに腰動かして♡♡・・・え、エ口過ぎい♡東と一緒に凄いいエツちな子なのお♡お♡♡冬萌を便器としてしか見てない癖に、しつかりと孕まそうとしてくるなんて・・・最低で・・・さ、最高だよお・・・♡♡」



「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

どうも冬萌です。只今、母様に抱っこされて夕焼けの中を帰宅中です。

あの後・・・ゆきかぜを散々食って気付いたら意識すらない口りに返り討ちにあつて、終わった頃に母様達がやって来ました。

なんかタイミング良過ぎね？とも思ってたけど、そんな事よりも優先すべき事があつて。

ゆきかぜ、本当に気絶しちやっただよね。完全に意識無い状態なの。・・・やり過ぎたなって、後悔してる。

賢者タイムと言うか・・・まあ、うん。本当、後悔してる。

「・・・・・・・・・・母様」

「ん？どうした？」

「・・・嫌われちゃったかな」

「そんな事は無いと思うぞ」

「で、でも……また……束みたい……嫌いって言われたら……」

「……冬萌」

「ッ!？」

「大丈夫だから、心配するな」

「……うん」

母様に優しく撫でられ、包み込む様に抱き締められた。それが何よりも心地好くて……微睡みの中で自然と母様のお胸様に身体を預けた。